『Master-Slave』
「chaining」

巽 ヒロヲ

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

１－１

「晩ご飯、何にしようかなあ♪」
　初夏の日差しの降り注ぐ街の歩道で、彼女はそうつぶやいた。
　すでに夕刻だが、まだ空は充分に明るい。
　たまに吹く風が、ひらひらしたミントグリーンの彼女のワンピースを、なぶるように過ぎていく。やや子どもっぽいデザインは、小柄な体によく似合っているが、人目を引くほどに大きなその胸には、いささかアンバランスな感じだ。
「今日は、せっかくご主人様、帰ってくる日だし……」
　そう言う彼女の幼げな顔が、ほにゃ、とほころぶ。嬉しくてたまらない、といった風情だ。
「焼肉とか、うなぎとかじゃ、ちょっとあからさまかもしれないけど……少しガーリックきかすくらいが、いいのかなア」
　口の中だけでそう言いながらスーパーに入る彼女の柔らかそうな頬が、ぽっと染まる。
「やだ、あたしってば……」
　と、彼女の持つやや装飾過剰なバッグの中で、携帯電話が軽快な音楽を奏でだした。
「は、はい、槙本です」
「由奈か？」
　思わず名乗ってしまった彼女に、電話口の声が問いかけた。
「あ、ご主人様？」
　大声を出しかけて、彼女――由奈は慌てて口を押さえた。それが、あまり街中で口にすべき言葉ではないことを思い出したのだ。
「家にいなかったみたいだが……買い出しか？」
「はい――ご主人様、今日の夕飯は、何がいいですか？」
　そんな由奈の言葉に、電話の向こうの“ご主人様”は、少し困ったように沈黙した後、言った。
「あのな由奈、今日は、ちょっと帰れそうにないんだ」
「え？」
「人手が足りなくてちょっとごたごたしてるんだ。手が離せなくて」
「そう……ですか……」
　由奈と呼ばれた少女は、悲しげに肩を落として、そう言った。他人が見ても気の毒になるくらいの落胆ぶりだ。
「夜行バスで、明日の朝には帰れる。そんなにがっかりするな」
「はい……」
「明日は一日中可愛がってやるから」

Neon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「えっ？　えっと……」
　由奈は、その大きな垂れ気味の目を大きく見開いた。
「あの……おねがい、します」
　そして、耳たぶまで赤くしながら、小さな声でそう言う。
「素直だな、お前は。……じゃあ、そういうことで」
　くつくつと笑いながら、“ご主人様”が言う。
「はい、気をつけて帰ってきてくださいね」
「ああ」
　ぷつん、とあっけなく切れてしまった電話の液晶表示を、由奈はぼんやりと眺めた。
「さみしい、な……」
　そして、思わずつぶやいてしまう。
　由奈は、片手でそっと自分の肩を抱きしめた。

　槙本由奈の主人の名は、結城遼という。
　主人といっても、配偶者などではない。その言葉通り、隷従と奉仕の対象だ。
　由奈は自分を遼の奴隷であると考えているし、遼も由奈をそのように扱っている。互いが、互いに特別な感情を有していることを告白した後でも、表向き、その関係は変わっていない。
　その、由奈の主人である遼は、今、東京にいる。以前、家出をして身一つで上京した際に世話になった知人の葬式に出席しているのだ。
「俺は、歳の割には葬式の経験積んでるしな」
　そう、冗談めかして言う遼の両親は、すでに他界している。また、父親の再婚相手――いわゆる義母も、故人である。
　その義母が生んだ子どもたちとは、遼は別居している。遼は、ただ由奈とだけ、二人きりで、いささか広すぎる古風な洋館に暮らしていた。
　その遼がいない以上、由奈はまた一人でその館での一夜を明かさなくてはならない。
　夏でもなお涼しいくらいの広々とした食堂で、一人わびしく食事をすることを考えて、由奈は、年よりもかなり幼く見られる小さな体を、ほんの少し震わせた。
「あーっ、センパイじゃないですかあ」
　と、スーパーの売り場でそう呼びかけられて、由奈は思わず振り向いた。左右で結ばれた由奈の柔らかそうな髪が、ふわりと揺れる。
「槙本センパイ！　こっち住んでたんですかぁ？」
　そう元気な声で呼びかけてきたのは、ショートカットの少女だった。
　やや堅そうな髪を七三で分け、きりっとした眉の下の目は、やや吊り気味だ。しかし、可愛らしい鼻と口元のラインのおかげで、あまりキツい印象は受けない。ざっくりしたサマージャケットにＴシャツ、細身のジーンズにごつい靴というボーイッシュないでたちが、

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

その顔に似合っていた。
「えっと……ちづる、ちゃん？」
「そうでーす。橘千鶴でっす♪」
　少女はそう名乗って、由奈の正面に立った。身長は、由奈より頭半分は高い。それでも、平均よりやや高めといったくらいだが。
「一年ぶり、かな？」
「ちょうど、それくらいですね。……突然学校やめちゃったんで、部の連中、びっくりしてたんですよ」
「う、うん、ちょっとね」
　千鶴の無邪気そうな物言いに、由奈は口篭もった。
「本橋さん追いかけて家出したんじゃないかって噂も、ありましたけど」
「そんなんじゃないってば」
　ちょっと笑って、由奈はこの元気な後輩の冗談を受け流す。
「……センパイ、変わりましたね」
「え？」
「前は、本橋さんの話になると、真っ赤になっちゃってたのに」
「それは……あたしだって、いつまでも子どもじゃないし」
「そう、ですか？」
　千鶴は、そう言って、今年十九歳のはずの由奈の姿を見直した。小柄で童顔な由奈は、下手をすると、未だに中学生に間違われそうだ。少なくとも、千鶴の方が確実に年上に見える。
「ところで、センパイ」
　千鶴が、何でもなさそうな口調で、言った。
「お時間、あります？　ちょっと……相談したいことが、あるんですけど」
「相談？　あたしに？」
「はい」
　そう返事をする千鶴の顔は、内心の緊張を無理に押し隠している様子である。由奈は、少し不審げに眉を寄せた。
（なんか、千鶴ちゃん、真剣な顔……）
「じゃ、あそこの喫茶店入ろっか？」
「え……！　えっと、じゃなくて、あたしの部屋で」
「千鶴ちゃんの？」
「はい。えーっと……ダイエットしてるし、お小遣いピンチだし」
　そう言われると、根が素直な由奈は、それ以上目の前の後輩を疑ったりしない。
　そして由奈は、千鶴に導かれるまま、バスに乗って彼女の家へと向かった。

Xeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

　千鶴の家は、特にこれといった特色のない、スレート葺きの一戸建てだった。二階にある千鶴の部屋は、小奇麗に暖色系統で統一されている。
　由奈が不思議に思ったのは、彼女の部屋にヌイグルミの類が一つもなかったことだった。（他は、普通の女のコの部屋なのになあ……）
　置き場に困るほどヌイグルミを集めている由奈にとっては、妙に新鮮な感じがする。
　その代わりなのかどうか、壁には、バスケットボール・プレイヤーらしき黒人のポスターが貼ってあった。
　由奈には、黒人の顔の見分けなどつかない。千鶴とともにバスケットボール部のマネージャーをしてはいたが、そもそもバスケットボールのルールさえ、正確には把握していなかった。
　自分が、つい一年ほど前まで高校生をやっていたという事実が、ひどく遠く思える。
「お待たせ〜♪」
　妙にはしゃいだ声の千鶴が、トレイにアイスコーヒーを二つ載せて、自室に戻ってきた。
「ありがと……でも、そんな気を使わなくてもいいのに」
　ミルクとシュガーを入れながら、由奈が言う。
「いえ、べつに、気を使ってるなんて」
　千鶴の声がどこか上ずっているように聞こえて、由奈は小首をかしげた。そうすると、ますますその童顔が幼く見える。
「で……相談事って？」
「えっとですねえ」
　言いながら、千鶴は、ごそごそとベッドの下から何かを取り出そうと四つん這いになった。
「まずは、コレ見てもらってから、お話したいんですけど」
　千鶴が取り出したのは、一本のビデオテープだった。
　ラベルも、何も貼られていない、無愛想な黒い直方体である。
　ぞく、となぜか由奈は悪寒を覚えた。
　しかし、千鶴は、妙ににやけたような笑いを浮かべながら、部屋のすみにある、ビデオと一体型になったテレビに、そのビデオテープをセットする。
「あ、あの……千鶴ちゃん……？」
　言いかけた由奈の方に、千鶴がどこか妖しげな流し目をちらりとよこす。
　再生が、始まった。
　一瞬画面が大きく乱れ、そして、次第に映像が安定していく。
「……！」
　由奈は、息を飲んだ。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

うそ寒い懸念とともに抱いたかすかな予感が、あっけなく現実のものとなったのである。
画面の中で、一人の少女が、豪奢な革張りのソファーに腰掛けていた。
少女は、その髪を左右に分けて結んでいる、プラスチックの飾りのついたゴムひも以外、その身に一糸もまとっていない。
少女の股間に、犯罪的に幼いいスリットが刻まれているのが、はっきりと見て取れた。しかし、モザイクを含め、何の修正も入っていない。
少女は、はにかむような微笑みを浮かべながら、そっとこちらを上目遣いに見つめていた。
左右の手は交差して、その幼げな肢体からは考えられないくらい豊かな胸を、恥ずかしげに隠している。
「これ、センパイですよね……」
かすれたような声で、千鶴が言う。それは、質問ではなく、確認ですらなかった。由奈を追い詰めるための言葉である。
そして、画面の中の少女は、間違いようもなく、由奈その人だった。
「な、なんで……千鶴ちゃんが、こんなモノを……」
由奈の声は、哀れなほどに震えている。
そんな、現実における由奈の気持ちなど知らぬげに、画面の中の由奈は、頬を桜色に染めながら、そっと胸を隠していた手をどかした。
そして、右手を、ほとんど無毛の、ぷっくりとした恥丘にあてがう。
「兄貴が、あるツテで手に入れたんです」
画面の中の由奈と、そして自分の傍らにいる由奈とを、交互に見つめながら、千鶴は言った。
「兄貴はセンパイのこと知らなかったけど、スゴい巨乳の女のコが出てるって言って大騒ぎしてて、で、あたしも見せてもらったんです」
「……」
「あたし、すごくビックリしちゃった……」
画面の中の由奈は、じれったくなるほどゆっくりと、自らの秘部にあてがった右手を動かし始めた。
左手は、そろそろと右の乳房に伸ばされ、その小さな手の平にはおさまりきらないほどの巨乳を、やわやわと揉みはじめる。
「ン……」
指先が、ピンク色の乳首に触れ、由奈は小さく声をあげた。そして、切なげな表情を浮かべながら、左手の指先で乳首をつまむ。
「んん……ん……んく……ふぅン……」
画面の中の自らの媚声に、由奈は耳を塞ぎそうになった。
「ダメですよ、センパイ」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

そんな由奈の心を見透かしたように、千鶴が言う。
「きちんと、見て……」
そう言われて、由奈は、落としていた視線を再び画面に向けた。
画面の奥では、由奈の指使いが、次第に大胆になっている。
「ア……んんん……んふ……んんン、んっ……」
くりくりと左右の乳首を交互になぶりながら、右手の中指をスリットに浅く潜らせ、上下に動かす。
そうしながらも、由奈は、自らの唇を舐めながら、カメラの方に潤んだ瞳を向けた。
「おねがい、です……ください……」
ささやくような声で、由奈が何事かをおねだりする。
と、カメラを構えているらしき男の声が、何事かを言った。マイクが指向性のためか、その内容まではよく聞き取れない。
「はい……」
由奈は、すこし顔を横に向け、頬を赤く染めながら、ゆっくりと脚を開いていった。
そして、自らのクレヴァスを、両手の指先で割り広げる。
鮮やかな紅色のその部分はすでにきらきらと濡れ光り、愛液は革張りのソファーの上にまでこぼれている。
さらに何かを命じられ、由奈はこっくりと肯いた。
そして、右手の中指をその部分にあてがい、小さく回すように動かす。
「あァ……ッ」
つぷっ、と由奈の指が、膣口に浅く入りこんだ。
その指をくちゅくちゅと動かしながら、カメラに向かって、何か訴えかけるような視線をよこす。
カメラが、由奈に近付いていく。どうやらハンディ・タイプのビデオカメラのようだ。
カメラを持つ男がすぐ前に立つと、由奈はソファーからずり落ちるように、床にひざまずいた。
そして、高級そうなじゅうたんの上に膝立ちになり、カメラを構える男の股間に手を伸ばす。
男が身に付けているのは、黒いワイシャツのみだ。半ば血液を充填させ、鎌首をもたげつつあるその股間のものが、そのワイシャツのすそを持ち上げている。
由奈は、その赤黒いペニスに、そっと右手を添えた。左手は自らの股間に回している。
「あむ……」
由奈の小さな口が、グロテスクな牡器官をぱっくりと咥える。
咥えたまま、しばらく動きを見せない。しかし、男が小さく身じろぎをしたところを見ると、どうやら彼女の口腔の中で、その舌が亀頭部分を刺激しているらしい。
由奈の口にはいささか大きすぎるようなその剛直に、次第に力がみなぎり、さらに一回

Xeon PDF Driver Trial
www.xeon.com.tw

り大きくなっていく。
　由奈は、その可憐な唇を半ば開いたまま、亀頭を一度解放した。そのまま、うんと舌を伸ばして、情熱的にシャフトに絡める。
　たちまち、ペニス全体が由奈の唾液で濡れていくのを、カメラはすぐ近くから撮影した。
　時折、由奈は恥ずかしげに伏せていた目を、カメラのレンズに向ける。その童顔からは考えられないような、妙に艶っぽい流し目だ。
　その目元が、欲情でぽおっと染まっている。
「んっ……ふうン……んむ……んんん……」
　由奈は、顔全体を男の股間に押しつけるようにして、ペニスの裏筋に舌を這わせ、陰嚢を優しく口に含んだ。シャフトに塗りつけられた由奈自身の唾液が、無残に彼女の顔を汚す。
　ぴくぴくとペニスが快感にしゃくりあげると、由奈は嬉しそうに微笑んだ。
　そして、再び口を精一杯あけて、ペニスを口いっぱいにほおばる。
　ちらっ、と男の顔のほうに視線をよこし、由奈は情熱的にフェラチオを始めた。
　ぢゅぢゅぢゅっ、と由奈が口内の唾液とともにペニスを吸い上げる淫猥な音が響く。
　由奈は、ふンふンという媚びるような鼻声をあげながら、その可愛らしい顔をねじるようにしてディープスロートを続けた。
　マイクが、男の荒い呼吸を拾っている。
　と、いきなり、男の左手が、由奈の髪をつかんだ。
　そして、男が乱暴に腰を使い出す。
「んんんッ？」
　驚きに目を見開いた由奈の顔が、苦しげに歪む。しかし、男は腰を動かすのを止めようとはしない。
「んぶっ！　んっ！　んぐ！　んんン！　ンーッ！」
　くぐもったうめき声とともに、大量の唾液がだらだらとだらしなく由奈の口元からこぼれ、その豊かな胸元を汚している。
「ン……！　んんん……！　んウ……んふン……んんんッ……んん〜ン」
　次第に、由奈の声と表情に、変化が訪れた。
　乱暴に頭をぐらぐらとゆすぶられ、唇に凶暴な男根を出し入れされながらも、その声は濡れ、顔には恍惚の表情が浮かび始めている。
　浅ましく静脈を浮かせたペニスに口を犯されながら、由奈は明らかに感じていた。
　由奈の両手は、音が出るくらい激しく、自らの秘部をまさぐっている。その胸は、男の動きに応えるように、ゆさゆさと揺れていた。
　そんな由奈の姿を、カメラが、時に激しくぶれながらも捕らえ続けている。
　男の腰が、ひときわ強く、由奈の顔に押しつけられた。
「んんんンーッ！」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

　苦悶と歓喜に、由奈の形のいい眉がたわむ。
「んッ……！」
　由奈と男の動きが、しばし止まる。
　息詰まるような沈黙の後、こくっ、こくっという、由奈が喉を鳴らしながら何かを塩化する音が響いた。
　男が、まるで余韻を楽しむように、ゆっくりと腰を引く。
　唾液と精液にたっぷりと塗れたそれは、まだ半ば勃起したままだ。
「ンはぁーっ……」
　喉奥に注ぎ込まれた粘つく精液を全て飲み干し、満足げにため息をついた後、由奈は、そのペニスに熱く濡れた視線を絡ませた。

「すごいんですね、センパイって……」
　そう千鶴に声をかけられ、由奈ははっと我に返った。
　顔を向けると、千鶴の吊り気味の目が、ねっとりとした光をたたえている。
　そんな千鶴の瞳を、由奈は怯える小動物のような目で見返した。
　確かに遼と由奈は、少なくない収入のために、自らの痴態をビデオに収め、裏のルートを通して販売していた。
　しかしそのビデオが、顔にモザイクもかからず、この近辺で流通しているなど、ありえないことだった。しかし、目の前に展開されている現実を認めないわけにはいかない。
　たとえ今、遼とともに世間から隔絶した生活を営んでいるにしても、由奈にだって個人的な知り合いはいる。このようなビデオが知人に見られて、平気なはずがない。
「あ、あのね……千鶴ちゃん……」
　何か言いかける由奈の唇に、千鶴は、立てた人差し指を当てた。
「つまんないこと言わないで下さいね、センパイ」
「え……っと、つまんない、ことって？」
「幾ら欲しいの？　とか、そういうことです」
　そう言いながら、千鶴が、ボーイッシュな顔を由奈に寄せる。
「じゃあ、いったいどうすれば……」
「最初は、こんな気持ちじゃなかったんですよ、あたしだって」
　千鶴が、再び由奈の言葉を遮る。
「初めは、センパイがこんなビデオに出てるってことにビックリしただけでした。でも、なんでだか気になって、何度も何度も見てるうちに……あたし……」
「あ、ダメ……！」
　千鶴は、身をよじって逃げようとする由奈の肩を抱き、強引に唇を奪った。
「んんんッ！」
　千鶴の舌が、由奈の口腔を蹂躙する。

Neon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

顔を離したとき、千鶴の顔には、ひどく危険な表情が浮かんでいた。
「あたしね……このビデオに、バージン捧げちゃったんです」
「……？」
「ビデオ観ながら、もう、どうにもたまらなくなって、通販で買ったバイブ、入れちゃったんです……。すごく……すごく、気持ちよかった……」
「千鶴、ちゃん……」
もはや由奈は何を言っていいか分からない。
「でも、それでも、一人でするんじゃ、何か足りなかったんです。だからあたし、一生懸命、センパイのこと探して……調べて……追っかけて……」
ゆっくりと、千鶴は立ちあがった。
千鶴の腕から解放された由奈も、立ちあがろうとする。しかし、なぜか力が入らない。
よろけた由奈は、そのまま、背後にある大きなクッションに身を預けるように仰臥する形になった。
「ま、まさか……」
由奈が、目を見開きながら、飲みかけのアイスコーヒーのグラスに視線を向ける。
「よく効くお薬ですね、センパイ♪」
言いながら、千鶴はするすると着ているものを脱ぎ捨てた。
健康的な小麦色の肌が、カーテンから漏れる夏の日差しを反射している。
「今日は、親も帰りが遅いし……時間はたっぷりあります」
とうとう、千鶴は、由奈の前にそのスレンダーな裸体をさらした。
小ぶりだが形のいい乳房から、くびれたウェスト、そしてひきしまったヒップに至る曲線に、由奈は状況を忘れて見入ってしまう。
「センパイも、脱いで……」
そう言いながら、手足の自由の利かない由奈の服を、千鶴は丁寧に脱がし始めた。
「ダ、ダメ……っ。やめて、千鶴ちゃん……！」
由奈は、ふるふると首を振りながら、必死で訴える。が、千鶴は、口元に笑みを浮かべながら、ワンピースのボタンを外し、その前をくつろげていく。
「あは……やっぱり、ホンモノは違いますね」
そんなことを言いながら、千鶴は、ブラに包まれた由奈の胸に手を這わせた。
「いやァ……」
か細く声をあげ、由奈が顔を背ける。
「けっこう、大人っぽい下着ですね」
例のふりふりワンピースを脱がし、由奈を下着姿にした千鶴が、笑みを含んだ口調で言う。千鶴の言葉通り、由奈の下着は、色は白ながらレースをふんだんに使った代物だ。
今日帰るはずだった遼を想いながら選んだ下着をそう評されて、由奈の顔が真っ赤になる。

Xeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「センパイ……」
　そう呼びかけられ、千鶴に向き直った由奈は、息を飲んだ。
　千鶴が、今まで由奈が見たこともないような器具を手にしていたのである。黒いシリコン製のその器具は、長さ四十センチほど。凶暴に反り返ったその両端には、亀頭を模したようなふくらみがある。
「センパイのこと犯すために、あたし、こんなものまで買っちゃったんですから……」
　そう言いながら、千鶴は、その先端をたっぷりと舐めしゃぶった。
　そして、淫靡に濡れ光るその片方を、ゆっくりと自らの中に入れていく。
「んん……あは……ン……」
　千鶴は、切なそうな声をあげながら、由奈の前でへたりこんだ。
　思わず正座してしまったその股間からは、まるで冗談のように、人工のペニスがそそり立っている。
「さ、センパイ、ビデオみたいに、おしゃぶりして……」
　そう言いながら、千鶴は、膝立ちで由奈ににじり寄った。
　そして、クッションの上に横たわる由奈の上半身を膝でまたぎ、その子どもっぽさの残る口元に、いわゆる双頭ディルドーの先端を押しつける。
「や、やめて、千鶴ちゃん……」
「ダーメ♪」
　そう言って、千鶴は、強引にシリコン製の剛直を由奈の口内に押しこんだ。
「んぶぶぶっ！」
　異様な質感の人工ペニスに口をふさがれ、由奈は苦しげな声をあげた。
「あア……スゴい……センパイ、ビデオと同じ顔、してる……っ！」
　千鶴は、興奮に声を上ずらせながら、ぎこちなく腰を動かし始めた。
　シリコンのディルドーに口腔を犯され、由奈はぽろぽろと大粒の涙をこぼす。
　しかし、その四肢にはほとんど力が入らず、千鶴の体を押しのけようとしても、ただいたずらにもがくだけだ。
「もう、いいかな……」
　千鶴は、ようやく由奈の口を解放した。由奈が、けほけほと小さく咳き込む。
　自らの唇を淫らに舐めながら、千鶴は、由奈の脚を両手で大きく広げた。
「や、やめてェ……」
「うわア♪　センパイ、すっごく濡れてる〜っ」
「やあああああーっ！」
　由奈は、涙をこぼしながらはげしくかぶりを振った。
「すごぉい……これだったら、おしゃぶりしてもらわなくてもよかったかなア」
　そんなことを言いながら、千鶴は、由奈の脚を一度閉じ、するするとショーツを脱がせる。

Xeon PDF Driver Trial
www.xeon.com.tw

「ウソぉ……ウソよォ……」
「ウソなんかじゃないですよ。ホラ……」
　再び由奈の脚を開き、愛液に濡れるそこに指を遊ばせながら、千鶴が言った。
「くちゅくちゅいってるの、聞こえません？」
　その言葉通り、千鶴の長い指に弄ばれる由奈のその部分は、淫猥に湿った音を響かせる。
「あァ……イヤあああああぁ……」
　羞恥と屈辱に、由奈は泣き声をあげた。
「センパイ……これから、センパイのこと、犯します……」
　そう宣言し、千鶴は、由奈の両足を抱えるようにして、その部分にディルドーの先端をあてがった。
「イヤ、イヤあ……」
　由奈が、童女のように首を振る。
「ああ……早く、入れてください……」
　突然の自分自身の声に、由奈ははっと顔を上げた。
　それは、未だ再生されていたビデオの中の由奈の声だった。男のペニスに再び奉仕し、すっかり力を取り戻させた由奈が、その濡れたシャフトに頬ずりしながら、挿入をねだっているのだ。
「ホラ、やっぱりセンパイ、入れて欲しいんでしょ？」
　絶妙なタイミングで聞こえたビデオのセリフにくすくす笑いながら、千鶴が言う。
「ちがうの！　あたし、そんな……ああああああアッ！」
　みなまで言わせず、千鶴は、由奈の膣内にディルドーを一気に挿入した。
「ダメえ！　お願い！　抜いて、抜いてえーッ！」
　絶叫する由奈の涙に濡れた顔を陶然と眺めながら、千鶴は、ゆるゆると腰を動かし始めた。
　人工ペニスのデフォルメされた雁首が、容赦なく由奈の膣内をえぐる。
「スゴい……あたし、センパイのこと、犯しちゃってるゥ……」
　そう言いながら、千鶴は、自らの腰の動きに応じてたぷたぷと揺れる由奈の双乳に手を伸ばした。
　そして、思いきりその柔らかな膨らみを揉みしだく。
「ひああアーッ！」
　由奈が、高い悲鳴をあげた。
　それでも、千鶴は、由奈の豊かな乳房への、そのいささか乱暴な愛撫をやめようとはしない。
　由奈のピンク色の乳首が、みるみる尖っていく。
「乳首、立ってる……感じてるんですね、センパイ……」
　熱に浮かされたような口調で、千鶴は言った。

Xeon PDF Driver Trial
www.xeon.com.tw

「やっぱりセンパイ、マゾなんですね」
「ちがう、ちがうのォ……ああァ……」
「ウソ。だって、あんなに乱暴にされて、すごく嬉しそうだったじゃないですか」
「そ、そんなこと……」
　口篭もる由奈の乳首を、千鶴は残酷にひねりあげた。
「いあああああああーッ！」
　由奈が、必死で身をよじる。
「んうぅ……ひっく……ひいン……や、やめて、やめてえェ……」
　子どものようにすすり泣く由奈の体に、千鶴は覆い被さった。
　そして、ぐりぐりと腰を動かしながらも、由奈の顔に唇を這わせ、舌を伸ばしてこぼれおちる涙を舐めとる。
「ふわ……ンくぅ……んうぅン……」
　喘ぎ声をこらえながら、どうにか、由奈は千鶴の体を押しのけようとする。
　未だ千鶴の盛った薬の効果は切れておらず、千鶴の体はびくともしない。
　それでも、少しずつ、由奈の体に、力が戻ってきつつあるようだ。即効性な分だけ、効果は長続きしないのだろう。
（は……早く……何とかして、千鶴ちゃんを止めなきゃ……）
　次第に高まってくる被虐の官能に飲みこまれそうになりながら、由奈は祈るような気持ちでそう思った。
　そんな由奈の気持ちを嘲笑うかのように、千鶴の繰り出す動きは、確実に由奈の性感を高め、快楽を紡ぎ出していく。
　千鶴は、ようやくコツをつかんだらしく、由奈の細い肩を両腕で抱きながら、リズミカルに腰を動かし始めた。そして、由奈の一番奥にまでディルドーを届かせる。
「ンはァっ！」
　子宮口を小突かれ、由奈はとうとうあからさまな喘ぎ声をあげてしまった。
「これが、イイんですか？　センパイ……」
　由奈から快楽の反応を引きずり出すことに成功した千鶴は、自らも快感に眉をたわめながら、訊いた。
　その間も、腰を大きくグラインドさせ、激しく由奈を貫き続ける。
「ダメ……おねがい、ちづるちゃん……ゆるして、ゆるしてェ……」
　そう訴える由奈の声は、ひどく頼りない。
「やっぱり、感じてるんだ……うれしい……」
　千鶴は、ますます腰の動きを速めた。
「ンあああ！　はくうッ！　あ、あああ！　そんなに、そんなにしたら……もう……ッ！」
　由奈の小さな体が、絶頂の予感にぶるぶると震える。
「ああッ……センパイ、センパイ……っ！」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

千鶴の声も、切羽詰っていく。
千鶴は、思いきり由奈の首筋を吸った。
「あああああああああアーッ！」
その由奈の声は、キスマークを残される恐怖に対するものではなく、純粋な快楽に対する反応だった。
二人の少女の靡肉がたてる、ぐちゅぐちゅといういやらしい音が、淫猥な二重奏を響かせる。
「センパイ……イクって……イクって言って……！」
千鶴が、由奈の耳元に口を寄せ、熱い吐息の合間に、そうせがむ。
「あ、あああッ！　ふあああああッ！」
ようやく力の戻った両腕で、由奈は、我知らず千鶴の体を抱き締めていた。
そして、脚を大胆に開き、腰を浮かして、シリコンのペニスをさらに自らの中へと迎え入れようとする。
由奈と千鶴は、互いに互いの体に腕を回しながら、激しく快楽を貪った。双頭ディルドーに犯された二つの淫裂から、しぶくように愛液が漏れ出る。
先に絶頂を迎えたのは、由奈だった。
「イクうっ！」
無意識のうちに、千鶴のスレンダーな裸体をぎゅうっと抱き締める。
「イ、イク、イクイクイクっ！　イっちゃう、イっちゃうううううううううううぅーッ！」
小さな体を弓なりに反らせ、がくがくと体を痙攣させながら、由奈は叫んだ。
「ス、スゴいッ！　センパイ……千鶴も、千鶴もッ！」
由奈の膣の激しい収縮をディルドー越しに感じながら、千鶴も、絶頂を迎えた。
「ンあああああああああああああああああああああああああああああああああああアぁーッ！」
生まれて初めて味わうような凄まじい絶頂感に、千鶴は、がっくりと気を失った。

日がとっぷりと暮れた頃になって、由奈はようやく解放された。
「センパイ……」
どこか夢を見ているような頼りない足取りで玄関を出る由奈に、千鶴は声をかけた。
「また、会いましょうね♪」
しかし、由奈は答えない。
（どうしよう……どうしよう……どうしよう……）
とぼとぼとバス停への道を歩きながら、由奈は、出口のない迷路に迷い込んでしまったような気持ちだった。
生温かい湿った風が、由奈の小さな体をけだるく包み込んでいく。

Leon PDF Driver Trial
www.leon.com.tw

よどんだ初夏の空気は星の光を遮り、月は、まだ昇っていなかった。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

２－１

薄暗い、無機質な診療室の中で、一人の少年が立っている。
　少女と見まがうばかりの美少年だ。
　いや、彼の顔を見た者は、十人が十人とも、彼のことを少女であると断ずるだろう。
　柔らかそうな、やや癖のある栗色の髪、大きな二重の目、桜色の唇、首から肩にかけての滑らかなライン……
　それどころか、彼のまとうＴシャツの胸の部分はゆるく膨らみ、その下に発達途上のものとはいえきちんとした乳房を隠しているのが分かる。
　しかし、彼は少女ではなかった。
　彼は下半身に何も身につけていない。その、すらりとした白い脚の付け根の部分に、彼が男である印が、きちんと存在している。
　彼は、その小柄な体にはやや大きなＴシャツのすそを捲り上げ、それを目の前の女性にさらしていた。かすかに、その頬が上気しているように見える。
　それに反して、彼のその部分を見つめる白衣の女は、冷徹なまでに無表情だ。その氷のような美貌に、長い艶やかな黒髪よく似合っている。
「もういいわ、円くん」
　白衣の女は、事務的な口調でそう言って、傍らの事務机の上に広げられたカルテに、ドイツ語で何やら書き記した。
「うふ、よかった」
　円と呼ばれたその少年は、くすくすと笑いながら、キャスター付きの脚に支えられた小さな籠から、ショーツを取りだしてその形のいい脚を通した。
「あれ以上見つめられてたら、ボクの、どうにかなっちゃうとこだったもん」
　そう言いながら、ジーンズ地のスカートをはき、ファスナーを上げる。
「円くん」
　女は、椅子ごと円に向き直り、言った。
「何度も同じことを訊いて悪いけど……手術を受ける気は、ないの？」
「うーん」
　円は、すとんと丸いお尻を丸椅子に落としながら、腕を組んだ。
「確かに、切っちゃえば、水着とかも着れるようになるけど……やっぱ、惜しいよね」
「……」
　まるで、夕食のメニューを迷ってるような軽い口調で、円は続ける。
「それに、このカラダなら、男のコとも女のコとも、仲良くなれるし」
「……円くん」
「なあに？　霧子センセ」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

　かすかに眉を曇らせた女医――村藤霧子に、円がにこにこと微笑みながら聞き返す。
「あなたのその体は、とても危ういバランスの上に立っているのよ。一つの体に、男と女が同居できるほど、人間は柔軟にできてないの」
「じゃあ、ボクのおちんちん切っちゃえば、この体は安定するの？」
「少なくとも、今よりは……」
「そうかなあ」
　円は、妙に思慮深げな声で言った。
「パパがボクにしたことって、まだ、誰もやったことのないことばっかでしょ？　だったら、それをどういじくっても、その結果をきちんと予測することはできないんじゃないの？」
「……」
　霧子は、不覚にも沈黙してしまった。その態度が、円の言ったことが真実であることを告げている。
「霧子センセは、ボクの体じゃなくて、何て言うか……もっと別のものを治そうとしてるんでしょ」
「それは……そうね。認めるわ」
　そう言いながら、霧子はかすかながら戦慄に似たものを感じていた。この目の前の少年の洞察力には、しばしば驚かされる。未だ十五歳というその年齢では考えられないほどだ。
「でも、それは、必要ないよ」
　円は、あっけらかんとした口調で言った。
「ボクの今の立場には、この体が色々と都合がイイんだ♪」
「……」
　霧子はしばし沈黙した後、ため息をついた。
「結城先生はとても優秀な医師だったし、尊敬もしていたけど……私は、正直、罪作りな方だと思うわ」
「パパはね、人よりちょっと寂しがり屋だっただけだよ。ママがいなくなったことに、どうしてもガマンできなかったんだ」
「でも……」
「霧子センセ……パパのこと、好きだったんでしょ？」
　霧子は、鋭い目つきで円の顔をにらみつけた。しかし、円は平気な顔だ。
「ガマンしないで仲良くしてたらよかったのに」
「何でもそうやって性的なことに結びつける点では、あなたはやっぱり異常なのよ」
　霧子が、冷たい口調で言う。
「まずはセックスがあって、その後に人が生まれるんでしょ」
　円は、その少女そのままの顔に不思議な微笑を浮かべながら、言った。
「だったら、人の世の中はセックスとその結果だけでできてるんだよね」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

　そう言いながら、円は流れるような動作で立ち上がった。
「じゃ、お世話サマ」
「……お大事に」
　事務的な口調でそう言う霧子に、円はぺこりとおじぎをして、診療室を出ようとした。
「あ、待って」
　霧子が、不意に円を呼びとめる。
「はい？」
「そろそろ一学期も終わりだし、お役所で手続きをしておく必要があるわ。診断書とかはこっちで書くから、また学校に書類をもらってきてほしいの」
「公文書偽造だね♪」
「小夜歌さんに行ってもらった方が、いいと思うけど」
「お姉ちゃんは自分の学校があるから……ボクが、行きますよ」
　すました顔で、円は言った。
「たまには学校に行ってみたいしね」

　初夏の太陽に熱せられる白茶けた校舎の中で、円は、霧子の指定した書類を受け取った。
「義務教育期間が終わるまでは、いろいろメンドウだね」
　書類に書かれた無内容な文章をぼんやりと読みながら、円は一人つぶやく。
　結城円は十五歳である。本来であれば、まだ中学校に通っていなくてはならない年齢だ。
　が、死んだ父親によって半ば少女に改造された円は、病気療養という名目で、学校には来ていない。円の肢体では、男で通すのはあまりにも無理があったのだ。
　当初その工作をしていたのは円の父親であり、今はその知人である霧子が、手続きを引き継いでいる。
　夕刻だが、太陽は、まだ高い位置にあった。
　生徒がほとんど帰ってしまった校舎の廊下を、円はのんびりと歩き出す。
　どん！
「きゃ！」「わっ！」
　衝撃で、円はたまらず尻もちをついてしまった。
　廊下の角を曲がりかけた円に、そちらから走ってきた少女が正面から衝突してしまったのだ。
　びっくりして目を見開く円の目の前で、セーラー服姿の少女が、やはりぺたんと座り込んでしまってる。その色白な顔は年相応に幼く、長い黒髪とあいまって、ある種の人形を思わせる。
「ゆ、結城くん……？」

Veon PDF Driver Trial
www.veon.com.tw

少女は、そう呟いていた。
円は、ちょっと考え込んで、そして、ゆっくりと立ちあがった。
そして、まだ床に座ったままの少女に手を貸しながら、言う。
「円の友達？」
「え……？　あ……」
少女は、言葉が見つからないようだ。のろのろと立ちあがりながら、円の顔とＴシャツの胸の膨らみ、そしてスカートにと、順々に目を移す。
「あたしは、円の双子の姉で、静っていうの……」
「しずか、さん……？　あ、そうですよね……びっくりしたあ。女の子なんだもん」
ほーっ、と少女は息をついた。
「双子なんですね。顔、そっくり。……あ、あたし、藍原愛美です。結城くんと、同じクラスでした。ちょっとの間だけだったけど」
「ふーん。あたしは、ずっと円とは離れて暮らしてたから、こっちのことは知らないの。ちょっと家の事情が複雑でね」
「だそうですね……。あ、ごめんなさい」
「気にしないで」
にっこりと円は笑った。
「藍原！」
と、円の背後から、若い男の声が響いた。
「何してるんだ？　待ってたんだぞ」
円が振り返ると、二十代半ばくらいのクルーカットの男が、不機嫌そうにこちらを見ている。くだけた服装から察するに、この学校の教員らしいが、円の知らない顔だった。
「す、すいません、先生」
慌てたようにそう言って、少女はフレアスカートをぱたぱたと払った。
「さっきは、ごめんなさいね。あのう……結城くんに、よろしく」
そう言い残して、少女は教師に駆け寄っていった。
そして、何か言いながら、並んで廊下の奥へと歩いていく。
「愛美ちゃん……なんだか、顔色悪かったな」
いつになく真剣な口調でそう言った後で、円は、ふと視線を床に落とした。
「何だろコレ？」
言いながら、床に落ちていたものを拾い上げる。円の細い指先ほどの大きさだ。おそらく、少女――愛美が、円とぶつかったときに落としたものだろう。
形は、瞬間接着剤や携帯用の歯磨きの容器に似ていた。透明なプラスチック製で、中に何やら液体が入っている。突起の先端には、カバーが被さっていた。
カバーを外すと、鋭い針が現れる。
どうやら使い捨ての注射器のようなものらしい。

VeonPDF Driver Trial
www.veon.com.tw

「……」
　円は、その少女じみた顔に似合わない、きな臭い表情を浮かべた。

「で、何？　咄嗟に女のコになったわけ？」
　食後のお茶を淹れながら、円の姉、小夜歌は、呆れたような声で言った。
　姉とはいえ、あまり円とは似ていない。特に、頭の左側でまとめられた髪は艶のある黒色で、円の可愛らしい栗色のくせっ毛とはずいぶんと印象が違う。大きな切れ長の目は、むしろ、二人の腹違いの兄、遼に似ているかもしれない。
「これ以上、ヘンな兄弟増やさないでくれる？」
「変わり者はウチの家系だもん」
　そう言いながら、円は茶碗を両手で持って、息を吹いて冷ました。何気ないその仕草まで、すっかり少女のものだ。
「で、なんていったっけ？　そのコ」
「藍原愛美ちゃん」
　小夜歌の問いに、円が答える。
「珍しいわね。円が、クラスメートの名前を憶えてるなんて」
「可愛いコだったからね」
　そう言いながら、円はお茶をすすった。
「そう……」
「……妬いてるの？」
　そして、小夜歌の顔をじっと見つめる。
　小夜歌は、無言で立ちあがって、テーブルを回って円に近付いた。円も、それに応えるように立ちあがる。
　二人で住むにはやや広すぎるマンションに、沈黙が満ちた。
　小夜歌の漆黒の瞳が、いささか物騒な光をたたえている。
「今日は、女のコになろうか？　それとも男のコとする方がいい？」
　そんな円の不思議な言葉が、リビングに響く。
　小夜歌は、無言で、円を抱き寄せ、その唇を乱暴に奪った。

　小夜歌は、ベッドの上で、円の体を組み敷いていた。
　小夜歌の体は華奢だが、円はそれ以上に小柄である。
　円は、淡いピンク色のキャミソールのみを身に付けていた。下には、何もはいていない。
　一方、小夜歌が身に付けているのは、黒い革製のベルトで構成されたような、不思議な形の下着だった。その、金属のリングが多用されたビザールなデザインの下着は、小夜歌

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

の乳房や恥丘を強調しこそすれ、全く隠していない。
　双方とも、これからすることのために、わざわざ着替えた服装である。
「ン……んんン……んむ……」
　小夜歌の舌が、円の柔らかな唇をこじ開け、その口蓋を小刻みにくすぐっている。
　円はそれに応えるように、小夜歌の舌に舌を絡ませた。その舌を小夜歌の唇が吸い上げる。
　ぴちゃぴちゃという淫らな音を奏でながら、姉と弟は互いの唇を求めあった。
　濃厚なキスを続けながら、小夜歌は、その白い指先を円の股間へと伸ばしていった。
　ひらひらしたキャミソールのすそを持ち上げるようにして、やや細身ながら充分な長さのペニスが、鋭い角度で反りかえっている。
　小夜歌は、弟の陰茎を、きゅっ、と握り締めた。
「んんんんんッ！」
　小夜歌の唇に口をふさがれたまま、円がくぐもった声をあげる。
　ゆっくりと、小夜歌は口を離した。細い唾液の糸が、一瞬、姉弟の唇をつなぎ、消える。
「お姉ちゃん……もっと優しくして……」
　目尻に涙を浮かべながら、円は言う。しかし、小夜歌はその口元に歪んだ笑みを浮かべるのみだ。
「きゃっ！」
　円が、少女のような悲鳴をあげた。
　小夜歌がペニスから手を離し、いきなり円の両脚を持って、その丸みを帯びたお尻を大きく持ち上げたのだ。
　さらに小夜歌は、その膝が肩にくっつくくらいに、円の体を折り曲げる。
「い、いたいよ、お姉ちゃん……ひゃァっ！」
　円が、奇妙な声をあげた。
　小夜歌が、円の太腿の裏側を押さえ込んだまま、天井を向いてしまっているアヌスに口付けしたのである。
　セピア色の、慎ましやかな肉の門の周辺を舌でなぞり、音をたてて吸いたてる。
「そ、そんなにしたら……ンああン……」
　姉の愛撫に応え、円の顔のすぐそばで、そのペニスが、ひくン、ひくンと震えた。
　先端の鈴口から透明な液が漏れ出している。
　小夜歌は、ひとしきり円のアヌスを舐めしゃぶった後、ゆっくりと顔を離した。
　そして、切れ長の目に濡れたような光を浮かべながら、円の顔とペニスを交互に見る。
　どう見てもミドルティーンの少女にしか見えない円の股間で、立派すぎるほど立派なペニスが勃起し、ひくついているその姿が、小夜歌の胸に妖しいざわめきを湧き起こした。
「おねえ、ちゃん……」
　眉を寄せ、唇を半開きにしてそう言う円のすらりとした脚に、小夜歌はさらに体重をか

Neon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

けた。
「あうぅっ！」
　柔らかい円の体が、限界近くまで折り曲げられる。
　苦痛のために切なく歪む円の顔に、円自身のペニスの先端が押しつけられる。
「あ……」
　円は、顔を背けたまま、潤んだとび色の瞳だけを姉の方に向けた。
「自分でしなさいよ、円」
　小夜歌が、興奮で声が震えそうになるのを抑えながら、努めて冷たい口調で言う。
　円が、観念したように目をつむり、おずおずとピンク色の舌を伸ばした。
　円の舌先が、自身の亀頭に触れる。
　ちろっ、ちろっ、ちろっ……と、先走りの汁を漏らし続ける自分のペニスの先端を円が舐めるのを見て、小夜歌は、その年に似合わない妖艶な笑みを浮かべた。
　そして、さらに円の体を折り曲げて、そのペニスを柔らかな唇の合間に押しこむ。
「んんん……ッ」
　円は、自分自身に対する口唇愛撫を強制され、ひどくみじめな声を漏らした。
　ぴちゅ、ぴちゅ、という濡れた音が、エアコンの効いた部屋の中に響く。
「そうよ……もっと、もっと一生懸命やって……」
　小夜歌は、すこし声を上ずらせながら、再び円のお尻に口を寄せた。
　そして、弟の排泄器官に対する淫らな悪戯を再開する。
「ん！　んむむッ！　んんン〜ッ！」
　自らの亀頭に口をふさがれながら、円はくぐもった声をあげた。小夜歌は、その声をもっと引き出そうとするかのように、舌先を尖らせ、度重なる肛虐にすっかり柔らかくなった円のアヌスに侵入させる。
　円は、その白い脚をゆらゆらと揺らしながら、次第に熱心に自身の陰茎に舌を絡めていった。
　ふーッ、ふーッ、という苦しそうな鼻息までが、媚びを含み始めているように聞こえる。
　円は、自分自身の舌使いに、着実に追い詰められつつあった。
　その形のいい眉が八の字にたわみ、小さな拳が、シーツをぎゅっと握り締める。
「まどか……かわいいわよ……」
　小夜歌が、円の白いお尻に口付けを繰り返しながら、そう言う。
　そして小夜歌は、円の直腸に、そのしなやかな指を残酷に突き入れた。
「ンンンンンンンンッ！」
　小夜歌は、円が声にならない声をあげるのにも構わず、巧みに前立腺を刺激する。
　円の口の中で、円の亀頭がさらに膨れ上がった。
「〜ンッッッ！」
　円の口内で、おびただしい量の精液が迸った。

Xeon PDF Driver Trial
www.xeon.com.tw

「ンあッ！　あッ！　ああアーッ！」
　高い声をあげる円の口から解放されたペニスが、びくン、びくン、としゃくりあげ、その度に白濁液を撒き散らす。
　自らの熱い体液に、いたいけな少女そのままの顔を無残に汚され、円は陶然とした表情を浮かべていた。
「あ……ンあああ……ふわァ……」
　細い声をあげ続ける円の腰を、小夜歌はようやく離した。
　ぐったりとシーツの上に体を伸ばした円の体が、ぴくぴくと震えている。
「ふふ……すっごい出したね、円……」
　小夜歌はそう言いながら、円の顔に付着した精液をすすり上げ、舌を伸ばして舐め取った。
　そして、なされるがままの円の口内に、舌を差し入れる。
　円は、まるで母親の乳首を吸う乳児のような至福の表情で、姉の舌を吸うのだった。

　円が我に返ったときには、小夜歌は準備を整えていた。
　あの不思議なデザインのショーツに、毒々しい紫色のディルドーを固定し、その表面にたっぷりとローションを塗ったのである。
「あア……」
　両脚を抱えられ、おぞましい外見のシリコン製の男性器を肛門にあてがわれ、円が声をあげる。
　その声は、アヌスを蹂躙される予感に、甘くとろけきっていた。
　小夜歌の目も欲情に濡れている。しきりに自らの朱唇を舐める姿が、ひどくエロチックだ。
「いくよ、まどか……」
「きて、おねえちゃん……」
　姉と弟が、互いに声を掛け合う。
　そして小夜歌は、一気に腰を進ませた。
「ンアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアーッ！」
　びくン！　と円の華奢な体が弓なりに反りかえった。
　小夜歌が、大きく腰をグラインドさせ、円の直腸粘膜をディルドーでえぐる。
「あッ、あああッ！　んあぅうッ！　ス、スゴい、スゴいよぉッ！」
　円は高い声をあげながら、身をよじった。
　その股間で、力を失っていたペニスが、次第にまた勃起していく。
　小夜歌は、何かにとり憑かれたように腰を動かしながら、円のペニスを右手で握った。熱い血液の流れが、手の平を通して伝わってくるようだ。
　小夜歌は、その細長い指先で、円のシャフトをしごき始めた。

Neon PDF Driver Trial
www.neon.com.tw

「ひあッ！　おねえちゃん、おねえちゃんッ！」
　いやいやをするかのように首を振りながら、円が激しく喘いだ。汗の浮いた額に、柔らかそうなくせっ毛がまとわりついていく。
　円が身悶えるたびに、可愛らしいデザインのキャミソールの下で、発達途上の乳房が揺れるのが、かすかにうかがえた。
　小夜歌は、繊細な指使いで円のペニスをしごきあげながら、アヌスを犯し続ける。
「ダメ……おねえちゃん……そんなに激しくしたら……ボク、ボク……っ！」
「まどかァ……もっと、もっと可愛い声、聞かせて……」
「でも、でももうボク……ッ！」
　その幼い体で受けとめるには激しすぎる性感に、円は、早くも音を上げてしまった。
　小夜歌の手の中で、円のペニスが絶頂の前触れの律動を始める。
「ボク……もう……ダメぇーッ！」
　びくぅッ！　と円の体が跳ねる。
　その瞬間、小夜歌は、円のペニスの根元を思いきり締め上げた。
「きゃあああああああああアアアアアアアアアアアアアアアーッ！」
　円が、高い悲鳴をあげる。
「どう……？　イキたくても、イけないでしょ……？」
　輸送管を圧迫し、強制的に射精を止めながら、小夜歌は悪魔のように優しい声で囁いた。
「ア、ア、アアアッ！　おねえちゃん……イかせて、イかせてよォ……ッ！」
　苦痛と快感に涙を溢れさせながら、悲痛な声で円が訴える。
「ダメよ……もっともっと、可愛く鳴いてくれなきゃ……」
　そう言いながら、小夜歌はますます腰の動きを速くする。
「きゃアッ！　あひッ！　ひあアッ！　ああああアアアッ！」
　円は、その大きな目を見開き、大きく体を反らせた。
「お、おねがい……おねえちゃん……イか、せ、てぇ……」
　そして、やっとの思いでそう言った後、まるで呼吸困難におちいったかのように、ぱくぱくと口を開閉する。
　だが、なおもしばらく弟のアヌスを犯した後、小夜歌はようやく円のペニスを解放した。
「は……ッッッッ！」
　円の絶頂の声は、もはや声にならなかった。
　その代わりのように、先程よりもさらに大量の白濁液が、どびゅびゅびゅうっ！　と凄まじい勢いで噴出する。
　円の精液は円自身の体を汚した上、呆れるほどの飛距離を見せ、栗色の髪にまでべっとりと付着した。
　そんな射精が、二度、三度と繰り返される。
「あ……あ……ア……ッ！」

Zen PDF Driver Trial
www.zen.com.tw

円は、もはや自分が感じているのが苦痛なのか快感なのか、それさえも判断できない様子である。
「ァ……ァ……ァ……」
しばらくして、円の全身からぐったりと力が抜けた。
その顔には、まるで強姦されたあとの処女のように、いかなる表情も浮かんでいない。
そんな円の弛緩しきった体に、小夜歌はゆっくりと覆い被さった。
小夜歌の体からも、すっかり力が抜けている。時折、ぴくン、ぴくンと痙攣するところを見ると、小夜歌も絶頂を迎えたらしい。
革製のショーツの隙間からは、粘り気の強い愛液がとろとろと溢れ出ている。
「まどか……」
小夜歌は、円の名を呼びながら、開かれたままの口を唇でふさいだ。
小夜歌がのろのろと舌を入れると、ようやく、円の顔にも表情が戻る。
倒錯しきった性交の後、姉と弟は、うっとりと目を閉じながら、いつまでもキスを続けるのだった。

「で、どうするの？　コレは」
シャワーを浴び終わり、意外に可愛いデザインのストライプのパジャマに着替えた小夜歌が、円に言った。その手には、円が拾った、あの小さな容器がつままれている。
「ん……霧子センセイに、見てもらう……」
まだぐったりとベッドに横たわったままの円が、そう答える。
「霧子センセイって……あ、村藤さんのコトね」
小夜歌は、その切れ長の目を細めながら、続けた。
「なんか危なげだけど、深入りして大丈夫なの？」
「わかんない……でも……愛美ちゃんのことが、なんか心配で……」
「……」
小夜歌は、何か言いかけて、やめた。
何をどう言っても、妬いているのかとまた訊かれるような気がしたからである。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

３－１

（かったるいなあ……）
　小夜歌は、眩しい太陽の光を反射する水面を眺めながら、ぼんやりと思った。
　スクール水着に水泳帽という姿の級友たちは、授業中とは思えないほどにうきうきしている。体育の教科担任の顔も、いつもより数段明るい。
　そんな中、一人、小夜歌だけが、いつもと同じ無表情だ。
　小夜歌は、水泳の授業など、別に面白いとも思わない。
　確かに暑い日に水につかるのは気持ちよくはあるが、それでも、皆で一斉に泳ぐことには全く心が動かなかった。物事は一人で楽しむのが彼女の流儀である。
　グラウンドを走っている男子生徒たちが、こちらに露骨な視線を向けているのも、何だか鬱陶しい。
「どうしたの？　小夜歌」
　同じ合唱部の瑞穂が、そう訊いてくる。
「ちょっと、気分が悪くて……」
　小夜歌の口から、するすると嘘が流れ出た。クラスで唯一といっていい友人を騙しながらも、そのことにほとんど罪悪感を感じない。小夜歌はそういう少女だ。
「今日、ちょっと日差し強いしね。あたしそういうの苦手なの」
「そうだったね」
　瑞穂が、心配そうな表情を、その可愛い丸顔に浮かべる。小夜歌が強い太陽を苦手とするのは本当だ。
　結局小夜歌は、水着をシャワーで濡らしただけで、プールの授業を欠席することにした。

　保健室で休む旨を教師に告げた後、小夜歌は、女子更衣室へと歩いて行った。更衣室は、プールに隣接した体育館の中にある。
　遠くから聞こえる高い嬌声をかすかに聞きながら、小夜歌は、更衣室のドアを開けた。
「！」
　セーラー服の夏服をまとったスレンダーな少女が、声にならない声をあげながら、小夜歌の方を向いた。そして、とっさに両手を背後に回し、その手に握っていたものを自らの体で隠す。
「誰、あなた……」
　少女が立っているのが、自分に割り当てられたロッカーの前であることを確かめながら、小夜歌は少女に近付いていった。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

眼鏡の奥のおどおどした目とカールした長いまつげが印象的な顔をしている。髪はやや褐色で、耳を隠す程度のショートカットだ。
美少女、と言ってもいいくらいの顔立ちだが、小夜歌には見覚えがない。
――いや、あるにはあるのだが、該当する名前が頭に浮かんでこないのである。
「この学校のコ……でしょ？　どっかで見たことある顔だもの」
そう言われて、少女は、その桜色の唇を細かく震わせる。
小夜歌は、少女を追い詰めるように、その前に立った。少女は無意識に後ずさり、背中をロッカーにぶつけてしまう。
少女の顔を間近で見て、小夜歌の切れ長の目が、すっと細められた。
少女は身をひるがえし、迫る小夜歌から逃げ出そうとする。
「あっ！」
少女が悲鳴をあげる。小夜歌が、そのしなやかな腕を素早く伸ばし、少女の手を捕らえたのだ。
そのまま、容赦のない力で、少女の腕をひねり上げる。
「い、いた……」
ひねりあげられた手が握っているものを見て、小夜歌は困ったような笑みを浮かべた。それは、小夜歌の純白のショーツだったのである。
「可愛い顔して下着ドロなんだ。七瀬ってば」
名前を呼ばれて、その体がびくっと震える。
「七瀬……タケルだったっけ？　下の名前」
「あ……」
ため息のような声をあげながら、“七瀬タケル”は床にへたり込んでしまう。
「生徒手帳か何か、持ってる？」
言われて、“七瀬タケル”はおずおずと小夜歌の顔を仰いだ。
「よこさないと、ここで大声出しちゃうわよ」
「……」
観念したように差し出された手帳を、小夜歌は、腕を握っていない方の手で受け取った。
「２年Ｅ組、七瀬健……。ふーん、Ｅ組だったっけ？　健クン」
生徒手帳の写真を意味ありげに眺めながら、小夜歌は言った。その写真の中では、線の細い眼鏡をかけた学生服の少年が、いささか緊張した顔でこちらを見つめている。
「立ちなさいよ」
少女――いや、少女の姿をした健の手を離し、小夜歌は冷たい口調で言った。
「え……えっと……」
まだ手の中にあるショーツと、小夜歌の顔を交互に見つめながら、健はとまどったような表情を浮かべる。
「去年同じクラスだったときから、ちょっと女のコっぽい奴だなとは思ってたけど……そ

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

ういう趣味だったんだ」
「ち、違うんだ……僕は……」
　健が、中性的な声で何か言い訳しようとする。
「何が違うって言うのよ」
　まだ被っていた水泳帽を脱ぎながら、小夜歌が言った。しっとりと濡れた黒髪が白い肌にまとわりつく姿が、妙に色っぽい。
「僕は、その……脅されて、しかたなく……」
「しかたがないから、あたしのパンツ盗んだの？」
　そう言いながら、小夜歌は、ほとんど同じくらいの高さにある健の顔に、その顔を近付けた。
　スクール水着を着たままの少女に迫られ、セーラー服をまとった少年は、耳まで顔を赤くしてしまう。
「しっかしまあ、なんであたしの周りの男どもって、マトモなのがいないかなァ？」
　長いまつげにふちどられた潤んだ目を見ながら、小夜歌はぼやくようにつぶやいた。
「え？」
「こっちの話よ。……とりあえず、返してもらうわよ」
「あ……ご、ごめん……」
　謝る健の手からショーツを受け取った小夜歌は、少し考えた後に、その唇に笑みを浮かべた。
「健クンは、ホントに脅されてやったの？」
「う、うん……。セーラー服なら、女子更衣室入っても、目立たないだろうからって」
「じゃあ、パンツ脱いで、スカートめくってみて」
「ええっ？」
　大声を上げる健の口を、小夜歌は手の平でふさいだ。
「ダメよ、そんな声だしちゃあ」
　小夜歌は、小悪魔的な表情を浮かべながら、健の耳に口を寄せ、続けた。
「誰か来たら困るでしょ……。さ、早く脱いで。健クンがエッチな気持ちになってないかどうか、あたしが調べてあげる」
「そんな……」
「君には、選択の余地はないの♪」
　歌うような口調でそう言いながら、小夜歌は体を離し、健の生徒手帳をひらひらと動かした。
「……」
　健は、その繊細そうな顔をうつむかせ、のろのろとスカートの中に手を差し入れた。
　すとん、と健の足元にトランクスが落ちる。さすがに、女物の下着までは用意してなかったらしい。

Veon PDF Driver Trial
www.veon.com.tw

　健の動きが、止まってしまう。
「ほら、スカートめくって」
　小夜歌が、躊躇する健に残酷な口調で言う。
　健は、うつむいたまま、自らがまとうフレアスカートを、そろそろとめくり上げた。その白く細い手が小刻みに震えている。
　次第にのぞく健の脚は白く滑らかで、とても少年のそれとは思えない。
「結城さん……もう、許して……」
　健が、泣きそうな声で言う
「ダメよ。健クンのオチンチンがどうなっているか、きちんと見なきゃ」
　美貌の少女の口から卑猥な言葉を聞き、健はますます顔を赤くした。
「それとも、人を呼んじゃおうか？　この状況じゃあ、もう何も言い訳できないだろうけど」
「や、やめてよ……ッ」
「じゃあ――はやくしなさいよ」
　けして大声ではないが、ムチのように鋭い口調でそう言われ、健はとうとう自らの股間を露にした。
「え……」
　小夜歌は、思わず声をあげ、目を見張っていた。
　スカートの中に隠されていた健のそれは、その少女じみた顔からは想像もできないほどのサイズだったのである。
「うぁ、おっきい……」
　同年代の少女の中でも、かなりの男性経験を有する小夜歌だが、その巨根には、どうしても見入ってしまう。
　健のペニスは、半ば勃起した状態にあった。その状態で、拳二つで握ってもまだ余るほどの大きさになっているのだ。
　足腰のラインが華奢である分だけ、凶悪さを感じさせるほどのサイズである。完全に勃起すれば、その亀頭は臍の高さをゆうゆうと越えてしまうだろう。
　浅ましく静脈を浮かせて、劣情のままに屹立しつつある自らの欲棒を見つめられ、健は羞恥に顔を背けた。その膝は、かくかくと震えている。
「ずいぶんとおっきくさせてるじゃない、健クン……」
　そうやって言う小夜歌の声は、興奮のためか、かすかに上ずっていた。しかし、健はそんなことに気付かない。
「女装して、あたしのショーツにぎりしめて、こんなにオチンチンおっきくさせてたの？」
「そ、そんな……」
　小夜歌に言葉で嬲られて、健は、なぜかますますその長大なモノをそそり立たせてしまう。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「こんなんじゃ、スカートの上からだって、男のコだってバレちゃうよ……」
　小夜歌はそう言いながら、右手でそろりと健の頬を撫で上げた。びくっ、と健の体が跳ねるように震える。
「オナニー、して見せてよ」
「！」
　小夜歌の言葉に、健は大きく目を見開いた。
「もう、一回出さなきゃおさまんないでしょ……。さ、してみて」
「でも……」
「口答えしちゃダメ♪」
　小夜歌はそう言って、健のスカートの裾を握り、その口元に近づけた。
「さ、これを咥えて……それから、あたしの前でオナニーするのよ」
　切れ長の大きな目に見つめられ、健は、思わず肯いてしまった。
　そして、小夜歌の言葉通り、スカートの裾を口に含み、両手で自らのペニスを握る。
　白く華奢な両手で握られたその男根は、よりいっそう逞しく見えた。
「んン……」
　そろそろと、健はその節くれだったシャフトに添えた両手を動かし始めた。
　しゅっ、しゅっ、しゅっ、しゅっ……と、少年が自らを慰めて快楽を育てていく姿を、小夜歌はその瞳を妖しく潤ませながらじっと見つめている。
　健のそれは、手淫によってますます体積を増し、急な角度でそそり立っていった。
　健の頬が、羞恥のために、これ以上はないというくらいに赤く染まり、その長いまつげが涙に濡れている。
　しかし、水着姿の少女の前で自慰にふけるというシチュエーションに、健が異様なまでに興奮していることも事実だった。
「んっ、んっ、んっ、んくっ、んんんっ……」
　健の手の動きは次第に速くなり、鼻息もせわしなくなっていく。
「セーラー服着てオナニーして、それでそんなに感じちゃうなんて……健クンってば、本当にヘンタイね」
　小夜歌の残酷な言葉に、健は、スカートの裾を咥えたまま、ふるふると首を振る。
　しかし、そんな仕草も、小夜歌の嗜虐心を満足させるだけだ。
「何が違うのよ……健クンのオチンチン、先っぽからどんどんエッチな汁が溢れてるわよ」
　小夜歌の指摘通り、健のペニスは呆れるほどのカウパー氏腺液を分泌し、その白い手を無残に汚している。
「ふふ……エッチな匂い……」
　その年齢からは考えられないような妖艶な表情を、小夜歌が浮かべる。
　その顔を見るだけで、健の股間のモノは、これまで感じたことのないような快楽にますます熱くなった。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

　健の手の動きが、さらに激しくなる。まるで、自らのペニスを傷めつけようとしているかのようだ。
「んくっ……んんン……んぐ……んふーッ……！」
　健は、その細い眉を悩ましげにたわめながら、必死で快楽の喘ぎを噛み殺している。
　エアコンのない、蒸し暑い更衣室の空気の中、健の顔は、じっとりと汗をにじませながら、今まさに犯されている少女のように羞恥と快楽に歪んでいた。
　そんな健の顔を見つめながら、小夜歌も呼吸を速くしていく。
「んんンっ！」
　健が、スカートを咥えたまま、驚いたような声をあげる。
　今まで感じたこともないような、繊細で柔らかな刺激が、敏感になった亀頭をくすぐったのだ。
　見ると、小夜歌が、その顔に悪戯っぽい笑みを浮かべながら、右手につまんだショーツで、健のその部分をさわさわと撫でている。
「気持ちイイ？　健クン」
　小夜歌の言葉に、健はおずおずと肯いた。
「もう、出ちゃいそう？」
　もう一度、健が肯く。
「でも、ダメよ」
　小夜歌の言葉に、健は、え、と目を見開いた。
「当たり前でしょ。健クンのセーエキで、あたしの下着、ねとねとにする気？」
　そう言いながら、小夜歌は右手でショーツによるくすぐりを続けながら、左手を健の右手に添えた。
「ほら、手がお留守になってるわよ……」
「んン……」
　小夜歌に導かれるまま、健は手淫を再開してしまう。
　にちゅ、にちゅ、にちゅ、にちゅ……というイヤらしい湿った音が、かすかに小夜歌の耳に届いた。
　健の瞳は、これまで感じたことのない苦痛を伴う快美感に濡れ、きちんと焦点を結んでいない。
　溢れ出そうになる快楽の迸りを、健は、意志の力を掻き集め、必死になってこらえている様子だ。
　その細い体が、ぷるぷると小刻みに震えている。
「エッチな顔ね、健クン……」
　小夜歌は、右手に持つショーツでペニスをくすぐりながら、その左手を健の頬に当てた。
「ンぁ……」
　奮える健の唇が半開きになり、フレアスカートの裾がはらりと下に落ちた。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

しかし、スカートは健の長大なペニスに引っかかる形になり、その自慰行為を隠す役目を果たせない。
「健クン……」
小夜歌はその切れ長の目を半ば閉じながら、健の顔に顔を寄せた。
「ゆうき、さん……」
ひどく情け無い声で、健が応じる。
小夜歌が、健の唇に唇を重ねた。
「んんんンンっ！」
しなやかな舌で口内をまさぐられながら、健はくぐもった悲鳴をあげた。
びくびくびくっ！　と、堪えようのない強烈な快楽に、健の体が震える。
そして、健は、小夜歌のショーツを弾き飛ばすような勢いで、射精してしまった。
「ん！　んン！　ん……んふーっ……！」
同い年の少女に口腔を舌で犯されながら、健は、絶望的な息を漏らした。
その若いペニスは何度も律動を繰り返し、びゅうっ、びゅううっ、と白濁した液を放ち続けている。
「ンあぁ……」
健は、人形のように空ろな表情で、ぺたん、と座り込んでしまった。
しわくちゃになったスカートの端から、まだぴくぴくと痙攣している亀頭がのぞいている。
「あーあ……ダメだって言ったのに……」
小夜歌は、右手につまんだ自らのショーツを、健の目の前にさらした。その可憐な白い布地は、少年の精液によって無残に汚され、ぽたぽたと粘度の高い汁を滴らせている。
「ぐちゃぐちゃになっちゃったじゃない」
そう言いながら、小夜歌が、生温かい牡のエキスにまみれた下着を、ぺたぺたと健の柔らかそうな頬に触れさせる。
「う……うっ……」
自らの浅ましさの証を思い知らされるようなこの仕打ちに、健は顔を背け、目尻に涙をにじませた。
「健クン……」
小夜歌は、健の名を呼びながら、無造作にショーツを床に落とした。べちゃ、という音を立てながら、モルタルの床に落ちたショーツから白濁したしぶきが跳ねる。
「ココに、お詫びのキスをするのよ……」
そう言いながら、小夜歌は、横を向いたままの健の顔を、正面に向けた。そして、自らの股間に、その少女じみた顔を導いていく。
「はい……」
自分でも何に対して返事をしているのかきちんと理解しないまま、健は吸い寄せられる

Xeon PDF Driver Trial
www.xeon.com.tw

ように、小夜歌のその部分に顔を寄せていく。
　まだしっとりと水を含んだスクール水着の上から、健は、小夜歌のその部分に口付けした。
「あン……」
　意外なほど可愛い声を、小夜歌があげる。
「そ、そのまま……あたしのアソコ、舐めて……」
　自身の喘ぎを少し恥じ入ったように、ことさらに冷たい口調で、小夜歌が言う。
　健は、従順そうにその目を閉じ、小夜歌の言葉通りに舌を使いだした。
　紺色の水着の上から、少年の舌が少女の陰裂をなぞる。
「はぁ……っ」
　小夜歌は、大きく息をつきながら、自らの体を抱き締めた。
　厚めの布地の上からのもどかしい口唇愛撫よりも、どこかこのシチュエーションに陶酔しているかのような健の表情に、ぞくぞくするような快感を覚えてしまう。
　健は、正座を崩したような姿勢のまま、まるで主人に媚びる犬のように鼻を鳴らしながら、小夜歌のその部分を舐め続けた。
　そして、そうするとますます小夜歌が悦ぶのを知っているかのように、ちゅうちゅうと布地の上から敏感な部分を吸い上げ、恥骨に鼻をすりつけるようにする。
「ン……んふっ……ア……健クンてば……」
　はァはァと息を荒くしながら、小夜歌は、こみ上げる快感に耐えられなくなったかのように、スチールのロッカーにその背を預けた。
　そして、健の頭に両手を置き、その顔をますます自分のその部分に押しつける。
「んんんん〜ッ！」
　健が、苦しげな声をあげた。
　が、見ると、健の股間では、その巨根が再び力を取り戻し、次第に屹立しつつある。
　小夜歌は、ぞくりとするような微笑みをその口元に浮かべた。
「何ボッキさせてんのよっ！」
　そして、そう罵りながら、健の長大なペニスを素足で踏みつける。
「んぎゃっ！」
　たまらず、健が叫びながら、その体をのけぞらせた。
　小夜歌はかまわず健のペニスを踏みにじる。
「あ、あああ、あッ！　あああああアーッッッ！」
　健は、絶望的な声をあげながら、二度目とは思えぬほどの大量の精を、女子更衣室の床にぶちまけてしまっていた。

　ようやく健が我に帰ると、小夜歌はすでにセーラー服に着替え終わっていた。
「あ、あの……結城さん……？」

Xeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

　床に落ちた精液まみれのショーツと、小夜歌の顔とを交互に見つめながら、まだへたりこんだままの健が言う。
「替えの下着くらい、持ってきてるわよ」
　にっ、と悪戯っ子のように歯を見せて微笑みながら、小夜歌が言う。
　そして、小夜歌は、部屋のすみにあるバケツの中にあった雑巾を健の膝の辺りに放った。
「床くらいはきちんと拭いてよ」
　更衣室の床や、木製のすのこの上には、健が放った欲望の残滓が、点々と付着している。小夜歌の言葉に、健はかーっと顔を赤くした。
　そんな健の様子に構わず、小夜歌はさらにパイプ椅子を持ち出し、自分に割り当てられたロッカーの前で展開させる。
「でさ、盗れって命令されたのは、あたしの下着だけ？」
「し、信じてくれるの？」
　はっ、と健が顔を上げる。
「そりゃまあね。健クンがそんな度胸の持ち主とは思えないし」
　ずけずけとそんなことを言いながら、小夜歌はパイプ椅子の上に上がった。そして、自分のロッカーのちょうど向かい側のロッカーの上を調べだす。
「あー、あったあった。こんなこったろうと思ったわ」
　そう言いながら、小夜歌は、ロッカーの上に放置されたダンボールの箱を動かした。
　そして、ダンボールの陰に隠されていた何かを右手に持ち、椅子の上に立ったまま、健に見せる。
「カ、カメラ……？」
「ビデオカメラね。最近のはホントに小さいなあ」
　妙なことに感心しながら、小夜歌は手に持ったビデオカメラを操作し、中のテープを取り出した。
「大方、下着がなくて右往左往するあたしを撮ろうとしたんだろうけど……。水着に着替えてるとこも、撮られちゃってたかな？」
　そう言いながら、小夜歌は健に視線を移した。
「し、知らないよ、僕は……」
「分かってるって」
　そう言って、小夜歌はテープを抜いたカメラだけ、ロッカーの上に戻した。
「健クンがしたのは、下着ドロの未遂だけだよね♪」
「……ごめん、なさい……」
　健が、気の毒になるほどしょんぼりとうなだれる。
「ふふ……さっきの可愛い顔と声に免じて、許してあげる」
「結城さん？」
「あたしの下着、持ってっていいわよ。どうせ、健クンので、べとべとになってるし……。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

洗濯して、いじめっ子に渡したら？」
「結城さん……」
　茫然としたような顔で、健は、淡く微笑みを浮かべたままの小夜歌の顔を見つめた。

　翌日の、朝。
「あ、お帰り、お兄ちゃん」
　マンションのドアを開けながら、小夜歌は、少し意外そうな顔でそう言った。
「土産だ」
　ぶっきらぼうな口調で言いながら、小夜歌の兄、遼は、ビニール袋に入った菓子折りを差し出した。
「銘菓ひよこに鳩サブレ？」
「東京だからな。雷おこしのほうがよかったか？」
　面白くもなさそうな顔で、遼が言う。
「わざわざどーも」
「帰る途中に寄っただけだ。車、ここの駐車場に預けていたからな」
「そうだったね」
　小夜歌は、苦笑いしながら言った。この、伸びた前髪で表情を隠した兄の態度には、とっくに慣れっこになってる。
「でさ、ちょっと時間ある？　家で由奈さんが待ってるとは思うんだけどさ」
「大きなお世話だ。……学校は？」
「今日は土曜で休みだよ。自由業は気楽でいいね」
「自由業、か……」
　遼が、自嘲するかのような声で言う。
「そんなことよりさ、ちょっと、相談があるんだ」
　妙にしおらしいことを言う妹に、遼は、前髪の奥の眉をわずかに寄せた。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

３－２

　翌朝、由奈は、いつもより遅く目覚めた。
　そのまま、のろのろと服を脱ぎ、シャワーを浴びる。ぬるいお湯に打たれながら、その幼い顔には、いかなる表情も浮かんでこない。
　バスルームから出ると、由奈の携帯が、メールを受信していた。慌てて表示を確認する。
「ご主人様……」
　メールは、遼からだった。
“少し遅くなる。昼過ぎには帰る。遼。”
　ただそれだけの、そっけないメッセージ。
　由奈の大きな瞳が、みるみる涙で潤む。
「ごしゅじんさまァ……」
　まるで子どものような声でそうつぶやきながら、由奈は、ごしごしと涙をぬぐった。
　と、いきなり、携帯が着メロを奏でだす。
　由奈は、びくっと体を震わせ、そして、着信ボタンを押した。
　ことさらゆっくりと、耳元に携帯を寄せる。
　電話は、千鶴からだった。

　千鶴が由奈を呼び出したのは、港に隣接した公園だった。
　日本海の波が、高く昇った初夏の太陽に照らされ、きらきらと光っている。
「センパイ、遅刻ですよ」
　そんな紺碧の海をバックに、腰に手を当てた姿勢で千鶴が言った。洗いざらしの涼しそうなデザインのカッターシャツにショートパンツという、例によってボーイッシュな格好である。
　一方、由奈は、彼女にしてはおとなしいデザインのセーラーブラウスにスカートだ。
「だって……」
「だってじゃありません♪　ペナルティーです」
　そんなことを言いながら、千鶴は、由奈の白く小さな手を無遠慮に握った。
　そのまま、まるで幼い妹の手を引く姉のように、ずんずんと歩き出す。
「ちょ、ちょっと、千鶴ちゃん……」
　その力ない抗議を無視して、千鶴は、由奈を公衆トイレの中に連れこんだ。
　中に使用者がいないのを確認して、頭半分は小さい由奈の体を強引に個室に押し込み、自らも入って鍵を閉める。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「……」
　薄暗い個室の中、由奈は、無言で千鶴を見つめている。
　その哀しげな表情に気づいているのかいないのか、千鶴は薄く微笑みながら、背負っている小さなナップザックから奇妙な器具を取り出した。
「何、それ……？」
　千鶴の手の中にある、ウズラの卵よりも一回り大きなプラスチックらしい楕円形の器具を見て、由奈は思わず訊いてしまった。
「これはァ、こうやって使うんです」
　そう言いながら、千鶴は、真ん中で筋目の入ったその器具を、軽くひねった。
　ジジジジジ……と小さく音をたてながら、そのピンク色の小さなプラスチックの卵が、細かく振動を始める。
「それって……」
「さ、センパイ、パンツ下ろして、スカートめくってください♪」
　大きな目を見開く由奈に、千鶴が笑みを含んだ声で言う。
「そんな……！」
「センパイ、素直に言うこと聞いて下さいよ……」
　狭い個室の中で、千鶴は、由奈に迫った。思わず後ずさる由奈の背中に、タイル貼りの壁があたる。
「千鶴ちゃん……」
「セ・ン・パ・イ♪」
　耳元でそう囁きながら、千鶴は、振動しているその電池内蔵式のローターを由奈のスカートの中に差しこんだ。
　そして、ショーツの薄い布越しに、敏感な部分に押し当てる
「ひやっ！」
　思わず大声をあげて、由奈は、その小さな口を両手で押さえた。その仕草が、妙に可愛らしい。
「さ、早く脱いで……センパイのアソコに、コレ、入れてあげるから……」
　由奈は、じっと唇を噛み、そして、おずおずとショーツに手をかけた。
　例のビデオを押さえられている以上、結局、由奈は千鶴に逆らえない。しかも、昨日に続いて今日も体を許すことによって、ますますこの後輩に弱みを握られてしまう。
　由奈は、自分が底無し沼にでもはまってしまったような絶望感を覚えていた。
　ローターが、直接、由奈のその部分に押し当てられる。
「んン……んく……んんッ……」
　遼によって入念に開発され、見かけよりはるかに成熟してしまった靡粘膜が、あっけなく快楽の蜜をにじませる。
　千鶴は、左手を由奈の右腕に添えながら、ローターを持つ右手をくりくりと動かした。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「ンうぅッ」
　思わず、由奈は千鶴のシャツを握り締めてしまう。
　千鶴は、その顔にサディスティックな表情を浮かべながら、振動を続けるローターを由奈の秘裂に埋没させていった。
「ン……ぅああ……あうぅ……」
　体温のない冷たい機械を押しこまれる感覚に、由奈が辛そうな声をあげる。
「っはァ……」
　すべて呑み込んでしまった後、由奈は、大きく息をついた。
　そんな由奈のショーツを、千鶴が、いささか強引にずり上げる。
「あ……ど、どうして？」
　てっきりこの場所で陵辱されると思っていた由奈は、千鶴の意図を計りかね、思わず訊いてしまう。
「お散歩しましょ♪　センパイ」
　千鶴は、びっくり顔の由奈に微笑みかけながら、言った。
「あたし、けっこういい場所知ってるんです。穴場ですよ」
「で、でも……」
　何か言おうとする由奈を無視して、千鶴はあっさりと個室の鍵を開けてしまった。
　そして、またも強引に、由奈を公衆トイレから引っ張り出す。
　由奈は、どこか危なっかしい足取りで、千鶴についていくしかなかった。

　体内に淫猥な小道具を咥えこんだまま、由奈は、千鶴と並んで歩いている。
　海岸に沿った、しゃれた石畳で舗装された遊歩道。何組かのカップルが、あるいはベンチで寄り添い、あるいは連れ立って歩いている。
　最初は、そんな男女の視線が恐ろしかった。まるで、その幼げな腰の中にローターを隠していることを透視されているような気分にさえなったものだ。
　しかし、由奈のそんな懸念は、今や、湧きあがる官能の波に押し流されてしまっている。
　由奈の歩みは、傍で見ていても、何とも頼りない。まるで、雲の上を歩いているようだ。
　その額にはじっとりと汗がにじみ、前髪が数本、貼りついている。
　ずいぶん前から、千鶴は、その長い指で、由奈の細い指を絡め取るようにして手をつないでいる。そのことにも、由奈はきちんと気付いていない様子だ。
　小さな、可愛らしいとさえ言えそうな責め具が、休むことなく由奈の体内で振動を続けている。
　由奈が歩を進めるたびに、敏感な膣壁がローターにこすれ、刺激を感じてしまう。
　その刺激に、由奈の花園は淫らな蜜を滴らせ、ショーツをぐっしょりと濡らしていた。
　由奈の、思わずつつきたくなるような柔らかな頬が赤く上気し、呼吸が早くなっている。その大きな瞳は涙でうるうると潤み、きちんと焦点を結んでいなかった。

Xeon PDF Driver Trial
www.xeon.com.tw

　そんな、まるで熱でもあるかような由奈の様子をちらちらと横目で盗み見ては、千鶴は、満足そうな笑みを浮かべている。
「千鶴ちゃん、もう、ゆるして……」
　由奈が、ひどく情け無い声で、千鶴に何度目かの許しを乞う。
「もう少しの辛抱ですよ♪」
　千鶴が、相変わらず同じような返答をする。
　次第に二人は人気のまばらな方へと歩いていった。
　海岸の反対側、小高い丘になった場所へと上る道である。木々に遮られ、しばらく、海が見えなくなった。
　無論、由奈はそんなことに気を回している余裕はない。へたりこんでしまいそうになる脚を交互に前に出し、何とか歩みを続けることで精一杯だ。
　かすかなはずのローターの振動に、膣内全体が共鳴し、子宮まで震わせられているような錯覚を感じる。
　敏感になったその部分は、もはや、足を地面に下ろすわずかな衝撃さえ、甘い疼きと感じていた。
　脚の間から、ぽたっ、ぽたっと愛液が雫になって滴っていることに、由奈は気付いていない。
「ここですよ、センパイ」
「ふぁ……」
　千鶴がようやくそう言ったときには、由奈は、思わずしゃがみこんでしまっていた。
　そこは、かろうじてベンチを一つ置くことができる程度の、小さな見晴らし場だった。たいした高さではないが、それでも、遠くに港が見て取れる。
　恋人同士が、誰にも邪魔されずに手製の弁当を食べるにはちょうどいいような、そんな場所だ。
「ほら、センパイ、立って立って」
　由奈は、ぼんやりとした顔で、千鶴の言葉に諾々と従った。その動きは、まるで油の切れたロボットのようにぎこちない。
「そこのベンチに手をかけて、お尻、こっちに向けてください」
　言われるままに、由奈は、木製のベンチに両手を当てる。そうしないと、そのままへたりこんでしまいそうだった。
「あ、ダメ……」
　背後で、千鶴が自分のスカートをめくり上げる気配を感じ、由奈は辛うじて抗議の声をあげた。
　しかし、千鶴は構わず由奈のスカートを完全にめくりあげてしまう。
「うわ、すっごい……先輩のココ、大洪水ですよォ」
「イ、イヤぁ」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

　由奈は、がっくりと力無くうなだれ、恥辱にぽろぽろと涙をこぼす。
「んふふっ、可愛いショーツがぐちゃぐちゃ……」
　そう言いながら、千鶴は、由奈のショーツを脱がせようとする。
「や、やめてぇ……」
「どうしてですか？　それとも、まだローター中に入れていたいんですかァ？」
　そう言われて、由奈はお尻を突き出した格好のまま、ふるふるとかぶりを振った。左右で結んだ長い髪が、ゆらゆらと揺れる。
　千鶴は、由奈のショーツをずり下げた。
　ねっとりとした蜜が糸を引き、下着と秘所の間を結ぶ。
　由奈のその部分はぱっくりとめくれ上がり、愛液に濡れながらひくひくと息づいていた。
　千鶴が、ひどく優しい指使いで、その由奈のひだひだをなぞる。
「はう……ン」
　それだけの刺激で、由奈はその小さな背中を弓なりに反らしてしまう。
「お、おねがい、早く……取ってェ……」
　くちゅくちゅと音をさせながら濡れそぼるスリットをなぶる千鶴に、由奈は涙声で哀願した。
「はいはい」
　そう返事をして、千鶴は、由奈の膣口に指を差し入れた。ぐちゅう、と信じられないほど卑猥な音をたて、由奈のそこが千鶴の指を迎え入れる。
「ンはあ……っ！」
　びくっ、と由奈の体が震えた。
　構わず、千鶴は由奈の膣にずりずりと指を侵入させ、内部をまさぐる。
「ダ、ダメえ……！　そんなに、ぐりぐりしないでェ……っ！」
　拳が白くなるほどベンチの背もたれを握り締めながら、由奈が悲鳴のような声をあげる。
「だって……中に入っちゃって、なかなか取れないんですよぉ」
　千鶴が、面白がっているような口調でそう言った。
「そ、そんなァ……」
「じゃ、センパイ、ちょっと力んでみてください。そうすれば、取れるかも」
「う……ううぅ……っ」
　由奈は屈辱に子どものような嗚咽を漏らしてしまった。
　しかし、他にいい方法も思いつかない。由奈は、体内深く侵入してしまったローターを外に出すために、必死になって腰に力を込めた。
「ン……んくぅ……はァ、はァ、はァ……」
　下半身全体に、思うように力が入らない。強い日差しの下、由奈の体は汗だくになってしまう。
　小さな丸いお尻がぷるぷると震える。本人が一生懸命な分、ひどく可愛らしい光景だ。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「ひゃうウ……」
　にゅる、といった感じで、陰唇の間から、ピンク色のローターが顔を出した。
　その表面は、白濁した粘液にねっとりとまみれている。
「きゃは、出た出た♪　おめでとうございます、センパイ」
　そんなことを言いながら、千鶴は、糸を引きながらぽとりと落ちるローターを、両手で受けとめた。
「んはあぁ……はあっ、はあっ、はあっ、はあっ……」
　由奈は、両手をベンチの背もたれに添えたまま、再びしゃがみこんでしまう。
　そんな由奈の様子を見下ろしながら、千鶴が、ぬらつくローターを口元に持っていった。
「あーあ、電池切れちゃってる……。んふ、すごい匂い」
「いやあ……」
　肩越しに千鶴の顔を見ながら、由奈が力無く言う。
　しかし、そんなことに構わず、千鶴はひどく淫らな表情で、そのローターに舌を這わせた。
「美味しいですよ、センパイのお汁」
「あうぅ……」
「ほら、センパイ、これからがホンバンなんだから」
　そう言いながら、千鶴は、ナップザックから双頭ディルドーを取り出した。
　そして、ショートパンツを半ばずり下ろし、どことなく慣れた手つきで、その片方を自らに挿入する。
「んんんんん……っ」
　その整った顔を切なげに歪めながら、千鶴は、シリコン製の人工ペニスで、自らを犯していく。
「あはっ、あたしも濡れちゃってるから、すぐ、入っちゃう」
　そんなことを言いながら、千鶴は、ちろりと舌なめずりした。
　ショートカットな上、服装がボーイッシュであるため、ややもすると、その姿は陰茎を剥き出しにした少年のようにも見える。
「もう……もう、ゆるしてェ……」
　そう言う由奈の腰を、千鶴は乱暴に引き上げた。
「ひあ……」
　未だとろとろと愛液を溢れさせているその部分に、ディルドーの先端をあてがう。
　そして千鶴は、剥き出しにした由奈のお尻を、指が食い込むくらいきつく抱えながら、一気に腰を進ませた。
「ひあッ！」
　膣内をディルドーでいっぱいにされ、どぷっ、と愛液が溢れる。
　千鶴は、その凛々しい眉をたわめ、興奮に頬を紅潮させながら、ぐいぐいと腰を使い始

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

めた。
「あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ」
　ディルドーのくびれた部分が膣内粘膜をこすり上げる感触に、由奈はあられもない声を漏らしてしまう。
「センパイ……」
　千鶴は、由奈の背中に覆い被さるようにして、その両手を前に回した。
　そして、手の平に余る大きな胸の膨らみを、やわやわと服の上から揉みしだく。
　ブラのカップに擦られて、由奈の乳首は浅ましくとがってしまった。
「あ……あくぅ……やああ……んんン……ンあっ！」
　腕の中で、身悶えしながらいやいやとかぶりを振る由奈のうなじに、千鶴は口付けし、舌を這わせる。
　由奈の汗の匂いや、たっぷりとした双乳の感触にうっとりと目を閉じながら、千鶴は、腰を回すようにして由奈を追い詰める。
「お、おねがい……ちづるちゃん……やめ、て……やめてェ……っ」
　どうしても漏れ出てしまう喘ぎの合間に、由奈は千鶴に懇願した。
　しかし、そんな由奈の哀れな泣き声も、千鶴には歪んだ快楽しかもたらさない。
「センパイ、かわいい……」
　千鶴は、名残惜しげに由奈の背から体を離した。そして、由奈の腰を両手でしっかりと抱え直す。
　そして千鶴は、まるで自分の腰を由奈のお尻に叩きつけるような勢いで、激しい抽送を始めた。
「ああアァーッ！」
　由奈は、そこが野外であることを忘れてしまったかのように、高い声をあげてしまった。
　そして、自らの声を封じるために、必死になって右手の人差し指を噛む。
「んぐ！　ン！　んんン！　んぐッ！　んんんーッ！」
　千鶴は、まるでムキになったかのように、むちゃくちゃに腰を動かした。
　ぶちゅっ、ぶちゅっ、ぶちゅっ、ぶちゅっ……というイヤらしく湿った音が、二人の陰部から響く。
「んんんんんンッ！」
　由奈が、ひときわ大きな声を噛み殺した。その白い指に歯が食い込み、血がにじむ。
　由奈の、最も触れてほしくない敏感な部分を、千鶴が繰り出すディルドーが捉えたのだ。
　いくら反応を抑えようとしても、体が勝手にびくびくと反応し、強烈な快楽の波にさらされていることが明らかに分かってしまう。
「はあっ……セ、センパイ……スゴい……！　千鶴も、千鶴もスゴくいいのォ！」
　興奮の極みにある千鶴も、きちんと意味のある言葉を発することはできない様子だ。
　ただ、由奈が今感じている感覚を更に大きく育てるべく、激しく、そして小刻みに腰を

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

使う。
「もうダメ……もうダメ……もうダメ……もう、ダメえ……」
　いつしか指を噛むことすら忘れ、由奈は、切羽詰った声でそう繰り返すのみだ。
「センパイ……好き……っ！」
　思わずそう叫んで、千鶴は、ひときわ強い動きを由奈の体内に打ちこんだ。
「あ……ッ！」
　由奈が、体を弓なりに反らす。
「あああああああああああああああああああああアアアアアアアアアアアアアアアアアアーッ」
　由奈の絶叫に、ぷしゃああ……という、体液のしぶく音が重なる。
　絶頂のしるしの液体で足の内側を濡らしながら、由奈は、どこまでも深い穴に落ちていくような感覚を覚えていた。

　昼下がり、由奈が館に戻ったときには、遼の車がガレージに停まっていた。
　あの後、由奈は、コンビニで安物の下着を買い、千鶴の家でシャワーを浴びた。そして、隙を見て逃げるように千鶴の家を後にし、ここまで帰ってきたのだ。
「……」
　傍で見ていても分かるくらいに緊張しながら、由奈は深呼吸をした。
　そして、道々考えていた嘘を、頭の中で再確認する。
　遼が言うには、自分は嘘が苦手らしい。由奈はできるかぎり平静な顔を作って、重い木製のドアを開いた。
「ただいま、帰りました……」
　そう、力なくつぶやきながら絨毯の敷かれたホールに入る。
「おお」
　ちょうど、遼が何か重そうな本を抱えながら、階段を降りているところだった。
　夏だというのに伸ばしたままの前髪で、表情はほとんど分からない。しかし、その口元には、かすかに微笑みが浮かんでる。
「俺も、今帰ったところだ……おかえり」
　そんな、ごく日常的な挨拶を口にするのが、遼には照れくさいらしい。微笑みが、苦笑いの形になる。
　そんな遼を前にして、由奈が一生懸命考えていた嘘は、彼女の頭の中からどこかへ消え去ってしまっていた。
「どうした？」
　遼のの口元から、笑みが消える。
　由奈は、その場に立ち尽くしたまま、ぽろぽろと大粒の涙をこぼしていた。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「あの……ご……ごしゅじん、さま……あたし……あたし……」
　それ以上は、言葉にならない。
　由奈は、幼い子どものように、手の甲で涙をぬぐいながら泣き続けた。

　千鶴は、胸に秘めた決意にやや顔を硬くしながら、バス停からの道を歩いた。
　丘を覆う林を抜けると、目的の屋敷が見える。芝生が植えられているだけの広々とした庭の奥にある、古びた洋風の館だ。
　夕暮れの空気を、セミの鳴き声が震わせている。
（あそこに、センパイがいる……）
　そう思うと、張り詰めたように緊張した胸が、急に切なくなる。
（センパイ……）
　由奈が、あの館の中でどういう生活をしているのか、千鶴にはよく分かっていない。ただ、誰か男と同棲しているのではないかと、漠然と考えているだけだ。
　先日、千鶴の家から飛び出ていった由奈の携帯にメールを送ったところ、今日の日付と今の時間、そしてここの住所を記したメールが返信されてきたのである。
　それは、千鶴が前に調べていた由奈の住所と一致していた。
　何かの罠かもしれない、というくらいは、千鶴も考えている。由奈の相手の男が、二人の関係を問いただすくらいのことはありうるだろう、とも思う。
　千鶴には、男女関係の修羅場の経験はない。だが、持ち前の強気な性格で、ひるむことなくここまでやってきた。
（あのビデオのことで、そいつがセンパイのこと諦めてくれるんなら、それが一番楽なんだけど……）
　一方で、そんな楽観的な考えを抱いてしまう。
　千鶴は、挑むような目つきで、玄関のノッカーを鳴らした。
　一分以上待たされた後、扉が、開く。
　前髪を両目が隠れるくらいに伸ばした、すらりとした長身の男が、そこに立っていた。
「槙本センパイ、いますか？」
「君は？」
　倣岸な口調で、男が訊く。千鶴はむっとしながら、その前髪の奥の目を見返した。
「あたし、橘千鶴です」
「なるほど。……由奈なら、奥だ」
　ごく自然に由奈を呼び捨てにするこの男に、千鶴は言いようのない嫉妬を覚える。
「えっと……ユウキ・ハルカさん、ですか？」
　千鶴は、館の中に導かれながら、門のところにあったローマ字の表札を思い出し、訊い

Xeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

た。
「そうだ」
　男――遼が、そっけなく答える。
「センパイの、恋人なんですか？」
　ずけずけと訊く千鶴に苦笑いしながら、遼は、無言で階段の陰にある鉄製の扉を開いた。

「――！」
　扉から続く階段を降り、地下室に入った千鶴は、息を飲んでいた。
「セ、センパイ……」
　確かに、由奈はそこにいた。
　由奈は、全裸だった。さらに、その幼い姿態には不釣合いに大きな乳房の上下で縄がけされ、後手に縛られている。千鶴は知らないが、俗に高手小手と言われる緊縛の方法だ。
　その格好で、由奈は、産婦人科にあるような分娩台に横たわっている。
　寝台に角度がついているので、腰掛けているのに近い姿勢だ。その両脚は無残に割り広げられ、脚を乗せる台にベルトで固定されている。
　うぃんうぃんうぃんうぃんうぃん……
　よどんだ地下室の空気を、何かの低い唸り声が震わせている。
　それは、剥き出しになった由奈の秘部に挿入された、真っ黒いバイブがたてる音だった。
　信じられないほどの太さのそれは、由奈の膣口を痛々しく引き伸ばし、その部分を休むことなく蹂躙し続けている。
　すでに、何度も強制的に絶頂に追い込まれているのか、由奈の秘めやかな箇所は大量の愛液に濡れ、堅そうなマットレスに大きな染みを作っていた。
「んぐぅ……」
　部屋に入ってきた千鶴に気付いたのかどうか、由奈は、空ろな表情のまま、何か声を上げた。
　しかし、その口には穴のあいたギャグボールが噛まされているため、きちんとした声になっていない。
「どうして、こんな……」
　千鶴は、あまりの光景に茫然としてしまっていた。背後で遼が地下室のドアに鍵を閉めるのにさえ気付かない様子だ。
「君に関係あることだ……それで、由奈は罰を受けているのさ」
　そう言いながら、遼は、千鶴の脇をすり抜けて、由奈に歩み寄った。
「ばつ……？」
　千鶴は、思わず聞き返していた。その声が細かく震えている。
「ああ。こいつは、ガキみたいな顔してるが、知っての通りどうしようもない淫乱でな。俺の留守の間に、あろうことか、君を誘惑した」

Neon PDF Driver Trial
www.neon.com.tw

「……」
　絶句する千鶴に目もくれず、遼は、分娩台の傍らにあるキャスターの上から、金属性のクリップを取り上げた。そのクリップからは細いビニールのコードが伸び、やはりキャスターの上にある四角い機械につながっている。
「女である君を誘って、無理やりに深い関係を結んだんだ。罰は当然だろ」
「そ、それは……！」
　千鶴は、その吊り気味の目を大きく見開いていた。
（センパイは、あたしをかばって……？　でも、これって……こんなのって……）
　次々ともたらされる衝撃に、千鶴は混乱しきっている。
　そんな千鶴を無視するように、遼は、口元に笑みを浮かべながら、クリップを由奈の秘部に近付けた。由奈の靡肉は、これまでの暴虐に紅くめくれあがり、ひくひくと息づいている。
「ンぐうッ！」
　由奈が、くぐもった悲鳴をあげながら、緊縛されたその小さな体をびくりと震わせた。
　遼が、由奈の陰唇をクリップで挟んだのである。
「ン、ン、ン、ンンン〜ッ……」
　痛みにがくがくと体を震えている由奈の頬を、遼は奇妙に優しい手つきで撫でた。
　そして、空いた手でもう一つのクリップを取り上げる。
「や、やめて……」
　さすがに顔を青ざめさせながら、千鶴が言った。
「なぜそんなことを言う？　君は、被害者なんだろ？」
　そう言いながら、遼は、由奈の敏感な肉の芽を、クリップで挟んだ。
「ンぐ……ッ！」
　さらに激しく、由奈は体をのけぞらせた。その拍子に、細身の縄がさらに由奈の白い肌にきりきりと食い込んでいく。
「やめて、やめてぇ……ちがうの……センパイじゃなくて、あたしが……」
「めったなことを言うなよ」
　低い声で、遼は言った。その前髪の奥の目が、物騒な光をたたえている。
「罰を受ける覚悟なしに、軽々しく妙なことを言うもんじゃない」
　千鶴は、その視線に圧倒されていた。目の前の男が支配する歪んだ地下室の気配に、心身ともに飲みこまれつつある。
　そんな千鶴の様子を見つめながら、遼は、機械のスイッチをひねった。
「んぶッ！」
　由奈は、ギャグボールの間から唾液を迸らせた。
　がくがくがく……ッ、とその体が激しく痙攣する。
　クリップにつながったコードを通して、電流が流されているのだ。

Leon PDF Driver Trial
www.leon.com.tw

「いやあああああああああああああああああああああああああアーッ！」
　口をふさがれている由奈に代わって、千鶴が絶叫する。
「あたしですッ！　あ、あたしが、あたしがセンパイを犯したんですッ！」
　悲痛なまでの千鶴の言葉に、遼はスイッチを切った。
「ン……ンふぅ……ンぐ……」
　ぐったりと由奈の体が弛緩する。
　その顔は涙と涎でべっとりと濡れていた。
　ちょろちょろちょろ……と小さな水音が響く。由奈が失禁してしまっているのだ。
　遼は、そんな由奈から離れ、千鶴に歩み寄った。
　千鶴は、蛇に睨まれた蛙のように動けない。
「いいのか？」
　震える千鶴の手を強引につかみながら、遼は言った。
「ぁ……？」
「お前が罰を受けることになるが、それでいいのか、と訊いているんだ」
　遼の奇妙な理屈に、千鶴は茫然とした顔のまま、こっくりと肯いていた。
　遼は、満足げに微笑み、そして、千鶴の細い左の手首に、素早く手錠をはめた。
「あ！」
　千鶴が驚きの声をあげたときには、その手をねじ上げ、手錠の余った片方を、壁から突き出た金属の輪にはめてしまう。
「な、何……？」
　千鶴は、はっと我に返って、周囲を見回した。今まで由奈に気を取られていてきちんと見えていなかったが、その地下室は、異常な器具で満ちている。
　天上からぶら下がった鎖や、Ｘ字型の磔台、壁から下がった手かせや足かせ……。
「ちょ、ちょっと！　どういうこと？　どうするつもりよっ？」
「もう二度と下らん悪戯をする気にならないよう、きちんと躾てやるよ」
　そう言った後、遼は、再び由奈の傍に寄っていった。
「依頼なしに調教するなんて、珍しいことなんだぜ」
　くすくすと笑いながら、一つ一つ、由奈の拘束を解いていく。
「ンぷぁ……ごしゅじん、さまァ……」
　最後にギャグボールを外されたとき、由奈は、舌足らずな声でうっとりと言った。
「ごしゅじんさま……もっと、ゆうなにおしおきしてください……」
「え……？」
　信じられない言葉を聞き、千鶴は、思わず声をあげていた。
　その声を聞いて、由奈が、まだ焦点の合ってない感じの瞳を千鶴に向ける。
「あは……ちづるちゃん、きてたの……？」
　由奈の無邪気な笑顔に、千鶴は、足元が崩れ落ちてしまうような感覚を感じていた。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

左手を手錠で壁につながれたまま、ぺたん、と座り込んでしまう。

そんな千鶴の視界の端で、遼が、鞭の用意をしていた。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

２－２

　黒眼鏡の男と、白衣の女が、向かい合って座っている。
「あなたの探していた薬よ、乾くん」
　“乾くん“とその男の名を呼んだ、年齢不肖の白衣の女は、霧子である。
　ごつごつした、どこか爬虫類じみた顔に禿頭という物騒な外見の乾に、霧子は、いっこうにひるんだ様子を見せていない。
　二人とも、裏の世界に属する人間である。乾はある大掛かりな組織に身を置く一種のエージェントであり、霧子は非合法な医療行為専門の無免許医だ。
　二人がいるのは、霧子の“医院”の応接室である。応接室と言っても、無機質な白一色の部屋に、テーブルと何脚かのイスが置かれているだけの場所ではあるが。
　テーブルの上には、合成樹脂の小さなチューブがある。針のついた、携帯用の使い捨て注射器だ。
「誰があんたに持ちこんだんだ？」
　乾が、無愛想な低い声で訊く。
「円くん」
「――何？」
　霧子の答えが予想外だったのか、乾は思わず聞き返していた。
「結城円くんよ。たまたま学校に行ったら、拾ったんですって」
　乾の反応がおかしかったのか、いままで能面のように無表情だった霧子の顔に、淡い笑みが浮かぶ。
「それは、意外だな……学校はどこなんだ？」
「市内の、第六中学校」
「……そうか」
「さぞかし、気がかりだったんでしょうね」
　笑みを浮かべたまま、霧子が言う。
「こんなものが出回ってたんじゃ、あなたの組織も大打撃ですものね」
「強い薬なのか？」
「強い、と言うより、巧妙ね。なかなかセンスのあるカクテルだわ。いくらでも需要はあると思う」
「……」
　乾が、苦々しげにその薄い唇を歪める。
「これじゃ、乾くんも、なりふりかまってられないわよね」
　意味ありげにそう言う霧子に、しかし、乾は答えなかった。

Neon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

　音楽室。
　外は夕暮れ、西の空が茜色に染まっている。蛍光灯のついていない室内は、予想外に薄暗かった。
「何をしてる、藍原」
　入口のところで逡巡しているセーラー服姿の愛美に、男は声をかけた。
「でも、橘先生……」
「来るんだ」
　何か言いかける小さな少女に、橘と呼ばれたその男は冷たく言う。
　愛美は、おどおどと周囲を見回しながら、音楽室に入っていった。
「やっぱり、学校の中は……」
「藍原」
　橘は、そのクルーカットの精悍な顔に似合わない、神経質そうな表情を浮かべた。
「お前は俺を焦らしているのか？」
「そんなこと、ありません……」
　小さな声で、愛美が言う。
「ちゃんと、渡してきたか？」
「はい……。でも、あたし、恐くて……」
「大丈夫だ。お前みたいな、いかにも大人しそうな生徒なら、絶対に目をつけられることはない。だからこそ適任なんだ」
「……」
　愛美は、沈黙してしまった。
　確かに自分は、橘の言うとおり、見るからに大人しい女子中学生かもしれない。だとしても、あのいかにも不良然とした高校生達が渡す相手では、結局のところ余計に目立ってしまうのではないだろうか。
　そうも思うが、愛美は、何も言わない。
「それより……ご褒美の分は、きちんととっておいたか？」
　口元に歪んだ笑みを浮かべながら言う橘に、愛美はおずおずとポケットの中のものを差し出した。あの、小さな使い捨ての注射器だ。
「じゃあ、スカートを脱いで、机の上に乗るんだ」
　注射器を受け取りながら、橘は愛美に命じた。
「やっぱり、ここでするんですか……」
　愛美の可憐な顔が、哀しげな表情を浮かべる。
「ここなら、きちんと防音されてるからな」
　橘が、愛美を嬲るような口調で言う。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「……」
　愛美は、じっとうつむいた後、フレアスカートのホックを外し、スカートを脱いだ。
　そして、丁寧にそれを畳んで、傍らの椅子の上に置いた後、おずおずと長机の上に座る。三人が並んで座るタイプの、頑丈そうな机である。
　まだ幼さを多分に残す十五歳の少女が、上はセーラー服をまといながら、下はショーツしかはいていない、という姿は、どこか痛々しいようなエロチシズムを感じさせた。
「脚を開け」
　橘に言われて、愛美はゆっくりとその細い脚を開いた。
　ぬけるような白い肌の中で、太腿の内側の部分にだけ、紫色の内出血の痕がある。小さな、しかしひどく痛々しい傷跡だ。
　間を置かずに、何度も同じ場所に注射をされた痕である。
　橘が、慣れた手つきで、その愛美の太腿の内側に、注射針を突き刺した。
「んッ……」
　愛美は、痛みにその細い眉をたわめた。そんな表情さえも、男の歪んだ性感を煽ってしまうということを、愛美は知らない。
「あ……」
　いつもの奇妙な感覚が、愛美の華奢な体を包み込んでいく。
　愛美は、抑えきれないように、小さく喘いでいた。
　その黒い大きな瞳は涙で潤み、人形のように白く端正な顔が、次第に紅潮していく。
　そして、全身を巡る血液が、ある一点に集中していくような感覚……。
　可愛らしいキャラクターがプリントされたショーツの中で、幼いスリットがじんわりと熱を帯び、その存在を主張し始めている。
「あ、あつい……」
　愛美は、うわごとのような口調でつぶやいていた。まるで、体の内側から、とろとろと炎で炙られているような気持ちになっている。
「せんせい……」
　愛美は、机の上にだらしなく座りこんだまま、橘の股間のあたりに視線を向けた。
　普段のおとなしそうな彼女からは考えられない、ねっとりと濡れたような視線である。
「お、おねがいです、せんせい……はやく……」
　そう訴える愛美の方を、しかし、橘は見ていなかった。
「もういいですよ、牟田口さん」
　そう、音楽準備室の方に呼びかける。
「え……？」
　愛美は、すでに半ば理性を失い、とろんと濁った瞳を、音楽実と準備室を隔てるドアに向けた。
「待ちかねたよ、橘君」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

口元に下卑た笑みを浮かべた初老の男が、突き出た腹をゆすりながら入ってくる。この男が牟田口らしい。
「せんせい……どういうこと、ですか……？」
そろそろろれつの怪しくなってきた声で、愛美は橘に言った。
「お前は今日から客を取るんだよ」
愛美の可愛らしい耳たぶに口を寄せながら、橘は言った。
「う、うそ……」
「嘘なものか」
橘が、にやりと口元を歪める。
「だって、せんせい、あたしのこと、すきだって……」
「好きだよ。お前みたいな騙されやすい娘はな」
そう言った後、橘は、愛美の左の耳にふっと息を吹きかけた。
「ひゃうウっ！」
たったそれだけで、体を縮こまらせ、敏感に反応してしまう愛美を、牟田口は血走った目で見ている。
「おいおい、橘君、私の分も残しておいてくれよ」
「これは失礼しました」
浅黒い顔に卑屈な表情をへばりつかせ、橘は言った。
「ではごゆっくり」
そして、橘は音楽準備室の中へと消えていく。
牟田口は、そんな橘にほとんど注意を払うことなく、片手でネクタイを緩めながら、愛美に近付いていった。
「あ……や、やです……」
茫然とした愛美の顔に、牟田口が顔を寄せる。
「ンぶ……」
牟田口は、愛美の細い肩をがっしりと捕らえ、その可憐な唇に唇を重ねた。
「ん、ンんん、ンー……」
分厚い唇の間から、不気味な軟体動物のような舌が現れ、愛美の小さな口をこじあけた。
愛美は、必死になって身をよじり、男の手から逃れようとする。少なくとも、自分ではそうしているつもりだった。
しかし、突然現れたこのおぞましい壮年の狼藉に、体の方は勝手にはしたない反応を返してしまう。
牟田口の分厚い手が、乱暴に愛美のまだ薄い胸をまさぐった。
「ンくう……」
ブラのカップに乳首がこすれる感覚に、思わず甘えるような鼻声を漏らしてしまう。
いつしか愛美は、かつて橘に教え込まれた通り、口腔を蹂躙する舌に、自らの舌を絡め

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

ていた。ぺちょぺちょというイヤらしい水音までが、愛美の官能を高めていく。
「まだ子どものくせに、イヤらしいな、お前は」
　ようやく口を離した牟田口は、嘲るように言った。
「ご、ごめんなさい……」
　普段から謝りぐせのついている愛美は、思わずそう言ってしまう。
「お仕置きだ」
　そんなことを言いながら、牟田口は愛美の体を机の上に押し倒した。
「きゃああン！」
　牟田口は、愛美が高い悲鳴を上げるのもかまわず、その両足を両手で高く支えた。
　そして、まるでオシメをされる乳児のようなポーズをとらせながら、子どもっぽいデザインのショーツを脱がせていく。
「あ、いや、いやあ……」
　愛美が、ばたばたと宙で脚を振る。しかし、薬のせいか、その動きには鋭さがなく、まるでじゃれてふざけているような感じだ。
「ほほお」
　愛美の足首をつかみ、脚をＶの字に開いてその部分を凝視しながら、牟田口は声をもらした。
　ぷっくりとした無毛の恥丘に刻まれたスリットが、その幼げな外見からは考えられないほどの蜜を溢れさせている。ピンク色のクレヴァスがほころびかけているその様子は、まるで異国の可憐な花のようだ。
　牟田口は、意地汚く舌なめずりをしながら、愛美の最も秘めやかな部分に口を寄せた。
「こんなにイヤらしく濡れおって……」
　そう口に出して確認しながら、ぱっくりと恥丘に食いつく。
「ひあアーッ！」
　おぞましさと、そして間違いようのない快感に、愛美は悲鳴をあげた。
　牟田口は、その悲鳴に目を細めながら、肉の花弁に舌を這わせ、ぢゅるぢゅると音をたてて愛液をすする。
「あ、あわァ！　ひあッ！　やああーッ！」
　十五歳の幼い体では受け止めきれない快感に、愛美は陸に上げられた若鮎のように、びくびくと体をくねらせた。
　そんな愛美の、まだくびれきってない幼い腰を抱えるようにして、牟田口がさらに激しく舌を使う。
　自分の娘よりもなお年の離れている少女の秘部をじっくりと味わった後、牟田口はようやく口を離した。
「あ、あああ……ひァ……」
　愛美の体は、未だ、ぴくン、ぴくンと痙攣している。その靡肉からはとろとろと牝の粘

Neon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

液が滴り、会陰を伝って秘めやかなアヌスを濡らしていた。
　牟田口は、愛美の両足を片手で支え、その可憐なすぼまりをくりくりと右手の指で嬲った。
「や、やあァ……やめて、ください……」
　そう言いながら、愛美は力なく首を振った。それが、おぞましい快楽に全身を侵されつつある彼女にできる、精一杯の抵抗だった。
　ともすれば、わずかに残っている嫌悪や羞恥の感情さえ、圧倒的な官能のうねりに押し流されそうになってしまう。
　牟田口は、愛美の中のそんな葛藤など知らぬげに、彼女のアヌスから指を抜き、ポケットから何かを取り出した。
　角の取れた円錐形の、プラスチック製らしい器具である。その根元の部分からは、動物の尻尾を思わせる房が生えている。
　牟田口は、途中で何段かのくびれのある円錐部分を、愛美のアヌスにぐりぐりと押しつけた。
「な、なに？　やめてぇ……っ」
　最も他人にさらしたくない箇所を、見たこともないような道具で弄ばれ、愛美は悲痛な声をあげた。
　しかし、牟田口は、歪んだ笑みを浮かべながら、徐々にその器具を愛美のアヌスに埋め込んでいく。
「イ、イヤ……そんなの、入れないで、ください……」
　愛美の訴えも空しく、牟田口は、その器具のほとんどを愛美の中に侵入させてしまった。
　はァっ、はァっ、はァっ、はァっ……と、愛美が口を半ば開けて喘ぐ。その表情は、肛門を押し広げる奇妙な異物感に、どこかとまどっているようだ。
　牟田口は、左手で愛美の脚を支えたまま、右手で器具のスイッチを入れた。
「きゃあああああああああああッ！」
　ヴィイイイイイ……ンという低くくぐもった唸り声に、愛美の悲鳴が重なった。
　肛門用のローターが細かく振動しながら、愛美のアヌスを残酷に責めあげる。
　その振動にあおられるように、尻尾状の房がふるふると震えているのが、どこか滑稽だ。
「あ、あああああッ？　ンああ！　ああアーッ！」
　普通であれば苦痛しか感じないはずのこの刺激に、愛美は喩えようもない暗い快美感を感じてしまっていた。
「ダメ、ダメ、ダメ、ダメ、ダメえ……」
　そう言いながら、愛美は、両手で顔を覆った。
　牟田口は、愛美の脚から手を放した。愛美は、長机の上で、膝を立てるような仰向けの姿勢になる。
「ダ、メえ……んくっ……ふあ、あ、あ、ああァ……んはぁ……っ」

Yeom PDF Driver Trial
www.yeom.com.tw

苦しげな、それでいながら快楽に濡れた喘ぎを漏らしながら、愛美は半ば腰を浮かし、排泄器官で紡ぎ出される快楽に酔いしれているようだった。
牟田口は、そんな愛美の頭の方に回りこんだ。
「あっ……」
顔を覆う小さな手を強引に外されて、愛美は思わず声をあげていた。
開かれたズボンの前から、半ば血液を充填した牡器官が、グロテスクな外観をさらしている。
目の前に突き出されたその赤紫色の亀頭部に、愛美は圧倒されているようだった。
「これが欲しいんだろう、ああ？」
ぴたぴたと愛美の頬を叩きながら、牟田口が声を上ずらせて言う。
「んぁ……」
愛美は、その小さな桜色の唇を震わせていた。潤んだ大きな瞳は膜がかかったようになっていて、そこにはいかなる理性の光も感じられない。
「ほ……しい……です……」
次々と身の内に湧き起こるおぞましい快感に突き動かされるように、愛美は言った。
「もっとはっきり言え！」
「ごめんなさいっ……ほしいです……ほしいです……っ」
強い声で叱責されて、愛美は淫猥なおねだりを何度も繰り返してしまう。
「だったら、床に四つん這いになってお願いするんだ！」
「は、はい……」
愛美は、かくかくと脚を震わせながら、言われるままに床に下り、両手をついた。
直腸内で振動を続けるローターにつながった房が、まるで本物の尻尾のようだ。
「このイヤらしい牝イヌめ……！」
「あぁ……ごめんなさい……」
「イヌが人間の言葉を使うな！　イヌはイヌらしくワンと鳴くんだ！」
「わ、わん……わん……っ」
惨めさに声を震わせ、ぽろぽろと涙をこぼしながらも、ペニスを前にした愛美は犬の鳴き声を繰り返した。
「しゃ、しゃぶれっ！」
余裕のない声で言いながら、牟田口は、愛美の前に膝をつき、その目の前に半勃ちのペニスを突き出した。
「わん……」
そう返事をして、愛美は、牟田口の汚穢な器官をぱっくりと咥えこんだ。
「うぉぉっ……」
生温かい口内でシャフトに舌が絡みつく感触に、牟田口は思わず声をあげていた。
次第に硬度と容積を増していくペニスに、愛美の小さな口はすぐに一杯になってしまう。

Xeon PDF Driver Trial
www.xeon.com.tw

「くっ……うまいぞ……橘め、さんざお前の口を使ったんだな？」
　愛撫の代わりに、ぐらぐらと愛美の頭をゆすりながら、牟田口が言う。
「んん……ン……ン……ン……」
　愛美はそれに答えず、切なげに眉をたわめながら、醜く静脈を浮かした陰茎に、その可憐な唇をけなげにスライドさせた。
　ちゅぷっ、ちゅぷっ、ちゅぷっ、ちゅぷっ……という湿った音に、愛美のアヌスを責め続けるローターの振動音が重なる。
「ン……んふっ……んんン……んふ〜ン……」
　愛美の鼻声に、媚びるような甘い響きが加わっていく。
「く、咥えるだけじゃなくて、もっとイヤらしい顔で舐め舐めするんだ！」
　そう言いながら、牟田口は腰を引いた。
「んぱっ……はぁ、はぁ……わ、わん……」
　言われるままに、そのピンク色の舌を精一杯伸ばし、愛美は牟田口のペニスを舐めしゃぶった。
　ぬらぬらと唾液に濡れたシャフトが愛美の可愛らしい顔をなぶり、無残に汚していく。
　ペニスへの刺激もさることながら、幼い顔に浮かぶ淫猥なその表情に、牟田口は限界を迎えていた。
「うおおおおおッ！」
　獣のような声をあげながら、左手で愛美の前髪をつかみ、右手で自らをしごきあげる。
「ぐおっ！」
　びゅううッ！　と、その年齢からは考えられないような量と勢いのスペルマが、愛美の顔めがけて宙を飛んだ。
「あうン！」
　顔を叩く熱い粘液の感触に、愛美は思わず顔を背けてしまう。
　べっとりと白濁液に濡れた愛美の頬に、牟田口は自らのペニスをこすりつけた。
　放ったばかりだというのに、そのペニスは、一向に衰える様子がない。そのことに牟田口は驚嘆し、狂喜した。
「こ、今度は、おま×こに突っ込んでやるからな！」
「わん……」
　従順にそう返事を返す愛美の背後に、牟田口は回りこむ。
　愛美のそこは止めどもなく愛液を溢れさせており、太腿の内側まで濡れ光っていた。
　その、熱く息づくピンク色の花弁に、牟田口がグロテスクなペニスを押しつける。
「あああぁぁ……」
　愛美が、期待と絶望に満ちた声をあげる。
　その声に誘われるように、牟田口は、一気に腰を進ませた。
「ンあああああッ！」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

まだ狭い肉の通路を強引に押し広げられ、愛美は、お尻を突き出す格好で床の上に突っ伏してしまった。
まるで、牟田口の突き出た腹に押し倒されたような格好だ。
そんなことに構わず、牟田口がぐいぐいと腰を使う。
「あッ、あッ、あッ、あッ、あッ、あッ……！」
抽送のたびに、エラの張った雁首に、幼い膣内粘膜をこすられ、愛美が断続的な悲鳴をあげる。
薄い肉ごしに、アヌスに埋め込まれたローターの振動を感じながら、牟田口は愛美を犯し続けた。愛美の“尻尾”が、ふるふると震えながら、牟田口の腹を撫で回す。
「あ、あいッ！　いい！　いい！　いいッ！　き、きもちイイッ！」
前と後の肉の門を蹂躙され、快楽に屈服した愛美が、あられもない声をあげる。
ぱあン、その愛美の白いお尻を、牟田口が平手で叩いた。
「きゃあああああッ！」
その衝撃さえ、愛美の腰の中で快楽の電流に変換され、背中を貫いて脳を痺れさせる。
「イヌはイヌらしく鳴くんだッ！」
二度、三度、愛美のお尻をスパンキングしながら、牟田口が叫ぶように言う。
「わ、わんッ！　わん、わん、わううン……ッ！」
リノリウムの床に爪を立て、涎すらこぼしながら、愛美は鳴き続けた。
二人の接合部から愛液が溢れ、下に小さな水溜りを作っていく。
牟田口は、突っ伏したままの愛美の腋に両手を差し入れ、羽交い締めにするようにして引き起こした。
「ンあああああああああああッ！」
体位が変わり、膣内の別の場所を責められて、愛美が高い声をあげる。
牟田口は、セーラー服をまとったままの上半身を抱き締め、突き上げるようにして腰を使った。
「あひッ！　あ！　ンああ！　んわあああああああッ！」
愛美の小さな軽い体が、宙で踊る。
牟田口は、愛美の首をねじって横を向かせ、その頬に舌を這わせた。
愛美が、凄まじい快楽と、かすかに残る嫌悪感に透明な涙をこぼしながら、牟田口の舌に舌を絡める。
ひとしきり、十五歳の少女の舌と唾液を味わった後、牟田口はいきなり立ちあがった。
「きゃうううッ」
深々と貫かれた結合部に自らの体重がかかり、愛美は四肢をばたつかせる。
そして、机に両手をついて、どうにか体の平衡を取り戻した愛美の腰を抱え、牟田口は最後のスパートをかけた。
「きゃああッ！　ひあ！　あ！　あアア！　あく！　あぁあああああああアッ！」

Neon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

立ったまま背後から犯されながら、愛美が、まるで気が狂ったような声をあげる。
いや、すっかり薬物に侵された愛美の心は、その時、確かに狂気の淵を見たのかもしれない。
「！　！　！　！　！」
愛美は、大きく口を開け、声にならない叫びをあげていた。
絶頂を迎えた愛美の膣内がきつく収縮し、肉の襞が激しくざわめく。
「ぐあああああああああああッ！」
断末魔のような声をあげながら、牟田口も、少女の体内にしたたかに精を放っていた。

（あ……）
絶頂の波が通りすぎた後、愛美は、いつもの悪寒を感じていた。
まるで、熱病患者が感じるような、体の奥から湧き起こるような寒気。
凄まじいばかりの疲労感と倦怠感、そして喪失感が、愛美の小さな体を蝕んでいく。
（たす、け、て……）
闇の中で、愛美は、誰に届くとも知れぬ声で、悲鳴をあげ続けた。
上も下も、それどころか自他の区別さえ分からなくなる。
まだわずか十五歳の少女は、はっきりと死を意識しながら、意識を失った。

「ふっ、ふっ、ふっ、ふっ、ふっ、ふっ……」
肥満した肉食獣を思わせるような荒い息をつきながら、牟田口は椅子に座りこんでいた。
その足元で、愛美が、膣口から大量の精液をあふれさせながら、失神している。
橘の話によれば、これから数日、愛美はクラブの合宿という名目で、家を空けることになっているという。この幼い少女を自分の家に監禁し、薬漬けにした挙句さんざんに嬲りものにすることを想像し、牟田口はにやにやと口を歪めた。
と、音楽準備室の扉が、ゆっくりと開いた。
「だ、誰だ？」
この街でそれなりの地位にある牟田口は、さすがに顔を緊張させる。しかし、入ってきたのは、愛美と同年代と思われる、Ｔシャツにスカート姿の少女だった。
少女は、床に倒れている愛美を見ても、ほとんど表情を変えず、牟田口に近付いていく。
その小さな手に、例の使い捨ての注射器があるのを見て、牟田口は一気に緊張を解いた。
「橘君も、サービスしすぎだな。さすがに儂も……」
立ちあがりながら、何か言いかける牟田口に、その栗色の髪の少女が寄り添う。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「おっ……」
　とまどいながらも、にやけた笑みを浮かべる牟田口の太い腹に、少女は腕を回した。
　そして――シャツ越しに、牟田口の腰に注射針を突き刺す。
「なッ？」
　驚く牟田口から、少女はするりと体を離した。
「な、な、な……っ！」
　見開いた牟田口の目が、いかなる作用によるものか、みるみる充血していく。
「お前、は……っ？」
　そう言いかけ、少女に手を伸ばそうとしながら、がっくりと牟田口は膝をついていた。
　まだ剥き出しになっていた牟田口のペニスが、信じられないほどに膨張している。
　その、先ほどの倍以上にまで膨らんだ自らのモノに気付く様子もなく、牟田口は左の胸を右手で押さえた。
「ぐが……げええ……」
　血行に異常が生じているのか、顔を赤黒く染めながら、牟田口はうずくまった。眼球の毛細血管が切れ、まるで血の涙を流しているようだ。
　ぶつン、とどこかで何かが千切れるような音が響く。
「ぐべ……」
　牟田口はくるりと眼球を裏返しにし、だらしなく床に倒れ伏した。
　その股間で、海綿体を断裂させたペニスが、まるで冗談のように膨らみ続けている。
「やっぱり原液は強力なんだね……」
　混じり気なしの同情をその顔に浮かべながら、少女はつぶやいた。
「終わったか？」
　準備室から、低い男の声が響く。乾だ。
　その乾の足元には、もとの人相が分からなくなるくらいに顔を腫れさせた橘が座り込んでいる。
「うん」
　そう、乾に返事をしながら、少女――いや、少女の姿をした円は、未だ失神したままの愛美の体を抱えあげた。
　いくら愛美が小さいとはいえ、円の体も少女そのままの華奢なものである。円は、頼りなくよろめいてしまう。
「手伝おうか？」
「いいよ」
　意外なほどきっぱりと、円は言った。
「それに、乾さんは、そこの先生を連れてくんじゃないの？」
　円が、ちら、と橘に視線を向ける。
「いや、聞きたいことは全て聞いた。あとはほっとくさ」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「ふーン。……じゃ、悪いけど、霧子センセのとこに送ってって」
「分かってる」
　そう答えた後、乾は、まだびくびくと痙攣している牟田口に、黒眼鏡の奥の視線を移した。
「しかしまあ、大したタマだな。さすがは、結城の弟だ」
「それはどーも♪」
　まるで、成績を褒められた子どものように、円がにっこりと微笑んだ。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

３－２

「ンだとコラあ！」
　ステロタイプな台詞を吐きながら、国村は健の襟首をつかんだ。
　そのまま、健の華奢な体を、校舎の壁に押しつける。
　放課後の校舎裏。夏の日は未だ高いが、ここは往来から死角になっている。不良という鋳型にはまった生徒たちが何かことを起こすには、なかなかのロケーションである。
　国村のほかに二人、髪を脱色した生徒たちが、にやけた笑みをその顔にへばりつけている。
「いつからンな生意気になったんだよ、このカマ野郎！」
　そう言いながら、国村は、健の少女じみた顔を、ごつい拳で小突いた。
　しかし健は、国村のがたいのいい体を前にして、自分自身でも驚くほど冷静だった。
　何かの覚悟のようなものが、その眼鏡の奥の瞳の中にある。
　流されるままにだらだらと不良になってしまった国村たちの目にはけして現れることはないであろう、強く静かな光だ。
　その顔には、かすかな微笑みさえ、浮かんでいるように見える。
「このッ！」
　国村は、いきなり健の頬を殴打した。
　後の二人が、ぎょっとしたような表情をする。二人には、国村の体に隠れて、健の表情までは見えなかったのだ。
　無論、国村がなぜこのように激昂したのか、全く理解できない。
「お、おい……」
　地面に倒れた健をなおも蹴りつけようとする国村に、二人のうち一人が遠慮がちに声をかける。
「やめといてやれよ。お前が本気出したら、七瀬、死んじまうぜ」
　自分たちの方が優位である、という体裁を崩さないために、わざとそんなことを言う。
　健は半身を起こしながら、そんなやりとりを、どこか憐れむような表情で見つめていた。
　ここにいたって、残り二人も、国村がなぜここまで怒りを露にしたのか、ようやく理解した。
　目の前の、つい先日まで自分達の言うことを何でも聞いたひ弱な少年が、いつのまにか豹変している。見慣れていたはずの怯えの色が姿を消し、あろうことか自分達に同情しているような様子すら見せているのだ。
「こいつ……」
　誰ともなく、唸るような声をあげる。
　次第に高まっていく暴力的な雰囲気に、さすがに緊張しながらも、健はけしてひるまな

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

かった。
「やめなさいよ」
　と、その時、大きくはないがよく響く声が、校舎裏に響いた。
「ゆ、結城？」
　振り返った国村が、思わず口に出して言ってしまう。
　そこにいたのは、確かに小夜歌だった。切れ長の大きな目に、蔑むような冷たい光を浮かべている。
「あたしたち、ここで発声練習するの。邪魔だからよそに行って」
「――分かったよ」
　脅しの効かない相手には、面子の立てようがない。三人は、小夜歌にひどく敵対的な一瞥をくれながら、そこから去っていった。
「大丈夫？　七瀬」
　小夜歌は、普段通りの口調で、健を姓で呼んだ。
「う、うん。……ありがとう」
　殴られた頬に手を当てながら、健は、さっきまでとは打って変わった柔らかな表情で、立ちあがった。
「殴られたの？」
「別に、平気だよ」
「ふふ。そういうとこは、男の子だね」
　そう言って小夜歌が微笑んで見せると、健は少し顔を赤らめた。
「で、あいつらが、例の件を七瀬にさせてた奴ら？」
　例の件というのは、健が、女子更衣室で小夜歌の下着を盗もうとしたことである。
「うん」
「そいつらに迫られてたってことは……パンツ、渡さなかったの？」
　あけすけな小夜歌の物言いに、ますます顔を赤くしながら、健はかすかに肯いた。
「別に、やってもよかったのに」
「渡したくなかったんだ……僕が」
　まるで、ひどく大事なことを告白するように、健が言う。
「だから、あとで返すよ。そのう……イヤかもしれないけど」
「別にイヤってわけじゃないけど……でも、いいわ。あれは、七瀬にあげる」
「あ、あげるって言われても……」
「オカズにでもなんでもしてよ」
「結城さん！」
　歌うような調子で言う小夜歌に、健は思わず大きな声を出していた。そんな健の顔を、小夜歌は面白そうに見つめている。
「……一緒に帰ろっか？」

Veon PDF Driver Trial
www.veon.com.tw

「え？」
　小夜歌の思わぬ申し出に、健は、長いまつげに縁取られた目を、大きく見開いた。
「だって……練習は？」
「こんなとこでするわけないでしょ。今日は合唱部休みよ」
「あ、そう……」
「七瀬、カバンは？」
「えっと、部室に置きっぱなし」
「部室？　七瀬って、どこに入ってたの？」
「……演劇部」
　小さな声でそういう健に、小夜歌はとうとう吹き出してしまっていた。

　演劇部は、校舎内の空き教室を部室として利用していた。
　大道具や小道具、それに、ラウンドハンガーにぶら下がった派手な衣装などが、所狭しと並べられており、中は意外に薄暗い。
「ふうん、けっこう凝ってるんだ」
　高校の演劇部の備品としては格段に質のいい衣装をしげしげと眺めながら、小夜歌はわずかに感心したような声を出した。
「先代の部長が、けっこう気合い入れてたから」
「七瀬も、こういうの着たりするの？」
　フラメンコのダンサーが着るような、真紅のドレスの袖口をつまみながら、小夜歌が訊いた。
「き、着ないよ！　舞台では……」
「舞台じゃなきゃ着るんだ」
　思わず本音を言ってしまった健に、小夜歌はくすくすと笑いながら言った。
「それは……前は、先輩が面白がって、無理やり着せたりしたけど……今は、しないよ」
　少しうつむきながら、健が言い訳がましく言う。
「……健クン」
　不意に名前で呼ばれて、健ははっと顔を上げた。
「着替えて見せて。ここで」
　その黒い瞳をどこか妖しく濡らしながら、小夜歌が言う。
「ここで……？」
「そう。あたしの目の前で」
　健は、何か言いかけた。
　しかし、何も言葉が出てこない。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

小夜歌は、そんな健の様子を、面白そうに眺めている。
結局、健はこっくりと肯いてしまった。

小夜歌が健に着るように選んだのは、ひどく可愛らしいデザインの、空色のドレスだった。フリルやレースをふんだんに使った、西洋のおとぎばなしに登場するお姫様が着るようなドレスである。
胸の部分にパットが入ってることもあって、それを着ると、健はもはや少女にしか見えなかった。
「よく似合ってるわよ、健クン」
そんなことを言いながら、小夜歌は、健を姿見の前に誘導する。
頬をかすかに上気させながら、鏡の向こうでこちらを見ているその姿は、健自身が呆れてしまうほどに女のコらしい。小夜歌のリクエストで眼鏡を外しているため、ますます自分の顔ではないようである。
「ふふふっ……」
小夜歌は、健の白い両手をそっと握って、背中に回した。
「な、何するの……？」
そんな健の言葉には答えず、小夜歌は、隠し持っていたリボンで、くるくると健の左右の手首を縛っていった。部室の隅に転がっていたものを拝借したのだ。
「ちょ、ちょっと、結城さん……！」
「こういうの、嫌い？」
口元に、十七歳という年齢からは考えられないくらい妖艶な笑みを浮かべながら、小夜歌は健の耳元で囁いた。
「こ、こういうのって……？」
「女装したり、縛られたりして、興奮してるんじゃないの？」
「そんな……」
小夜歌の髪から漂う、リンスと、かすかな汗の香りを感じながら、健が弱々しい抗議の声をあげる。
「そんなことない？」
そう言いながら、小夜歌は、健の背中にぴったりと体を押しつけながら、そろそろと自分の両手を前の方に持ってきた。
「あ……」
健が、どこかうろたえたような声をあげる。
「お嬢さんのスカートの中は、どんなになっちゃってるのかな？」
そう言いながら、小夜歌は、健の背後からスカートをめくりあげていく。
「や、やめてよ……」
健が、ふるふるとかぶりを振る。しかし、思いきり暴れて小夜歌を跳ね飛ばすようなま

Xeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

ねは、健にはできなかった。
「あはっ……」
　スカートを腰までめくりあげた小夜歌は、何だかとても嬉しそうな声をあげていた。
　健のモノが、トランクスの中で、布地を突き破りそうな大きさにまで膨らんでいる。
「なんか、窮屈で可哀想……今、お外に出してあげるね」
　まるで子どもに話しかけてるような口調で言いながら、小夜歌が、片手でトランクスをずり下ろす。
　ぶるん、とその可愛らしい顔からは想像できないような巨大なものが、外界にさらされた。
　まだ半ばしか血液を充填させていないにもかかわらず、すでに見た者を圧倒するほどの大きさになっているソレが、さらに角度と硬度を増していく。
「スゴいね、健クンの」
　スカートのすそを、ウェストを留めている紐に挟んでから、小夜歌は健の両肩に手を置いた。
「やっぱり、興奮してるんじゃない……」
　ほとんど身長差のない健の頬に、背後から自分の頬を押しつけるようにしながら、小夜歌が言う。
「こ、これは……結城さんが、あんまり近くにいるから……」
　そう言い訳する間にも、健のペニスは、きりきりと屹立していく。
「ふーん、あたしのせいなんだ……」
　そう言いながら、小夜歌は、肩から胸、脇、腰へと、その白い手をずらしていく。
「ゆ、結城さん……」
　健が、怯えていると言ってもいいような声をあげる。
　小夜歌の細い指先が、そっと、健のペニスに触れた。
「あッ……」
　その部分に初めて感じる他人の手の感触に、健は思わず声をあげてしまう。
　正確に言うなら、健のペニスに小夜歌が触れるのは、これが最初ではない。しかし、そのとき触れたのは、小夜歌の足だった。
　健はその時、小夜歌にその巨根を踏みつけにされ、なぜか浅ましくも大量に射精してしまったのだ。
　今の小夜歌の指使いは、当然のことながら、その時とは全く異なる感触である。
　小夜歌は、まるで小さな動物をそっと撫でるような優しい手つきで、びくびくと震えるペニスを撫で上げた。
　健は、それだけで腰が砕けそうになる。
「気持ちイイ？　健クン」
「……」

Xeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

唇を噛んで答えようとしない健に、小夜歌はにっこりと微笑み、その小さな手には大きすぎる男根を、触れるか触れないかという微妙なタッチで愛撫し始めた。
シャフトに沿って指を遊ばせたり、鈴口から出る先走りの液を、敏感な亀頭の部分に指で伸ばしたりする。
「あぁ……」
その逞しいペニスを弄ばれながら、健は思わず恍惚の喘ぎを漏らしていた。
「ほら、きちんと鏡見なさいよ」
さらさらした髪に隠れた耳たぶに息を吹きかけるようにして、小夜歌が健に言う。
半ば閉じていた目を開くと、そこには、快楽に目を潤ませ、頬を赤く染める、可憐な少女の顔があった。
そして、子どもの夢に出てきそうなひらひらの衣装をまとい、押し寄せる快感に身悶えするその少女の股間からは、グロテスクな赤色の肉棒が屹立し、自らの吐き出した粘液で濡れ光っている。
（これが……これが、僕……？）
ぞくぞくと背筋が震えるような感覚を覚えながら、健は鏡に見入っていた。
そんな健と、鏡の中の小夜歌の目が合う。
小夜歌は、その白い顔をほんのりと上気させながら、優しく健のペニスを嬲り続けていた。
「あっ、ああ、ああ、ああっ、あぁあ……」
健の口からは、止めどもなく甘い吐息が漏れる。
小夜歌は、巧みに健の性感をコントロールしていた。ペニスが、射精の予感にひくひくと動き出すと、すっとその細い指を内股や陰嚢に移してしまうのだ。
「ああっ……」
そして、辛そうな健の喘ぎをうっとりとした顔で聞きながら、繊細な手つきで内股を撫でさすり、指の先で陰袋をくすぐるのである。
その度に、健は小夜歌の細い腕の中で小さく身悶えし、尿道口からは大量のカウパー氏腺液が溢れる。
「気持ちイイんでしょ、健クン……」
小夜歌は、少し声を上ずらせながらも、それでも余裕たっぷりに健に訊いた。
健が、恥ずかしそうに肯く。
「ダ・メ♪　きちんと、言葉で言わなきゃ……」
そう言った後、小夜歌は、健の白い首筋に唇を寄せ、ちろちろとその肌を舌でくすぐった。
「ンあああっ」
健が、まるで声変わりし忘れてしまったかのような、高い声をあげる。
「どうなの？　健クン……言わないと、これで止めちゃうよ……」

Neon PDF Driver Trial
www.neon.com.tw

「……イイ……」
「なぁに？」
　わざとらしくそう言いながら、小夜歌は、健のペニスからぱっと手を離した。
「き、きもちイイよ……っ！」
　慌てた口調で、健が叫ぶように言った。
「イイんだ……きもちイイから……お願い、続けてぇ……」
　羞恥に顔を染め、涙すらにじませながら、健は必死に懇願した。
　ふぅっ、と小夜歌が満足げな吐息を漏らす。
「続けてあげる、健クン……」
　快楽という鎖によって、同い年の男子をいともたやすく支配化に置く事に成功したその少女は、そっと少年の柔らかな頬に唇を押し当てた。
　そうしながらも、もう一本のリボンを手に取り、長大なペニスの根元に結びつける。
「あッ！」
　健が驚きの声をあげたときには、小夜歌は手早くそのささやかな緊縛を完成させていた。
　ご丁寧にもちょうちょ結びに結ばれた真紅のリボンが、逞しい男根の根元を、食いこむほどに締めつけている。
「やめてよ、結城さん……こんな……！」
「どうして？」
　情け無い声で抗議する健に、小夜歌は、淫らな小悪魔を思わせるような表情で笑いかけた。
「もっともっと、このおっきなオチンチン、いじくってほしいんでしょう」
　卑猥な言葉を口にしながら、ちろりと自らの唇をピンク色の舌で舐める。
「だから、うんと楽しめるようにしてあげたのに……」
　そして、小夜歌は、その繊細で残酷な愛撫を再開した。
「アあああああッ！」
　健が、恥も外聞もない悲鳴をあげる。
　小夜歌の愛撫は、これからが本番とでも言いたげに、先程よりも激しくなっていた。
　先走りの粘液でぬるぬるになった亀頭を親指でこする。
　雁首の部分を指先でえぐるように嬲る。
　裏筋をちょろちょろとくすぐる。
　竿を大胆にしごく――。
「あうッ！　はッ！　んぐッ！　わあああッ！」
　通常であったらとっくに射精に追いこまれているであろう刺激に何度も何度もさらされながら、健は喚き、身悶えた。
「健クンてば……国村相手に突っ張ってた時とは大違いね」
　乱れた健の頭髪に、その形のいい鼻を半ばうずめるようにしながら、小夜歌が言う。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「だって、だってェ……」
　健の声は、ほとんど涙声だ。
「泣かなくていいのよ。今の健クン、すっごく可愛いわ……」
　明らかに興奮した口調でそう囁きながら、小夜歌は健の巨根をもてあそび続けた。
　右手で、静脈の浮いたシャフトをしごきながら、左手で赤く充血した亀頭を撫でこする。
　鈴口からはぴゅるぴゅると断続的に透明な汁が溢れ、それは、健のペニスと小夜歌の両手を、無残なほどに汚し、濡れ光らせた。
　熱くたぎる体液の塊がペニスの根元に溜まり、凄まじい苦痛を伴う快感で、健を苛む。
「ああ……もうダメ……ゆるして……イかせてよぉ……」
　健は、リボンで縛られた両手をぎゅっと握り、もどかしげに腰を動かしながら、背後の小夜歌に哀願する。
　くねくねと揺れる健のお尻に、ぴったりと自分の腰を当てながら、その切れ長の目を半ば閉じた小夜歌の表情は、淫蕩と言ってもいいくらいだった。
「そんなにイキたい？」
　小夜歌の言葉に、健が激しく肯く。
「どうしようかなあ……」
　小夜歌は、いたぶるようにそう言った。
「あたしは、もっと健クンのオチンチン、しこしこしてあげたいんだけど」
　鈴の音を思わせる綺麗な声で卑猥な言葉を囁かれ、健は目のくらむような感覚を覚える。
「ほーら♪　しこしこ、しこしこ、しこしこ、しこしこ……」
　健の興奮を見抜いたかのように、小夜歌は、自らの手の動きに合わせ、その普段のクールさからは考えられないような猥語を囁き続ける。
「健クンのオチンチンだって、あたしに手コキされて、すっごく悦んでるじゃない」
　しゅちゅっ、しゅちゅっ、しゅちゅっ……といった感じの音を立てながら、小夜歌は健のペニスをしごくのをやめようとはしない。
　健のペニスは、これまでの責めに鬱血し、さらに体積を増したようだ。時折びくびくとしゃくりあげ、どうにか精液を迸らせようとするのだが、無論、それはかなわない。
「結城さん……おねがい……イかせて、くださいッ……イか、せてぇ……」
　健は、口をぱくぱくとさせながら、どうにか苦労して意味のある言葉を話そうとする。
　これ以上、この甘美な責めにさらされたら発狂してしまうのではないか、と、健はかすかに思った。
「健クン……」
　小夜歌は口調を変え、かすかに震えているような声で言った。
　しかし健は、そんな小夜歌の微妙な声の変化が分かるような状態ではない。
「健クン、あたしのこと、好き？」
　自分の中の、最も深く神聖な場所に関する問いに、少年は、かすかに理性を取り戻した。

Neon PDF Driver Trial
www.xeon.com.tw

「……」
　反射的に自らの想いを告白しようとして、ふと、健は口をつぐんだ。
（こんな時に言ったら……ホントかウソか分からなくなっちゃう……）
　少年らしい潔癖さでそう考え、健は、血がにじむくらいに、その唇を噛み締めた。
「やっぱり、こんなことする女は、嫌い……？」
　小夜歌は、怯える子どものような声で、さらに訊いた。
　健は、未だ湧き起こり続けている苦痛を伴った快感に耐えながら、石にでもなったように体を硬直させ、押し黙る。
　かっ、と小夜歌の大きな黒い瞳に、激しい炎が灯った。
「答えなさいよッ！」
　そして、亀頭を撫でさすっていた左手を、健のお尻にあてがい、アヌスに指を突き入れる。
「きゃあああああああああああああああああああああああああああアーッ！」
　前立腺を強烈に刺激され、健は断末魔の少女のような絶叫をあげた。
　健のペニスが、小夜歌の右手の中で、さらに膨張する。
　生理的に射精を強いられながら、物理的に射精を妨げられる凄まじい苦痛に、健のわずかに残っていた理性は瞬時に蒸発した。
「好きですッ！　好き！　僕、小夜歌さんが好きですッ！」
　そして、狂ったようにそう喚き散らす。
　小夜歌は、しゅるっ、と健のペニスを束縛していたリボンを解いた。
「んア……ッッッ！」
　すでに、小夜歌への告白で肺を空っぽにしていた健は、叫ぶこともできない。
　どぶびゅびゅびゅッ！
　大量のザーメンがすごい勢いで一直線に宙を飛び、姿見を直撃する。
　びゅーっ、びゅーっ、びゅーっ、びゅーっ……
　一度の射精では収まらず、何度も何度も、健のペニスは律動を繰り返し、その度に、通常の一回分ほどの白濁液をあたりに撒き散らした。
「あ……かはっ……は……あァァ……」
　呼吸困難に陥り、涙と涎をだらしなくこぼしながら、健は全身を痙攣させる。
「健クン……」
　小夜歌は、自らの手によって絶頂に追い込んだ健の体を、後からそっと抱き締めた。
　その表情は複雑だが、どことなく、安堵しているようにも見える。
「あ……ああァ……ひぁ……あアア……」
　未だ、射精の余韻にぶるぶると震え続ける少年の体を布越しに感じながら、少女も確かに絶頂を味わっていた。
　そして二人は、まるで一つの生き物のように、一緒になって、ぺたん、と床に座り込ん

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

でしまう。
「ぁ……」
　健の空ろな瞳に、おびただしい量の精液によって汚された姿見がある。
　健は、自分が、初恋の少女に対して最悪の形で告白したのだということを、ぼんやりと自覚していた。

　二人は、並んで家路についていた。
「汗かいちゃったね、七瀬」
　どこか、あっけらかんとした口調で、小夜歌が言う。
「うん……」
　一方、健の表情は重い。
　歩きながら、二人の会話はあまり弾まない。しかし、小夜歌は平気な顔だ。
　ちら、と健は、そんな小夜歌に眼鏡の奥から視線を向けた。
「じゃ、あたしこっちだから」
　立ち止まって、分かれ道を指差しながらそう言う小夜歌に、目が合ってしまう。
「明日、終業式だよね」
　健が、やはり立ち止まり、言葉を選ぶようにして言う。
「そうだね」
　小夜歌が答える。
　――どこか、一緒に行かない？　プールとか、海とか、映画とか……。
　そんな当たり前の言葉が、健の口からは出てこない。
「じゃね」
　軽く手をあげて、小夜歌は歩き出した。
　健は、そんな小夜歌の背中を、ぼんやりと眺めていた。
（まだ、明日があるし……）
　そう思いながらも、健の表情は、重いままだった。

　翌日の放課後。校舎裏。
「こんなとこに呼び出して、どうするつもり？」
　小夜歌は、目の前の国村に言った。
　国村は、物騒な目つきで小夜歌を睨んでいる。
　無論、小夜歌とて、この国村の存在を警戒している。しかし、あの盗撮ビデオに関する

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

有力な手がかりであることも確かだ。
　それに今、相手は一人。どこかに誰かが潜んでいる様子もない。
　何かされそうになっても、適当にかわした後、人のいる場所に逃げ出す。多少、合気道をかじっている小夜歌には、それくらいの自信はあった。
「訊きたいことがあるんだよ」
　国村の口調には、どこか余裕がない。
「なに？」
　小夜歌の声は、対照的に、ひどく冷静だ。
「お前、橘サンとどういう関係なんだ？」
「は？」
　予想とかなり違う展開に、小夜歌は多少面食らった。
「橘サンの女とか、そういうのじゃねえんだよな」
「知らないわよ、そんな人」
　つまらなそうに、小夜歌は答える。
「じゃあ、クスリのことも知らねえのかよ」
「薬？」
　小夜歌は、ますます不審げな顔をして見せた。
　ある程度のことだったら、とぼけて情報を聞き出すくらいのことは考えていたのだが、国村の話は突拍子がなさすぎる。
「そのタチバナとか言う人に命令されて、あたしのビデオ、撮ろうとしたの？」
　とりあえず、小夜歌はカマをかけてみる。
「やっぱばれてたか……。そんなトコだよ」
「……」
　小夜歌は、その明晰な頭を素早く回転させた。
（タチバナなんて名前には、憶えがないけど……）
（薬って言うからには……麻薬……危ない仕事……やっぱ、お兄ちゃんがらみ、なんだわ）
（あたしのビデオを撮って……お兄ちゃんへの取引材料にしようとしたのかしら……？）
　小夜歌は、はっとして素早く身を引いた。国村が、危険な表情を浮かべながら、尻ポケットに手を突っ込んだのだ。その巨体から考えると、意外と素早い。
　小夜歌は、一瞬の逡巡の後、国村の攻撃を受け流した後に、逃げることにした。
　国村が、右手を繰り出す。その動きは、速くはあるが直線的だ。
　しかし――
（いけない！）
　そう思ったときには、小夜歌の全身に激痛が走っていた。
「あぐッ……！」
　体から、力が抜ける。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

視界が暗転した。
（おにい、ちゃん……）
絶望に染まる心の中で届かない声をあげる。
小夜歌は、意識を失い、がっくりと倒れた。
国村が獰猛な笑みをその口元に浮かべる。
その右手には、スタンガンが握られていた。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

１－３

　千鶴は、公平に言って、鞭の痛みによく耐えた。
　暗い地下室の中で、着衣のまま鞭で打たれるなどという体験は、ほとんどの人間にとって、予想もしなかった事態である。普通の少女であれば、数度、本気で鞭打たれれば、あっけなく屈服するものだ。
　しかし、千鶴は耐えた。
　鞭で叩かれることによって、服が裂け、肌に傷が走り、血がにじむ。それでも、千鶴は、その両目に凛とした光を湛え、遼の顔をにらみ続けた。
　その背後で、由奈が、分娩台の上でくったりと横たわっている。
（この男が、センパイを……！）
　もしも視線で人が殺せるなら、瞬時に遼の心臓を停止させてしまいたい、とでも言いたげな目で、遼を凝視する。
　しかし、遼は平気な顔だ。
　あまり効果が期待できないと見て、遼は、鞭による打擲をやめた。
　さすがに、千鶴が安堵の表情を浮かべる。
　遼は、麻縄を手に千鶴に近付き、ぐったりと座りこんだままのその体を強引に立たせた。
「くっ……」
　鞭打ちで消耗した千鶴には、抗う力は残っていない。せいぜい、悲鳴をあげまいと唇を噛むくらいだ。
　そんな千鶴の左手を戒めていた手錠を外しながら、遼は、慣れた手つきで縄がけしていく。
「な、なにすんのよ……この、ヘンタイ……っ！」
　そう言う千鶴の声は、しかし、かなり弱々しい。
「レズは変態じゃないのかよ」
　可笑しそうに嗤いながら、遼は、高手小手の形に、千鶴の緊縛を完成させた。
　そして、部屋の中央よりに引っ張っていき、天井から下がる鎖の先端のフックに、千鶴を縛る縄を引っ掛ける。
「あああッ！」
　とうとう、千鶴は悲鳴をあげてしまった。
　遼が滑車を動かしたことによって、千鶴の体が宙に吊るされたのだ。
「ひ……いいい……ッ」
　きりきりと縄が食い込み、ずたずたになったシャツの下の形のいい乳房が、無残に歪んでいく。
　思いきり爪先立ちをして、足の先端が床に届くか届かないかという程度の高さである。

Neon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

千鶴は、その形のいい足をばたつかせ、必死に身悶えした。
　だが、もがけばもがくほど、縄による苦痛は激しくなる。
　はァ、はァ、はァ、はァ……
　額に汗を浮かべ、小刻みな呼吸を繰り返す千鶴の前に、遼が立った。
　そして、手に持った大きな裁断バサミを、千鶴の目の前にさらす。
「ひ……！」
　しゃきん、と遼が鋏を開閉させる音に、千鶴は、その顔をさあっと青ざめさせた。
「動くと、いらん怪我をするぞ」
　そう宣言して、遼は、千鶴のホットパンツの裾に、鋏の片方の刃を差し込んだ。
「や、やめてよッ！」
　千鶴が、悲鳴混じりの声で叫ぶ。しかし、さすがに脚を動かすことはできない。
「今に、脱いでおいてよかったと思うようになるさ」
　どういうつもりかそう言って、遼は、何の容赦もなく、綿の布地を切り裂いていく。
「ううう……ッ」
　無残に切り刻まれたホットパンツが床に落ちたとき、千鶴は、屈辱に小さくうめいた。
　遼は、露になったスポーティーなデザインのショーツに手をかける。
「やめて……よぉ……」
　千鶴の声は、涙に濡れていた。
　無論、遼は、手を休めなどしない。千鶴を怯えさせるように、わざと冷たい鋏の刃をその下腹部に当てながら、ショーツを刻んでいく。
「くッ……」
　下半身が剥き出しになったとき、千鶴は、とうとうかすかな嗚咽をもらしてしまった。
　涙が一筋、頬を伝う。
「毛深いオマンコだな。きちんと処理してるのか？」
　実際は、言うほどの量ではないのだが、遼はわざとそんなことを言った。
　きっ、と涙に濡れた目で、千鶴が遼の顔をにらむ。
「その調子だ」
　そう言って、遼は、千鶴の左の膝を、ぐい、と持ち上げた。
「きゃああッ！」
　苦痛と羞恥に千鶴が悲鳴をあげるのも構わず、膝に、拘束具をはめる。やはり天上から下がった鎖の先にある、革製のベルトである。
「いやッ！　いやだあ！　やめて！　やめてえッ！」
　そんな千鶴の高い声を聞きながら、右の膝にも、同じ事をする。
　千鶴は、空中でMの字に脚を開いた状態で吊るされる形になった。
　否が応でも、その未だ成熟しきっていない性器と、秘めやかなアヌスを、目の前の遼にさらすことになってしまう。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

遼は、前髪の奥の冷たい瞳で、じっくりと千鶴の秘部全体を視姦した。
黒い陰毛の下で息づく秘裂には、ほとんど色素が沈着しておらず、綺麗なピンク色をしている。かすかに靡肉がめくれあがっている様は、ほころびかけた南洋の花を思わせた。
さらに下のセピア色のアヌスは、小さくすぼまり、何となく慎ましやかな印象さえ見る者に与える。
最も隠しておきたい部分を、憎むべき男に、まるで値踏みするような目つきで見られ、千鶴は歯を食いしばりながら顔を背けた。その、羞恥に赤く染まった頬を、透明な涙が伝う。
「さて……由奈」
遼は、まだぐったりとしている由奈に呼びかけた。
「あ、はい……」
由奈が、半身を起こし、ひどく頼りない声で返事をする。
「準備だ」
遼の短い言葉にこっくりと肯き、由奈はのろのろと分娩台から降りた。そして、部屋の隅にある、ユニット式のバスルームに入っていく。
「なに、する気……？」
千鶴の声には、かすかに怯えの色がある。しかし、遼は答えない。
「お待たせしました……」
そう言いながら、未だ全裸のままの由奈が戻ってきたとき、不安げな表情を浮かべていた千鶴の目が、はっと見開かれた。
由奈が持ってきたのは、透明な液体で半ばまで満たされた、プラスチック製のバケツだった。そして、その中に、巨大な注射器を思わせる器具がある。
「ま、まさか……」
千鶴が、声を震わせる。
遼は、由奈にバケツを持たせたまま、そのシリンダー式の浣腸器に、洗面器の中の液体を吸い上げた。
そんな遼を、由奈は、その幼い顔に似合わない複雑な表情で見つめている。
「や、やだッ！　いやあ！」
千鶴は、空中でじたばたとその身をよじらせた。無論、そのしなやかな体を、縄がさらにきつく苛むだけで、何の効果もない。
「や、やめてよ……そんなの……やめてったらあ！」
千鶴が、震える声で叫ぶように言う。
「押さえろ、由奈」
「はい……」
遼の命令に返事をして、由奈は、バケツを千鶴のちょうど真下に置いた。そして、千鶴の背後に回り込む。

Neon PDF Driver Trial
www.neon.com.tw

　由奈は、千鶴の引き締まった腰を、その小さな両手で押さえた。
「……震えてるの？　千鶴ちゃん」
　千鶴の戦きを両手に感じて、由奈が小首をかしげながら訊く。千鶴は、首をひねって、そんな由奈の方を向いた。
「センパイ、どうしてェ……なんで……こんなコト……お、おかしいよ！　こんなのっておかしいよおッ！」
　もはや、千鶴の言葉は支離滅裂だ。その吊り気味の目からは、大粒の涙がこぼれている。
　由奈は、そんな千鶴の様子を見ながら、初めてにっこりと微笑んだ。
「あたしはね、千鶴ちゃん……ご主人様の奴隷なの」
　無邪気とも言えるその表情に、千鶴はぞくりと背を震わせた。
「千鶴ちゃんにも、すぐに分かるわ……。ううん、ご主人様が、教えてくれる……」
「セ、センパイ、これってヘンですよお！　狂ってる……っ！　正気に、もどってくださいよおッ！」
　そう喚く千鶴を見つめる由奈の笑みに、かすかな影が差す。
　それは、優越感であり、憐憫であり、そして――ごくかすかな嫉妬だった。
　少女達のかみ合わない会話が一段落したのを見計らって、遼は、浣腸器の先端を、千鶴のアヌスに当てた。
「あああああッ！」
　ガラスの硬く冷たい感触に、びくッ！　と千鶴の体が硬直する。
「やだ、やだ、やだ、やだ……」
　ぶるぶると震えながら、千鶴は童女のようにそう繰り返す。
　しかし、遼は容赦なく千鶴の肛門に浣腸器を差しこみ、そして、ゆっくりとピストンを押した。
「きゃあああああああああああああアーッ！」
　直腸を経由して、体内に強制的に薬液を注入されるおぞましさに、千鶴は悲鳴をあげる。
　しかし、そのおぞましさとても、これから始まる苦痛に比べれば、なんということはないものであった。
　遼が、直腸粘膜を傷付けないように注意しながら、浣腸器を抜き、身を離す。
　由奈も千鶴の腰から手を離し、そっと遼に寄り添った。遼は、そんな由奈の体を無言で引き寄せ、背後から腕を回す。
「あ……ン」
　その中学生のような体にはアンバランスなほどの巨乳を乱暴に掴まれ、由奈が甘い声をあげた。
　遼が、慣れた手つきで、由奈の二つの膨らみをやわやわと揉みしだく。
「んくっ……ン……ああン……」
　由奈は、遼の腕の中で小さく身をよじった。無論、遼の愛撫を拒否してのことではない。

Xeon PDF Driver Trial
www.xeon.com.tw

それどころか、すりすりと甘えるように遼の体に自らの背中をすりよせる。
　千鶴は、声を出すこともできずに、そんな二人の痴態を眺めていた。
　と、唐突に、重苦しい痛みが、千鶴の腹部を襲う
「んぐっ」
　千鶴は思わずうめいていた。
　苦痛が、千鶴の体内で急速に膨れ上がっていく。
「ん、んん、んううッ……」
　千鶴の秀でた額に、じっとりと脂汗がにじんだ。
　凶暴なまでの便意が、千鶴の体内で暴れ、出口を求めている。
　プライド、と言うよりも人間性そのものの危機に、千鶴は戦慄していた。
　そんな千鶴の様子を、遼によってもたらされる快楽に瞳を潤ませながら、由奈が見ている。
「や、やだあ……センパイ、見ないで……」
　そんな千鶴の言葉も、由奈の耳には届いていないようだ。
　由奈は、腹痛と便意に身悶える千鶴を、どこか膜のかかったような瞳で、じっと見つめ続けている。
　そんな由奈の股間に、遼は、そっと右手を潜りこませた。
「あはっ……あ、あン……んく……んんん……ッ」
　すでに潤んでいるクレヴァスをこすり、フードに守られたままのクリトリスを揉みつぶすような愛撫に、由奈はたやすく快楽の喘ぎをあげてしまう。
　大量に分泌された愛液は遼の右手を濡らし、ぽたぽたと雫になって床に落ちる。
　しかし、由奈は千鶴から視線を外さない。
　千鶴は一瞬、そんな由奈に、恐怖に似た感情を覚えた。
　しかし、そんな思いも、圧倒的な苦痛と、凄まじい恥辱の予感に、すぐに霞んでしまう。
「あ、あ、あ、あ……」
　自らの限界が近いことをさとり、千鶴は、口を半ば開けて、宙の一転を凝視する。
「そろそろだぞ」
　背後からその体を弄びながら、由奈の可愛らしい耳たぶに、遼が囁く。
　そして――
「あああああああああああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁーッ！」
　絶望に満ちた高い悲鳴に、驚くほど大きな、湿った破裂音が重なった。
「いや！　いやあ！　いや！　いや！　いやよ！　いやあああああア！」
　血を吐くような叫びをあげながら、千鶴は、大量の汚濁を排泄し続けた。
　千鶴の、しなやかで美しいとさえ言える体の中にあったとは信じられないような褐色の汚物が、床に置かれたバケツを満たしていく。
「ああ、ああぁああああ……ア……いああ……あァ……」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

　あまりにも長く続く、どんな拷問よりも辛い時間に、千鶴は、もはや叫ぶ気力すら失ってしまったようだった。
　ひっく、ひっくという、千鶴のしゃくりあげる声が、妙に幼く、頼りなく響く。
「んくっ……！」
　遼の腕の中で、由奈が、その小さな体をぴくぴくと痙攣させた。どうやら、この異様な状況の中で、軽く達してしまったらしい。
「は……あ……あ……」
　恥じ入るようにうつむきながら、由奈が呼吸を整える。
「……片付けてやれ」
　やや落ちついた様子の由奈に、遼が再び命令した。
「はい……」
　従順にそう返事をして、由奈が、千鶴の粗相の後始末を始める。
　しかし、千鶴はそのことに気付いていない様子だ。
「……」
　遼は、その顔に酷薄な笑みを浮かべ、しくしくと嗚咽を漏らすだけの千鶴に近付いた。
　そして、その前髪を、乱暴につかんで顔を上げさせる。
「あ……」
　涙に濡れた千鶴の瞳が、次第に焦点を合わせる。
「い、やぁ……もう、ゆるして……」
　目の前に遼の顔を認め、千鶴は力なくそう言った。
　そのスレンダーな体は恐怖と悪寒に細かく震え、歯はかたかたと鳴っている。
「下を脱いでおいて正解だったろう？」
　怯える子供のような千鶴の目を覗きこみながら、遼が言う。
　千鶴は、この目の前の男に対する圧倒的な恐怖に、しばし、嫉妬や嫌悪の情すら、忘れてしまっていた。

　千鶴は、遼の尋問に、ひどくあっけなく答えた。
　遼の質問は、由奈を脅迫するのに用いたビデオに関することに集中した。
　ビデオの内容やパッケージの状態、そして、入手経路などについて、である。
「わかんない……あれは、おにいちゃんのだから……」
　その形のいい脚をＭの字に開いた状態で吊るされたまま、千鶴が普段の彼女からは考えられないような、力ない声で答える。
「お前の兄貴の名前は？」
「橘……一郎……」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「職業は？」
「六中で、先生してる……」
「ああ、第六中学校か」
　遼は、しばし考え込んだ。
「円の通ってた学校だな……どこからどこまでが偶然なんだか」
　そして、小さくそう呟く。
　遼の尋問が終わったと見て、千鶴は、ゆっくりと顔を上げた。
「もう、いいでしょ……早く、家に帰して……」
　半ばかすれた声でそう言う千鶴に、遼はくつくつと笑い出した。
「そういうわけにはいかないだろ」
「な……なんで……？」
「このまま警察にでも駆け込まれたら、こっちはお終いだ」
「まさか……」
　千鶴の顔から、さあっと血の気が引く。
「まさか、殺すの？」
「ずいぶんと物騒なこと言うんだな」
　遼は、千鶴の頬を両手でふわりと挟んだ。
「俺は殺し屋じゃない。調教師だ。お前を、きちんと一人前の奴隷に躾てやるよ」
　そう言う遼の声音は、どことなく楽しそうだった。

「ああ……ンああ……あぅ……ンああぁああ……」
　千鶴は、四つん這いの格好で、どす黒い快楽に喘いでいた。

　この館の地下に監禁されてから、どれだけの時間が経ったのか、千鶴には判然としない。
　一日や二日ということはないだろう。三日ということもなさそうだ。一週間前後かと思われるが、それ以上、正確なことは分からない。
　最初の日、千鶴は、自宅宛ての手紙を書かされた。
　自分を見つめ直すため、しばらく家出するが、必ず戻るので心配しないでほしい、という内容の手紙だ。
　家出は、もともと奔放な性格の千鶴が、いかにもやりそうなことだった。しかも、学校は夏休みになったばかり。両親が、世間体を慮って警察に届けすらしないということも、充分考えられた。
　それに、もし警察に知らせたとしても、大した捜査はなされないだろう。
　千鶴は、遼という男が、巧妙に自分の逃げ道を閉ざしていくのを、茫然と眺めているし

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

かなかった。
　そして、遼は千鶴に対する調教を開始した。
　鞭も浣腸も、遼は滅多に使わなかった。ただ、千鶴が反抗的な態度を取らないよう、脅しに使う程度だ。
　遼は、千鶴のアンダーヘアを綺麗に剃毛した後、そのアヌスを徹底的に開発した。
　ローションをたっぷりと塗った指で、肉の門を揉みほぐされるのを初めとして、アナル専用のローターや、真珠のネックレスのような外観のアナルビーズによって、執拗に肛門の快楽を教え込む。
　千鶴は、アヌスが単なる排泄口ではなく、ヴァギナに劣らぬ快楽器官であるということを、強制的に思い知らされた。
　無論、勝気な彼女にとって、恥毛を全て剃り落とされた上、排泄器官を嬲りものにされるのは、この上もない屈辱だった。何度、舌を噛んで死のうと思ったか分からなかったが、調教の合間に噛まされるギャグボールによって、それすらも許されなかった。
　そして昨日、千鶴は、遼によって、アヌスで初めての絶頂に追い込まれた。
「ああッ！　いや！　ちづる、ちづる、おしりでイク！　おしりでイっちゃうよーッ！」
　遼に寄り添う由奈の目の前で、千鶴はおぞましい快楽に屈服し、失禁すらしてしまった。
　その夜、千鶴は、泣き疲れて眠ってしまうまで、幼女のように泣き続けたのだった。
　そして――

「ああ……ンああ……あぅ……ンあぁぁああ……」
　千鶴は、四つん這いの格好で、どす黒い快楽に喘いでいた。
　両方の手首は、長さ五十センチほどの金属棒の両端にある枷で戒められている。両方の足首も同様である。スプレッダーバーと呼ばれる拘束具だ。
　大袈裟な拘束ではないが、千鶴の動きは大きく制限されている。
　千鶴は、脚を閉ざすこともかなわず、コンクリートの床に両手と両膝をつき、アヌスに挿入されたバイブが繰り出す淫猥な刺激にさらされていた。
　アナルバイブとしてはかなり太い方のそれが、千鶴の直腸の中にすっぽりと収まっている。千鶴のアヌスは、それによって痛々しいくらいに引き伸ばされていた。
　遼は、そのバイブを巧みに操り、千鶴の快楽をコントロールしている。
　由奈は、そんな遼の様子を、少し離れた場所で、いわゆる体操座りでじっと見つめていた。千鶴も由奈も全裸である。
　ただ、遼だけが、いつものように、やや大きめの黒いシャツをまとっている。
「ひあ、あああ……あッ、あッ、あッ、あッ！」
　押し寄せる官能の波に、千鶴は声のトーンを高めていった。
　剃毛され、まるで童女のそれのような外見になったクレヴァスからは、とろとろと愛液がこぼれている。それは太腿を伝い、膝の間にちょっとした水溜りを作っていた。

Veon PDF Driver Trial
www.veon.com

「ダメ！　ダメえ！　ちづる、ちづる、もうッ……！」
　アヌスへの刺激による絶頂の予感に、千鶴の健康的な小麦色の体が、ぷるぷると細かく震え出す。
　それを確認し、遼は、意地悪くバイブを引き抜いてしまった。
「ひああぁぁぁ……っ」
　アブノーマルな愛撫を中断され、イキそこねた千鶴が、気の抜けた悲鳴をあげる。
「おねがい……もう……もう、イかせてぇ……」
　すでに、このような生殺しを、一時間以上味わわされてる千鶴が、ひどく情け無い声をあげる。
「そんなにイキたいのか？」
「イキたい……イキたいですぅ……」
　涙をこぼしながら言う千鶴の前に、遼は片膝をついいた。
「ならば、奴隷になるか？」
「……」
　千鶴が、唇を噛んで、遼の顔から目を反らす。
　恥辱にまみれ、快楽に悶えながらも、千鶴はけして自ら奴隷になるとは言わなかった。
　しかし、千鶴が堕ちるのもそう遠くはない。遼は、そんなことを確信しながら、立ちあがって、テーブルの上に置いていた新聞を、千鶴の目の前に投げてよこした。
「……？」
　千鶴が、不思議そうな顔で、新聞と遼の顔を交互に見る。突然現れた、あまりにも日常的な存在に、どうやらとまどっているらしい。
「読め」
　遼にそう言われて、千鶴は、新聞に目を通す。
　しばらくして、その顔が凍りついた。
「う、うそ……」
　唇を震わせながら、千鶴がつぶやく。
「橘一郎……お前の兄貴だろう」
　遼が、静かな声で言った。
　“現役教師、麻薬取引で逮捕”――そんな見出しが、千鶴の視線の先でおどっている。
「麻薬を売るだけじゃなく、ヤク中にした女を使って売春もしてたらしいな」
　遼は、そう、新聞記事を補足した。その言葉が届いているのかいないのか、千鶴はじっと動かない。
「街は、ちょっとした騒ぎだ。お前の家にも、かなりマスコミが押しかけてるらしい。……同情するぜ」
　遼が、あまり感情のこもらない声で言った。
「……いや……いや……いや……いや……」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

　千鶴は、そんな言葉を繰り返している。その体が、瘧のようにがたがたと震えていた。
「いやああああああああああああああああああああああああああああああああ！」
　千鶴は、ぺたんと座りこみ、両手を床についた姿勢で、絶叫した。
「千鶴ちゃん！」
　いつのまにか千鶴の傍に歩み寄っていた由奈が、耐えきれなくなったように言った。
「セン、パイ……？」
　狂気の兆候をうかがわせる空ろな目を、千鶴は由奈に向けた。
「千鶴ちゃん……」
　そう呼びかけながら、由奈は、千鶴の目の前で両膝をついた。
　そして、表情を失ってしまった千鶴の顔を、そっと、自分の胸に押しつける。
「ンあ……」
　柔らかな由奈の双乳に顔をうずめ、千鶴は、少し安心したような声をあげた。
「……千鶴ちゃん……まだ、あたしのこと、好き？」
　訊かれて、千鶴は、幼い子供のような素直さで、こっくりと肯いた。
「すき……ちづる、センパイが、すき……っ」
「ずっと、一緒にいたい？」
　さらに訊かれ、千鶴は再び由奈の胸の谷間で肯く。
「じゃあ……一緒に、ご主人様の奴隷になろうね」
　そう言われ、千鶴は、不思議そうな表情で、由奈の顔を見上げた。
「どれい……」
「そうよ。そうすれば、いつでも一緒にいられる……。もう、千鶴ちゃん、帰るところ無いんでしょ？」
　由奈の言葉に、千鶴は、その吊り気味の目から涙を溢れさせた。
「うああぁぁぁ……っ」
　千鶴は、声をあげて泣いた。
「なり、ます……ひっく……ち、ちづる、どれいに、なります……」
　泣き声の合間に、そう、何度も繰り返す。
　そんな千鶴と、申し訳なさそうな顔で自分を見る由奈を、遼は、苦笑しながら眺めていた。

　遼は、千鶴がようやく落ちつくと、その拘束を解き、ベッドに上げた。
　千鶴は、なんとなく不思議そうな顔で、遼にされるがままになる。
　そんな千鶴を再び犬の姿勢にして、すでにいきりたったペニスを、そのアヌスにあてがう。
「あぅ……」
　初めて感じる、拡張棒やバイブとは全く異なる、熱を帯びた亀頭の感触に、千鶴は声を

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

あげていた。
「入れるぞ」
　遼が、そう宣言する。
「はい……いれて、ください……」
　千鶴が、背後の遼に流し目を送りながら、肛姦をねだる。
　その顔には、かつての凛とした鋭さは無く、代わって主人に服従する悦びを覚え始めた奴隷の媚びがあった。
　遼が、ゆっくりと腰を進ませる。
　すでに潤滑液に濡れた千鶴の直腸は、きつく締め付けながらも、遼のペニスを飲みこんでいった。
「ふ、あああああぁぁぁ……」
　ぬぬぬぬぬっ、と体を押し広げられるような感触に、千鶴は伸びをする猫のような姿勢になって、声を上げる。
　ペニスを根元まで肉の穴に収めた後、遼は、傍らの由奈に目で合図をした。
　こっくりと肯いて、由奈もベッドのマットレスに上がる。
「千鶴ちゃん……」
　優しい声でそう囁きながら、由奈は、四つん這いの千鶴の前に正座し、その頭を抱き締めた。
「うぅ〜ン……」
　甘え声を上げながら、千鶴が、由奈の胸に顔をうずめる。そして、その大きな乳房の頂点の、ピンク色の可愛らしい乳首を口に含んだ。
「あン……」
　ちゅうちゅうと無心な顔で乳首を吸う千鶴の髪を撫でながら、由奈も小さく喘ぎ声を漏らす。
　ゆっくりと、遼が抽送を始めた。
「ン……ンンン……んぐっ……んう〜ッ……」
　敏感な直腸粘膜を逞しい雁首にえぐられる感覚に、千鶴が由奈の胸の谷間でくぐもった声をあげる。
　遼は、千鶴の形のいいヒップを両手で押さえながら、次第に腰の動きを速めていった。
　それに合わせて、千鶴のアヌスがめくれ上がり、再び体内に押し込まれる。
「んッ！　んぶぶッ！　ンあ、あ、あはッ！」
　体に力が入らなくなったのか、千鶴はがっくりと両肘を折った。
「あいッ！　あア！　ひ！　ひゃう！　ンあああああッ！」
　目の前の由奈に土下座をして許しを請うような格好で、千鶴は快楽の声をあげ続ける。
「千鶴ちゃん……」
　頬を上気させ、大きな瞳を潤ませながら、由奈は正座の姿勢のまま、膝を開いた。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

　ほとんど無毛に近い、幼げな恥丘の下のクレヴァスが、愛液でねっとりと潤んでいるのが見て取れる。
「おしゃぶりして、千鶴ちゃん……」
　はぁはぁと息を荒くしながら、由奈が言った。
「ハ、ハイ……センパイ……」
　そう返事をして、千鶴はわずかに上体を持ち上げ、由奈の股間に顔を寄せる。
　ぢゅううっ、と湿った音を立てながら、千鶴は、由奈の靡肉を吸い上げた。
「きゃうううっ！」
　びくン、と由奈の体が震える。
　千鶴は、アヌスを犯される快感に、きりっとした眉を切なげにたわめながら、由奈のそこを舐めしゃぶった。
　由奈の腰にすがりつくように細い両腕を絡め、精いっぱい舌を伸ばして、熱い蜜を溢れさせる肉の割れ目をえぐる。
「あはア……ちづるちゃん……ソレ、きもちイイ……はううン……」
　由奈は、思わず千鶴の頭を自らの股間に押しつける。
「ンンう〜ン！」
　千鶴は、苦しげでありながら、どこか甘えるような声をあげた。
　遼が、ペニスの出し入れをさらに激しくする。
　ぐぷっ、ぐぷっ、ぐぷっ、ぐぷっ、という、無残なまでに淫猥な音をたてながら、遼の肉棒が千鶴のアヌスをえぐった。
　千鶴は、次々と体の奥底から押し寄せる快感に突き動かされるように、舌を蠢かせ、唇で由奈のその部分を吸引する。
「あ、あ、あ、あああッ！」
　由奈がびくびくと体を震わせる。
　遼は、そんな由奈の体を、千鶴のヒップから離した右手で支えてやった。そのまま、自分の方へ引き寄せる。
「うン……んムム……ンふ……んん〜ン……」
　その手に導かれるまま、由奈は遼と唇を重ね、情熱的に舌を舌に絡めた。
　ぷちゅぷちゅという、体液にまみれながら粘膜同士がこすれ合う淫らな音が、地下室に響き続ける。
「ン！　んんン！　んんンーッ！」
　とうとう、千鶴は、遼と由奈に挟まれた状態のまま、切羽詰った声をあげた。
「ンあァ……千鶴ちゃん、もうすぐ、イっちゃうのね……」
　千鶴の痙攣が感染ったかのように、由奈もその体をぷるぷると震わせる。
　遼は、薄い笑みをその唇に浮かべながら、残酷な動きで最後のスパートをかけた。
「んぐッ！　ンああ！　あう！　あ、あああアアアッ！」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

何度も何度も絶頂にさらされ、千鶴の括約筋が、痛いほどに遼の剛直を締め上げる。
その締め付けに抗うように、遼は、ひときわ激しく千鶴のアヌスを突き上げた。
「も……もうダメ！　ちづる、ちづるもうダメえ〜っ！」
千鶴が、悲鳴のような声で訴える。
「千鶴ちゃん……ご主人様に、お願いするのよ……」
熱に浮かされたような口調で、由奈が千鶴に言う。
千鶴は、肩越しに遼の方を振り向いた。
「く、ください……ちづるのおしりに……ごしゅじんさまのザーメン、くださいッ！」
そして、高い声で奴隷のおねだりを叫ぶ。
「よく言えたわね、千鶴ちゃん……」
由奈は、その豊かな胸の中に、再び千鶴の体を抱き締めた。
そして、遼が、大量の精を、千鶴の体内に放つ。
「あああああああああああああああああああああああああああああああああアアアアアアッ！」
びゅるびゅると迸る熱い粘液の塊に、体の奥底を満たされ、千鶴はひときわ高い絶頂を迎えた。
ぴくぴくと、そのしなやかな体が可愛く震えている。
「す、すごい……あつい……おしりのなか……いっぱいになっちゃうよォ……」
千鶴は、どこか満たされたような表情で、うっとりとつぶやいた。
由奈を陵辱したときにも見せなかったような、安らかとさえ言えるような顔である。
（あたし……ほんとは……）
千鶴は、遼と由奈の体温を感じながら、ぼんやりと思った。
（ずっと……こんなふうに……されたかったの……かも……）
そして千鶴は、優しい闇の中に沈んでいった。

その夜、遼と由奈の寝室。
「あの……ご主人様、怒ってます？」
水玉模様のパジャマ姿の由奈は、上目遣いで遼の顔を見ながら、訊いた。
「何を怒るって？」
「だから、千鶴ちゃんのことです。あたし、勝手なことばかりして……」
そう言われて、遼は、ふっとかすかな笑みを口元に浮かべた。
「由奈は優しいからな」
「……違うんです」
「違う？」
「だって……ああでもしないと、ご主人様、ずっと千鶴ちゃんにかかりっきりになっちゃ

Xeon PDF Driver Trial
www.xeon.com.tw

うじゃないですか……」
「……」
　両脇で結んで垂らした髪の毛をいじりながら、由奈は続けた。
「あたし、そんなにいいコじゃないです……自分のことばっか考えてて……ずるいんです……」
「……」
　遼は、無言で由奈に近付き、そっとその小さな体を抱き寄せた。
「あ……ン」
　由奈が、媚びるような声をあげながら、遼の胸にその身を預ける。
「俺の方が、もっとずるいさ」
　そう、遼が由奈の耳元にささやく。
「由奈なら、きっと千鶴を堕とすのに役に立つと思っていた。それで、ずっと一緒にいさせた……。だから、お前は気にしなくていいんだ」
「ご主人様……」
　由奈は、潤んだ瞳で、遼の顔をじっと見つめた。
　と、何かに驚いたように、その大きな目をさらに見開く。
　遼の股間のモノが、熱を帯びながら、何枚かの布越しに由奈の下腹部を圧したのだ。
「ご褒美の分は、とっておいたぜ」
「もう、ご主人様ったら……」
　頬を赤く染めながら、由奈が、ぎゅっと遼に抱きつく。
「まだ、もう少し、やることが残ってるけどな……」
　遼は、由奈の体を抱き返しながら、そう囁いた。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

２－３

　愛美は、霧子の診療所で、解毒作用のある点滴を受けている。
　鎮静剤を打たれて眠っているその顔は、どこか悪い夢を見ているような様子だ。
「かなり危ない状態だったわ」
　愛美の様子を、傍らのパイプ椅子に腰掛けて心配そうに見つめる円に、腕組みをしながら霧子は言った。
「でも、峠は越したから、心配しないで。若いからすぐ回復するわ」
「うん……」
　そう返事しながらも、円は鎮静剤を打たれて眠っている愛美の顔から目を離さない。
「……もう、遅いけど、どうするの？」
「できれば、ずっとこのコの傍にいたいんですけど」
　いつになく神妙な口調で、円が言った。
「そうねえ……。確かに、この子が目を覚ましたとき、あたしだけだと、びっくりしちゃうかもしれないし……」
　そう言いながら、霧子は、その形のいい唇をかすかにほころばせた。
「いいわよ。でも、着替えとかはどうするの？」
「えへ……実は、持って来てあるんです」
　円は、初めてにっこりと微笑みながら、霧子の方を見る。
　そう言われて、霧子はさすがにちょっと呆れたような顔になった。
　と、その時、霧子の携帯電話が鳴った。着信ボタンを押して耳に当てた霧子の顔が、かすかに緊張する。
「……お仕事が、入っちゃったわ」
「往診？」
「まあね。組織同士の抗争だって。全く、お客とは言え、いいかげんにしてほしいわ」
　霧子は、まともな医者にかかれないような患者専門の無免許医である。犯罪者や不法就労の外国人などの他に、裏の組織の怪我人なども、得意先に含まれる。
「鍵はかけておくから、留守番お願いね。お風呂や台所は、好きに使っていいから」
「はーい」
　円はにっこりと笑って返事をした。

　閑静な住宅街の端にある霧子の診療所は、夜になるとひどく静かになる。
　月と星の明かりが照らす愛美の青白い顔を見ながら、円は、何か考えている様子だった。
　その顔には、これまで誰にも見せたことがないような、複雑な表情が浮かんでいる。
　いつもの、どこか壊れた感じの明るい顔からは考えられないような、影のある表情であ

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

る。
　診療所の寝巻きを着て、薄い毛布だけを羽織っている愛美の薄い胸が、規則正しく上下している。
「まるで、眠り姫みたい……」
　円は、かすかに囁いた。
　そして、目を閉じて、愛美の可憐な桜色の唇に、そっと唇を寄せる。
　しかし円は、唇が触れる寸前に、ゆっくりと顔を離した。そして、どこか寂しそうに微笑む。
「いけないな……。パパのこと、恨んじゃいそう……」
　さきほどよりももっと小さな声でそう言って、円は、椅子に座りなおした。

　いつのまにか、椅子に座ったまま眠っていた円は、朝の光の中、目を覚ました。
「ン……」
　太陽の光のまぶしさに、思わずその大きな目をしばし閉じる。
「……さん……」
　かすかな声が、円の耳に届いた。
「しずか、さん……？」
「えっ……？　あ、起きてたの？」
　ようやく明るさに目がなれた円は、ちょっとうろたえた声をあげてしまった。
　そんな円の顔を、愛美の、まだちょっと空ろな目が、ぼんやりと見ている。
「静さん……ですよね……。ここ、どこですか……？」
「心配しないで。あたしの知り合いのお医者さんよ」
　円は、架空の双子の姉になりきって、答えた。
「お医者……？」
「そう。えーっと、もう帰ってるかな……？」
　円がそう言ったとき、ちょうどよく、霧子が病室に現れた。どうやら、すでに帰宅後の一風呂を浴びたらしく、その長い黒髪がしっとりと濡れている。
「あ、お帰りなさい」
「ただいま、まど……じゃなくて、静ちゃん」
　まだ少し眠そうな様子の霧子が、危うく名前を呼び間違えそうになり、円は内心大いに慌てた。
　ちら、と愛美の様子を見る。しかし、彼女は特段気にしてはいない様子だ。
「じゃ、じゃあ、先生、あとはよろしく」
　円は、いつになく上ずった感じの声でそう言って、立ちあがった。霧子が、そんな円に

Xeon PDF Driver Trial
www.xeon.com.tw

肯きながら、先ほどの失敗を詫びるように目配せする。
　病室を出て、ドアを閉めた後、円は大きく息をはいた。
「ふーっ……霧子センセってば、あれだけ言っといたのにィ」
　事前の打ち合わせが足りなかったかな、などと思いながら、円はおでこの汗をぬぐった。
「汗かいちゃったよ……おフロ、借りちゃおうかな？」
　一人そう言いながら、円は、バスルームへと歩き出した。昨夜は、愛美の顔を見ているうちに眠ってしまったため、風呂を使えなかったのだ。

　霧子との知り合ってまだ二年ほどだが、この診療所へは毎月数回は通っている。風呂を借りたり、留守番したりするのも初めてではない。まさに、勝手知ったる他人の家だ。
　脱衣場には、霧子が無造作に脱ぎ捨てた衣服が、カゴに入っていた。見るとはなしに見ると、昨日霧子が着ていた白衣が、乾いた血でべっとりと汚れている。
「あー、修羅場だったんだァ」
　いつものペースを取り戻した円は、ちょっと考えて、自分の服は別のところに分けておいた。
　股間以外は、少女そのままの裸体となった円が、かなり大きなバスルームに入る。
「ここのおフロ、広いから好きだな♪」
　自宅のマンションのユニットバスを思い浮かべながらそう言い、円は、ぬるめのお湯が張られた湯船に入った。
　ほっ、と息をついた後、ぼんやりと天井を見上げる。
（愛美ちゃん……これから、どうするんだろう……）
　そう考えると、自然と、心臓の動悸が速くなる。
（ドキドキしてる……なんか、ふしぎ……）
　円は、自分の左の乳房の下を、そっと右手で押さえた。
　そのまま、とりとめのないことを考えながら、しばらくお湯につかる。
　と、突然、からからとバスルームの扉が開く音が響いた。
「きゃっ！」
　可愛らしい悲鳴をあげて、円はびくっと体を震わせる。
「あ、静さん、入ってたんですか……ごめんなさい……」
　そこには、長い髪をまとめてアップにした愛美が、立っていた。
「愛美ちゃん……」
　円は、思わず愛美の体を見つめてしまい、慌てて目をそらした。
「もう、体はいいの……？」
「はい。先生が、お風呂に入ってもだいじょぶだって……」
「ふーん。先生は？」
「ゆうべ、徹夜だったからって、寝ちゃいました。あの……お風呂、ご一緒していいです

Xeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

か？」
「あ……どうぞ」
　円の言葉に、愛美は軽く頭を下げた。

　円は、完全に風呂から出るタイミングを逸してしまった。
　二人並んで座っても、まだ少し余裕のあるバスタブに、愛美と円が入っている。
「静さん……」
　さっきからずっと風呂に入りっぱなしで、ややのぼせ気味の円に、愛美が声をかけた。
「え、あ、なに？」
　ややぎこちない微笑みを浮かべながら、円が返事をする。
「静さんって、けっこう胸あるんですね」
「そんな……」
　円は、火照った顔をさらに赤くした。
　その言葉通り、全体に肉付きの薄い感じの愛美より、円の方が、体の線はまるく、柔らかい。
「静さん、顔真っ赤ですよ……。可愛い」
　ふふっ、と愛美が淡く微笑む。
　円は、答えることができなかった。
　さらに悪いことに、触れるか触れないかの距離に、愛美の華奢な肢体があることを意識すると、タオルで隠したその部分に、熱く血液が集まってしまう。
　しばらく、沈黙が続いた。
「静さん……」
「な、なに？」
「どこまで、知ってるんですか？」
「どこまでって……」
　愛美の問いに、円はうろたえていた。
　あの兄や姉ですら時に翻弄して見せた円が、この大人しい同い年の少女に、完全にペースを乱されてしまっている。
　もはや円は完全にのぼせてしまっており、頭の中で、熱い血液がぐるぐると巡る音が聞こえそうだ。
「あの……」
　と、愛美が、意を決したように、言った。
「円くん、なんでしょ」
「！」
　円が、ざばっ、と音をたてて、思わず体ごと向き直る。
　円の褐色の瞳と、愛美の黒い瞳が、正面から向き合った。

Neon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「愛美ちゃん……」
「円くん……でしょ？　正直に言って……。愛美、もう、騙されるのはヤなの……」
　そう言われて、円は、一つ息をついた後、ゆっくりと立ちあがった。
　そして、その部分を隠していたタオルを、外す。
　丸みを帯びた腰には似合わない、立派すぎるほど立派な半ば勃起したペニスが、そこにあった。
　さすがに、愛美が目を見開く。
「これが、ボクだよ……愛美ちゃん」
　声の調子を元に戻して、円は言った。戻したといっても、声変わりしていないその声は中性的で、男のコとも女のコとも判別がつきがたい。
「円くん……」
　そう言いながら、愛美が円の顔を見つめる。円は、いつになく辛そうな表情で、目を閉じていた。
　と、がまんできなくなった様に、ぺたん、とバスタブの縁に腰掛けてしまう。
「あは……立ちくらみしちゃった」
　そう言って、円は照れたように笑った。
　つられたように、愛美もくすくすと笑い出す。
　そして愛美は、円の脚の間へと、体を動かしていった。
「あ……」
　閉じようとする円の膝を、その小さな両手で持って、そっと開く。
「愛美ちゃん……」
「円くんが、助けてくれたんでしょ？」
　上目遣いで円の顔を見ながら、愛美は言った。その瞳が、濡れて光っている。
「ちょっとだけど、憶えてるの……」
　そう囁きながら、円のペニスに視線を下ろす。
「ごめんなさい、円くん……愛美、すごくいやらしいの……こんなふうにしか、お礼できないの……」
　愛美は、その可憐な桜色の唇を円のペニスに寄せ、ちゅっ、とキスをした。
「あ……っ」
　円が、声をあげる。
　それだけの刺激で、細身ながら充分な長さを誇る円のペニスは、きりきりと急角度で立ち上がってしまっていた。
「あはっ……すごい……」
　どこかうっとりしたような口調でそう言って、愛美は、ちろりとシャフトの表面を舐め上げた。
「ああ……あたし、イヤらしい……ごめんなさい……」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

そして、心底恥ずかしそうにそう言いながら、円のペニスの根元に両手を添え、ちろちろと舌を這わせ始める。
「んン……」
円は、ピンク色の舌を一杯に伸ばしてフェラチオをする愛美の顔を見つめながら、小さく喘いだ。
年相応にあどけない顔で、反り返った竿に舌を絡めるその様子に、ぞくぞくと背筋が震える。
愛美は、円のペニスを一通りしゃぶった後、ぱっくりとその小さな口に咥え込んだ。
熱い血液ではちきれそうになっているペニスには、柔らかな口腔の中が、奇妙に生温かく感じられる。
愛美は、その幼い容姿からは考えられないような大胆さで、口の中の牡器官を刺激し始めた。
ゆるゆると頭を動かし、静脈の浮いたシャフトを唇でしごきながら、舌で亀頭を舐めまわす。
かと思うと、舌先で裏筋や雁首、先端の鈴口の部分を、優しくえぐったりするのだ。
愛美の動きに合わせて、たぷん、たぷん、と、湯船のお湯が波打つ音が響く。
円は、バスタブの縁に両手を突っ張り、心持ち腰を突き出すような姿勢で、愛美のフェラチオにその身を任せた。
ちゅうっ、ちゅうっ、と、愛美が情熱的に円のペニスを、口腔にたまった唾液ごと吸い上げる。
「ああ……ッ」
ひりつくような性感に、円は切なげな声をあげた。
その声が聞こえたのか、愛美は、嬉しそうに目だけで微笑み、ますます熱を入れてフェラチオに没頭する。
「あ……愛美ちゃん……そんなにしたら……もう……ッ！」
円の若いペニスは、とうとう、限界を迎えた。
「ダメ……ボク、もう、出ちゃうよ……ッ！」
「出して、円くん……愛美のお口に、ザーメンいっぱいだしてェ！」
おとなしい愛美が言ったとは信じられないような卑猥な言葉を聞き、円はとうとう己の欲望を弾けさせてしまった。
「あああああーッ！」
高い、少女のような悲鳴をあげて、再びペニスを咥え込んだ愛美の口内に射精する。
精液が勢いよく喉奥を叩く感触に、辛そうに眉をたわめながらも、愛美は、さらに深く円のペニスを咥えていく。
「あッ……ああッ……ンあ……あぅ……」
びくン、びくン、とそのしなやかな体を何度も震わせながら、円は大量の精を愛美の小

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

さな口の中に放ってしまった。
　愛美は、こくん、こくんと小さく音をたてながら、口内にたまった青臭い粘液を美味しそうに飲み干していく。
「ひゃううッ！」
　ちゅるるん、と輸精管の中に残った精液まで吸い取られ、円は思わず悲鳴をあげてしまった。
　愛美が、ようやくペニスから口を離し、ふーっ、と息をつく。その顔が上気しているのは、けして、湯につかっていたためだけではなさそうだ。
「愛美ちゃん……」
　憑き物が落ちたように、恥ずかしそうにうつむいている愛美の肩に、円はそっと手を添えた。
　そして、優しく立ちあがらせる。
「ごめんなさい……あたしの顔、見ないで……」
　顔を背けるようにして、愛美が言う。
「どうして？」
「だって……きっと、すごいエッチな顔してる……」
　そう言われて、円はにっこりと微笑んだ。そして、優しく愛美の顔を自分の方に向ける。
「や……」
「だいじょうぶ……ボクの方が、もっとエッチだよ……」
「？」
　不思議そうな顔をする愛美の唇に、円はそっと唇を重ねた。
「んんっ！」
　愛美は、驚いた声をあげて、体を離し、両手で口を覆った。
「ダメ……あ、あたし、したばかりだから……」
「ボクの味がする」
　くすっ、と円は笑って、愛美の両方の手首を、それぞれ握った。
「きれいにしてあげる……」
　そう言って、口元を隠す手をやや強引に外して、再び口付けする。
「あむ……」
　円は、宣言通り、愛美の口の中の自らの残滓を舐め取るように、舌を這わせた。
「ん……ん……んうン……」
　次第に、愛美の細い体から力が抜けてゆく。
　いつしか、まだ十五歳になったばかりの少年と少女は、互いの体をしっかりと抱き締めていた。濡れた肌がぴったりと重なる。
　ちゅば、と音をたてて、二人はようやくキスを中断した。
　円と愛美の胸の膨らみが、互いに互いの形を、エロチックに歪めている。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

円は、ひどく真剣な表情で、愛美の黒い瞳をじっと見つめた。
「愛美ちゃん……」
円が、囁くような声で愛美に言う。
「やじゃない？　ボクみたいなの……ヘンでしょ？」
円の口調は、いつになく臆病な感じだ。
「ヘンじゃないよ。すごく、きれいだと思う……」
愛美が、ひどく素直な調子でそう言う。
「きれい？」
「うん」
愛美は、邪気のない顔で肯き、続けた。
「ホントは、いろいろ聞きたいこととかあるけど……それは、あとでもいいの……」
「……」
「ごめんなさい……愛美、お礼のつもりだったのに……してほしくなっちゃった」
そう言って、愛美は、恥ずかしそうに円の胸にその顔をうずめた。
「愛美ちゃん……」
「もう、男のヒトはイヤなんだけど……円くんは別……。愛美、円くんに、イヤらしいこと、してほしいの……」
消え入りたげな声で、それでも淫らなおねだりをする同い年の少女に、円はこっくりと肯いた。

円は、愛美の小さな体を、バスマットの上に横たえた。
「恥ずかしい……」
柔らかそうな頬を赤く染めながら、愛美が顔を横に向ける。
円は、そんな愛美の頬に、ちゅっと軽く口付けして、そのまま、唇を首筋に這わせた。
「ひゃうン……」
くすぐったそうに、愛美が体を縮めた。
円は、そんな愛美の体を優しく抱き締めながら、うなじから鎖骨のくぼみ、そして胸の膨らみへと、唇と舌をゆっくりと這わせていく。
まだ発達途上の乳房を、そっと手で包む。それは、円の小さな手の中に収まってしまうくらいの大きさだった。
やや固い感触の乳房をゆるゆると揉みながら、その頂点の桜色の乳首を、ぺろぺろと舐めまわす。
「ふア……」
初めて経験するような繊細で優しい愛撫に、愛美はうっとりと声をあげた。
「気持ちいい？」
ちゅぽん、ちゅぽんと乳首をついばむように吸う合間に、円が訊く。

Xeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「ご、ごめんなさい……きもち、イイの……」
「あやまることなんてないよ」
　ふっと微笑みながら、円は言った。
「愛美ちゃんに感じてもらって、ボク、すごく嬉しい……」
　そう言いながら、円は愛美に覆い被さるように重なった。
　そして、自身の乳首を、愛美の乳首に触れ合わせ、くりくりとこすりあわせる。
「あッ……」
　想像もしなかったような刺激に、愛美は小さく声をあげていた。
「ふふふっ……」
　悪戯っぽく微笑みながら、円は、次第に尖っていく自らの乳首で、愛美の乳首を責め続ける。愛美のそこも、円の唾液に濡れながら、すでに硬く尖っていた。
「あ、あン……んく……ふぅン……」
　円の細い腕の中で、愛美が、もどかしそうに喘ぎながら、より強い刺激を求めるかのように、胸を反り返らせる。
　円は、ひとしきり乳頭による相互愛撫を楽しんだ後、再び愛美の乳房を両手に包んだ。
　そして、左右の乳首を、それぞれ同時に指でしごくようにする。
「ひゃうううう……ッ！」
　まるで体に電流が走ったみたいに、愛美がびくびくと体を震わせる。
「あ……あッ……あう……はあア……ッ」
　円は、切なそうに眉を寄せながら喘ぐ愛美の白い脚の間に、そっと体を割りこませた。
　そして、両手を胸から脇、腰へと動かしながら、愛美のすべすべのお腹や腰にキスを繰り返す。
　ぷっくりとした無毛の恥丘に円の唇が到達したとき、愛美ははっと顔を上げた。
「だ、だめ、そんなトコ……」
　慌てたように、愛美が言う。
　しかし円は、そんな愛美の言葉を無視して、さらに顔を下にずらした。
「あア……恥ずかしい……」
　愛美が、両手で顔を覆う。
　愛美のその部分は、すでに淫猥にめくれ上がり、とろとろと大量の愛液を溢れさせていた。
「すっごく濡れてる……」
「ご、ごめんなさい、ごめんなさい……っ」
　円の指摘に、愛美はつい、あやまってしまう。
「もっともっと濡らしてあげる」
　そう言いながら、円は、熱い蜜を湛えた肉の花弁に、唇を押しつけた。
「ひああッ！」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

敏感な粘膜を吸引され、愛美は思わず悲鳴をあげてしまう。
構わず、円は愛美のクレヴァスを舌でえぐり、口の中で小陰唇を甘噛みした。
「あ、ンあああ……きゃうっ……は、あ、あア〜ッ……」
鋭い快感に翻弄されるように、愛美の小さな体がバスマットの上でのたうつ。
円は、ひくひくと震える恥丘の下方に手を添え、そのままクリトリスを保護する包皮を、そっとめくり上げた。
つるんとした小さな肉色の真珠が、恥ずかしそうに顔を出す。
円は、そっとその部分を唇で挟んだ。
「ひあああああーッ！」
それだけで、愛美は高い声をあげた。
円は、刺激しすぎて痛くしないように注意しながら、唇と舌で、そろそろとその敏感な肉の突起を愛撫する。
「きゃあッ！　あッ！　あうッ！　ひ、ひあああああアッ！」
愛美は、自分でも意識しないうちに、円の頭を自分の股間に押しつけていた。
迫り来る絶頂の予感に、その細い腰ががくがくと震える。
「あああああああああああああああああああああああアアアアアアアアアアアアーっ！」
ひときわ高い声をあげて、愛美が腰を跳ね上げる。
まるで見えない手に弄ばれるように、愛美の幼い腰は空中で踊り、アクメを貪った。
「あ……ア……アあアア……ァ……」
そして、糸の切れた人形のように、その華奢な体がぐったりと弛緩する。
円は、しぶいた愛液で濡れた口元をぬぐいながら、顔をずらして、愛美の顔を覗きこんだ。
「イっちゃった？」
「ご……ごめん、なさい……イっちゃった……」
はァはァという荒い息の合間に、ようやく愛美が答える。
「あやまることないってば」
「でも……あたしだけ……」
申し訳なさそうに言う愛美に、円がにっこりと微笑みかける。あどけない少女そのままの、無邪気な笑顔だ。
「じゃ、今度はいっしょに気持ちよくなろうね」
「で、でも……」
「なに？」
「ごめんなさい……あたし、はじめてじゃないし……」
「ボクだってそうだよ」
微笑みながらそう言って、円は、愛美の脚の間に腰を進ませる。
「あ……」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

すでに力を取り戻しているペニスを、絶頂を迎えたばかりで敏感になっている箇所に押し当てられ、愛美は小さく声を上げた。
一方、ぷにゅぷにゅと柔らかなその部分は、貪欲に円のペニスにまとわりついてく。
「んふっ……愛美ちゃんのココ……ボクのに絡みついてる……」
「ああ……あたし、イヤらしい……」
愛美は、目に涙をにじませながら、言う。
「泣かないで、愛美ちゃん……ボク、エッチな愛美ちゃんが好きなんだから……」
「――ホント？」
童女のような表情で、愛美が聞き返す。
「ホントだよ、愛美ちゃん……好き……」
そう、愛美の耳元で囁きながら、円はゆっくりと腰を進ませた。
「あああああア……ッ！」
鋭い角度で上を向いたペニスに膣壁をこすられる快感に、愛美が歓喜の声をあげる。
「あぁ……愛美ちゃんのアソコ、ボクのをどんどん吸いこんでく……」
円の言葉通り、愛美の膣内粘膜は、ざわざわと蠕動しながら、熱い牡器官を奥へ奥へと引きこんでいった。
その動きに導かれるように、円のペニスの先端が、一番奥まで届く。
「あは……っ」
二人は、ほぼ同時に甘い声をあげた。
官能でとろけそうになっている幼い顔が、ごく自然に互いを求め、口付けを交わす。
愛美の舌を舌で絡めとりながら、円は、ゆっくりと抽送を始めた。
「んン〜っ」
互いの粘膜の摩擦によって生じる熱と快美感に、愛美は、くぐもった声を漏らした。
ずちゅっ、ずちゅっ、ずちゅっ、ずちゅっ、と湿った音をたてながら、円のペニスが愛美の幼い膣口を出入りする。
その度に、愛美はふンふンと媚びるような鼻声を漏らし、円の背中に回した手に力を込めた。
円は、こみあげる快感にたまらなくなったように唇を離し、そのままちろちろと愛美の顔を舐め上げる。
「ああ〜ン、く、くすぐったい……」
しかし、そのくすぐったさも、すぐに性感に変わっているのだろう。愛美の声は、ひどく甘たるい。
円は、そんな愛美の耳たぶや首筋に舌を這わせながら、夢中になって腰を使う。
円の股間のものが愛美の体内に隠れているため、二人の交わりは、どうかすると、レズビアンの少女同士が淫らに戯れているようにも見えた。
「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ……」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

しばらくして、円は、こみあげる射精感をやり過ごすように、腰の動きを緩めた。
そして、その丸いお尻を回すようにして、愛美の柔らかな蜜壷をこね回す。
「はうう……っ！」
今まで刺激されていなかった部分を刺激され、愛美は甘い悲鳴をあげた。
どうやら、円のペニスは、愛美の弱いところを捕らえることに成功したらしい。腰を小刻みに動かし、亀頭でその部分をこすりあげると、愛美の膣壁がぴくぴくと反応する。
「ここがいいの？」
頬を上気させながら訊く円に、愛美は恥ずかしそうに肯いた。
「じゃあ、もっとしてあげる……っ」
そう言って、円は両手で愛美の丸い肩を持ち、さらに腰の動きを速くした。
「あ、あいいッ！　ンはあアッ！」
愛美の小さな体が、円の体の下で弓なりにそり返る。
その幼い肢体で受けとめるには強すぎる性感に、愛美はイヤイヤをしながら、体をよじった。
そんな愛美を逃すまいとするように、円はしっかりと両手に力を込める。
「イ、イイ……イイの……すごくイイのぉ……か、感じちゃう……っ！」
そう叫ぶように言う愛美の靡肉は、ざわざわと蠕動しながらも、円のペニスを柔らかく締めつける。
円は、再び高まってくる射精感に突き動かされるように、さらに激しく腰を動かした。
円のシャフトと、愛美の膣口の隙間から、愛液がしぶくように溢れ出る。
「円くん……円くん……ッ」
愛美は、円の名前を呼びながら、その細い腰にいつのまにかしっかりと脚を絡みつかせていた。
「円くん……ごめんなさい……愛美、愛美もう……ッ」
愛美は、切羽詰った声で、絶頂が近いことを訴えた。
「おねがい……円くんもイって……愛美だけイクの、イヤぁ……」
その言葉だけでなく、幼い膣肉までが、円のシャフトに絡みつき、射精をおねだりする。
「まなみちゃん……ボ、ボク……イっちゃうよォ……」
「う、うれしい……まなみのなかで、いっぱい、いっぱいシャセイしてェ……ッ！」
「あああアアアッ！」
舌足らずな声で叫ばれる猥語を聞きながら、円は、熱くたぎる精液を同い年の少女の膣内に解放してしまった。
「あッ！　あうッ！　きゃうううッ！　イク、イっちゃうウーッ！」
時分の体の中で、ペニスが何度も何度もしゃくりあげ、大量のスペルマを迸らせる感触に、愛美は立て続けに絶頂に舞い上げられる。
「スゴい……こんなの、こんなのはじめて……あ、あああ、あああああァー……ッ！」

Neon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

愛美は、円の体をぎゅっと抱き締めながら、ぴくぴくと小刻みに痙攣した。
そんな愛美の細い腕の中で、円も絶頂に体を震わせている。
今まで感じたことの無いような、奇妙に安らかな官能の中で、愛美は、しばし意識を失ってしまった。
闇が、愛美を包みこむ。
しかしそれは、いつもの冷たい闇ではなく、懐かしいような温かさに満ちていた。

「ふぁ……」
意識を取り戻したとき、愛美は、脱衣場の中で、円の腕の中にいた。
円が、愛美を膝の上に乗せるようにして抱きながら、その体を丁寧に乾いたタオルでぬぐっている。
「あ……ごめんなさい……」
どうしてもまずあやまってしまう愛美に、円は優しく笑いかける。
顔を赤くしながら、愛美は立ちあがった。ちょっとよろけて、壁に手をついてしまう。
「だいじょうぶ？」
「う、うん……」
並んで立ちあがる円にそう返事をして、愛美は顔を上げた。
目の前に、男根を備えた少女が、無邪気と言ってもいいような表情で、そこに立っている。それは、どこか幻想的な風景だった。
「円くん……」
愛美は、円の肩に、そっと手を伸ばした。
肌に、指先が触れる。その体は、幻のように消えたりはしない。
胸に、様々な想いが込み上げてくる。ともすれば混乱しそうな頭で、愛美は、ようやく言うべき言葉を見つけ出した。
「円くん……好き……それから……ありがとう……」
いつもの控えめな口調でそう言う愛美に、円は、嬉しそうに肯きかけた。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

３－３

　暗闇の中で、小夜歌は目を覚ました。
　汗で不快にまとわりつく衣服に、石灰の匂い――
　目を開いてるはずなのに、何も見えない。何かの布で目隠しをされているのだ。
　体は、硬く砂っぽい場所に横たえられている。どうやら、体育倉庫か何かの中らしい。
　両手は頭の上に持ち上げられ、手首のところが、縄跳びの縄のようなもので戒められている。
「目が覚めたか……」
　国村の声が、近くから聞こえる。
「――放しなさいよ」
　小夜歌は、静かな口調で言った。うろたえたりわめいたりするのは、彼女の矜持が許さない。
「可愛くねえ女だなあ、お前」
　憎々しげに、国村が言う。
　いきなり、ぎゅっ、と服の上から、乱暴に乳房を掴まれ、小夜歌は危うく悲鳴を飲み込んだ。
「まずは泣かして、そのあとで、よがり狂わせてやるからな」
「く……」
　胸を無遠慮にまさぐられ、小夜歌は唇を噛んだ。
　視覚を封じられ、相手の動きが分からないという不安感が、かえって小夜歌の神経を過敏にさせる。
「馬鹿な真似はやめなさいよ……あたしは、泣き寝入りなんかしないわよ」
「それはどうかな」
　国村は、勝気な態度の小夜歌を嘲笑した。
「コトが終わったときには、自分から腰を振って俺を誘うようになるさ」
「あなた、自信過剰じゃない？」
　小夜歌は、ぱあン、といきなり頬をはたかれた。
「そういう薬があンだよ！」
　国村の声が、すぐ近くから聞こえる。その生温かい息が、首筋に感じられるほどだ。小夜歌は、おぞましさに体を震わせた。
「けど、最初は薬ヌキだ。血が出るくらいにヤってやるぜ」
　興奮に声を上ずらせながら、国村が言う。
　そして、国村は小夜歌のスカートに手をかけた。
　もし、スタンガンの後遺症がなかったら、闇雲にでも蹴り飛ばしているところだったが、

Neon PDF Driver Trial
www.neon.com.tw

それすらもできない。脚が、鉛のように重く感じられる。
「……？」
　スカートをめくり上げ、国村は少し驚いた様子だった。
（お兄ちゃん……っ！）
　小夜歌は、心の中で悲痛な声をあげながら、目隠しの中で屈辱に涙をにじませた。
「お前、こいつは……」
　と、その時、ごッ、という鈍い音が、下卑た笑みを含んだ国村の声を中断させた。
「……〜ッッッ！」
　声にならない声が、よどんだ空気を震わせる。
　がッ！　がッ！　というぞっとするような音が、それに続いた。
　ぴしゃしゃっ、と熱く粘ついた液が、小夜歌の顔にかかる。それは、ひどく生臭かった。
（……血？）
　そう小夜歌が思ったとき、彼女のすぐ傍らで、人が倒れた気配がした。
　目隠しに、誰かの指がかかる。
　その指は、ひどく丁寧に、小夜歌の視界を覆っていた布を外した。
「あ……」
　にじんでいた像に、次第に焦点が合っていく。
　大きなレンズのメガネをかけた、華奢な、少女じみた顔。その顔は真っ青で、点々と返り血がついている。
「大丈夫？　結城さん」
　そう、震える声で呼びかけてきたのは、健だった。
　小夜歌が肯くと、健は、手首を縛っている縄を解き始める。
　小夜歌の傍らでは、国村が、うつ伏せに倒れていた。暗くてよく分からないが、その後頭部が奇妙な感じで濡れ、コンクリートの床には、じわじわと黒っぽい染みが広がっている。すぐ近くには、やはり黒っぽく先端が濡れた重そうな鉄パイプが転がっていた。
「立てる？」
　そう言いながら、健は小夜歌に手を貸した。
「あ、ありがと……」
　ちょっとよろけながらも、小夜歌はどうにか自分の足で立ちあがった。
「……七瀬が、やったの？」
　健のことを名字で呼んで、小夜歌が訊く。
「うん」
「思い切ったことするわね」
　小夜歌が、意外そうな顔で、健のまだ強張ったままの顔を見つめた。
　健は、倒れたままの国村に、まるで汚物を見るような視線を向けている。かすかに背中が上下しているところを見ると、国村は気絶しているだけらしい

Xeon PDF Driver Trial
www.xeon.com.tw

「……行こう、か」
　国村から視線を外し、健が小夜歌に言った。
「そうね……」
「――おいおい、指紋くらいは拭いてくれよ」
　と、その時、体育倉庫の入口辺りで、声がした。
　強烈な太陽の光が逆光になっているため、その顔はよく分からなかったが、小夜歌には聞き覚えのある声だ。
「乾さん……でしたっけ？」
「ああ。どうやら間に合ったようだな。何よりだ」
　倉庫の中の暗がりでもサングラスを外さずに、乾は言う。
　その視線の先で、健がしゃがみこんで、丁寧に鉄パイプの指紋をぬぐった。錆と血で、ハンカチが赤茶色に汚れていく。
「……いつの間に、知り合いになったんです？」
「ついさっきさ。お前さんを探してるようなんで、一緒になって探してやっただけだよ。倉庫の鍵も開けてやったがな」
「で、一番危なくて汚い仕事は、七瀬にやらせたわけですか」
　小夜歌は、その切れ長の目をうろんげに細める。しかし、乾は平気な顔だ。
「ナイト役を取っちまうのは可哀想だろ」
「……」
　眉をひそめて沈黙する小夜歌に、作業を終えた健が再び並んだ。
　それを待っていたかのように、小夜歌が、乾の横をすりぬける。健は、その後を追いながら、乾にぺこりと頭を下げた。
　そして、ちょっと小走りになって、校門近くで小夜歌に追いつく。
　まだスタンガンの影響が残っているのか、小夜歌の歩みはどこか頼りなかった。
「……何か訊きたそうね。七瀬」
　健に視線だけよこして、小夜歌が言った。
「うん……。あの人、どういう人？」
　ちら、と後ろを振り向きながら、健が訊く。
「お兄ちゃんの仕事仲間……。だから、ロクな人じゃないわよ」
　自分を救ったはずの人間に対する痛烈な一言に、健は、その目をちょっと見開いた。

　健は、まだ少し辛そうな小夜歌を、彼女のマンションにまで送っていった。
　小夜歌の額はじっとりと汗に濡れ、頬は熱でもあるような感じで赤い。
　そんな小夜歌をかばうようにしながら、鍵を借りて部屋のドアを開ける。

Veon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

　小夜歌が玄関口で留守番電話をチェックすると、少年とも少女ともつかない声が、今日は帰らない旨を伝えていた。
「村藤先生のトコか……円ってば、ここんとこ毎日ね」
「誰？」
「弟のこと。……あたし、シャワー浴びる」
「うん。それじゃあ……」
「帰らないで！」
　そう言われて、健はきょとんとした表情で立ち止まった。
「えっと……お茶でも淹れるから……待っててよ……」
　自分自身の言葉に驚いたような表情で、小夜歌がそう言う。
「うん」
　素直に肯いて、健は丁寧に靴を脱いだ。

　案内された小夜歌の部屋のクッションに座っていると、遠くから、かすかにシャワーの音が聞こえた。
　どきどきと心臓が高鳴るのを感じながら、健は思わずうつむいてしまう。
「……」
　手に、まだあの感触が残っている。
　鉄パイプで人の頭を叩いた、意外なほど硬い感触だ。
　後悔はない。そして、自分自身で呆れるほど、冷静だった。
　どのような結果が生じようと、それを受け止める。そんな覚悟が、健の胸にあった。
「健クン」
　ドアの開く気配と同時に名前で呼ばれて、健ははっと顔を上げた。
　そして、慌てて顔を伏せる。小夜歌は、まだしっとりと濡れた素肌に、バスタオルを巻いただけの姿だったのだ。
「立って……こっち見て、健クン」
　小夜歌に命令されるのは慣れている。が、健は何か違和感のようなものを感じていた。
　小夜歌の、いつも凛と澄んだ声が、まるで不安におののく子供のそれのように、震えている。
　立ちあがった健が顔を上げたとき、その胸に、ほとんど半裸の小夜歌がしがみついた。
「ちょ……」
「抱いて、健クン……」
　小夜歌が、ひどく切迫した声で言う。
「結城さん……？」
「お願い……小夜歌を犯して……めちゃめちゃにして……」
　健の白いワイシャツに顔を擦り付けるようにしながら、小夜歌が言う。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

そして小夜歌は、体を健に押しつけたまま、その左手を右手で自分の股間に導いた。
「あ……」
小夜歌のそこは、驚くほどに熱く潤んでいた。
これまで感じたことのない、柔らかく淫靡な感触に、かあっ、と健の頭に血が昇る。
「あたしね……初めての人が、お兄ちゃんで……レイプだったの……」
頭をくらくらさせている健に追い討ちをかけるように、小夜歌はひどく頼りない声でそう告白した。
健は、小夜歌の言葉の内容を、整理しきれない様子である。しかし、小夜歌は構わず続けた。
「それ以来……ダメなの……無理やりされそうになると……あたし……」
小夜歌が、顔を上げる。そうすると、あまり身長差が無いために、二人の顔はすぐ近くにあった。
健が今までに見たことのある小夜歌と、全く印象の異なる少女が、そこにいた。
その切れ長の目は涙を溜め、半開きになった唇は、かすかに震えているようだ。
身の内に湧き起こる欲情のためか、目元がぽおっと染まっている。
「僕は……」
頭を混乱させながら、健は、ようやく言った。
「僕は、そのお兄さんの、代わりなの？」
小夜歌は、答えない。ただ、すがるような目で、健の顔を見つめるだけだ。
その沈黙が、何よりも雄弁に、真実を告げている。
健は、これまで感じたことの無い激しい嫉妬に突き動かされて、小夜歌をベッドに押し倒した。
「きゃっ」
前触れの無い乱暴な仕打ちに、小夜歌が短く悲鳴をあげる。
そんな小夜歌の細い体を抱き締めながら、健はその唇を強引に奪った。
「ん、んぐ……んんン……ッ」
舌で口腔を蹂躙しながら、左手で肩を抱き、右手を脚と脚の間に差し入れる。
小夜歌のクレヴァスは熱く濡れながらめくれあがり、健の指に絡みつくようだった。
「ぷは……っ」
息が苦しくなるまでキスを続けた後、健はようやく唇を離した。
そんな健の、どこか悲痛な表情を、小夜歌がぽーっとした顔で見上げている。普段の彼女からは考えられない、呆けたような様子である。
健は、不可解な衝動の命じるまま、ぐい、と小夜歌のその部分に指を挿入させた。
「きゃうッ！」
小夜歌の細い体が弓なりに反りかえり、辛うじてまとわりついていたバスタオルがはだける。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

その形のいい乳房の頂点で、痛いほどに尖っている乳首を、健は口に含んだ。
ぐちゅぐちゅと音が出るほどに小夜歌の秘部を乱暴にまさぐりながら、左右の乳首を交互に吸い上げ、軽く歯を立てる。
「ン、ンうッ！　くッ！　んんんんンッ！」
小夜歌は、短い悲鳴のような喘ぎを漏らしながら、健の腕の中で身をよじった。
その秘めやかな部分からは止めどもなく熱い愛液が溢れ、健の右手を手首まで濡らす。
健は、小夜歌の右の乳首を、ちゅうううッ、ときつく吸い上げた。
「ひああアアアーッ！」
切なそうに眉を八の字に寄せながら、小夜歌が高い声をあげた。
健は、ちゅぽん、と音をさせて口を離し、赤く染まった乳首を、ぺろぺろと舐め回す。
「あっ、ああっ、あっ、ああ〜ン」
敏感になった部分への執拗な責めに、小夜歌は甘い喘ぎをあげる。
健は、胸の膨らみから顔を離して、そんな小夜歌の蕩けるような顔を覗きこんだ。
小夜歌の切れ長な目と、健のカールした睫毛に縁どられた目が、合う。
「健クン……おねがい……」
そう、おねだりをしながら、全裸の小夜歌が、健の学生ズボンの股間に両手を伸ばす。
健のズボンのその部分は、すでに熱い血液を充填させた強張りで、はちきれそうになっていた。
「あぁ……ス、スゴい……」
布地の上からでも分かるそのペニスの大きさに、小夜歌はかすかに怯えたような声で囁く。
健は、ちゅっ、ちゅっ、と小夜歌の首筋や胸元にキスを繰り返しながら、脱ぎにくそうに片手でズボンを脱いだ。
そして、トランクスを脱ぎ捨て、その巨根を露わにする。
それは、健の優しげな顔には似合わない勢いで、逞しく反り返っていた。
「お、おっきい……」
何度も見ているはずなのに、小夜歌は思わず口に出してしまった。
この剛直に貫かれることを想像したのか、小夜歌のそこが、じゅわり、とさらに愛液を分泌する。
両手を添えてもまだまだ先端が余る感じの巨根を、小夜歌は自らの秘裂に導いた。
「あ……ッ」
互いの靡粘膜の感触に、小夜歌と健が、同時に声を上げる。
「おねがい……コレで、小夜歌のここ、むちゃくちゃに犯して……」
あからさまなおねだりを耳にして、ますます頭と股間に血を昇らせながら、健はぎこちなく腰を前に進めた。
「あああああァ……ッ！」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

たっぷりと濡れているはずの膣内へのきつい挿入に、小夜歌は悲鳴のような声をあげる。
これまで想像もしなかった熱く甘美な感触にペニスを締め上げられ、健はぞくぞくとその華奢な体を震わせた。
「あひっ……ま、まだ、まだ入ってくるゥ……っ」
体の内側から強引に押し広げられるような感覚に、小夜歌は我知らずぽろぽろと珠のような涙をこぼしていた。
「結城、さん……」
そんな小夜歌の顔を茫然と見つめながら、健がつぶやく。
「あア……して……うんと、うんと乱暴にうごいてェ……」
罪悪感に苛まされながらも、小夜歌に抽送をねだられ、健は本能の命じるままに腰を使い出す。
「あああああアーッ！」
発達した雁首に膣内をずりずりとえぐられ、小夜歌の声が悲痛さを増した。
「あうッ！　ンあああッ！　ス、スゴい、スゴいいィッ！」
それでも、その苦痛を快感と感じているのか、小夜歌は健の体に両腕でしがみついた。
「もっと、もっとォ……もっと、小夜歌を犯してエ……！」
「あッ？　ああッ！　んあああッ！」
小夜歌のその部分に強烈に締めつけられ、健はまるで少女のような声を上げてしまった。
それでも、健は腰を叩きつけるような勢いで、激しくピストン運動を繰り返す。
ずん、ずん、ずん、ずん、と子宮口を硬いペニスで小突かれる重苦しい快感に、小夜歌はふるふるとかぶりを振った。
「ス、スゴい……ンああ……あう……さ、小夜歌、こわれちゃう……ひううッ……！」
「結城さん、結城さんッ……！」
濡れた髪を振り乱すようにして喘ぐ小夜歌に、健は繰り返し呼びかける。
二人の粘膜は摩擦によって熱を帯び、互いに粘液を分泌しながら、ひりつくような快楽を紡ぎ出した。
もはや健も、苦痛と快楽がごっちゃになり、区別がつかない状態だ。
ただ、何か強烈な衝動に突き動かされるまま、ことさら乱暴に腰の動きを速めていく。
「もう、ダメえ……ッ！」
膣内を並外れて大きなペニスで繰り返し突き上げられ、小夜歌はとうとうそう叫んだ。
「ダメ……ダメなの……さやか、もう、イク……イっちゃう……ッ！」
「ああ……結城さん……ッ」
小夜歌は、健の首にしがみついたまま、ふるふると首を振った。
「お、おねがい……さやかって、さやかって呼んで……」
そして、長い髪に隠れた健の耳に、切羽詰った声でそう囁く。
「さ……小夜歌さん……ッ！」

Neon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

　そう、叫ぶように言って、健は一際深くその巨根を突き入れた。
「ひあああああああああああああああああああああああああああアアアアアアアアアアアアーッ！」
　体の一番深いところを突かれ、小夜歌が体を大きく反らして絶叫する。
　その高い声を聞きながら、健も、その股間で熱く渦巻く欲望を解放した。
　そのペニスの大きさに相応しい大量の精液が、小夜歌の膣内に注ぎ込まれる。
「あッ！　あッ！　あッ！　ああアーッ！」
　その熱い体液に、体の奥底まで陵辱されているように感じて、小夜歌は歓喜の声をあげていた。
　そして、健の細い体を抱き締めながら、ぴくン、ぴくンと体を震わせる。
　その可愛らしい痙攣を腕の中に感じながら、健は、何度も何度も小夜歌の体内に精を放ち続けた。

（結城さん……小夜歌さん……か……）
　甘美なけだるさの中で、健は、ぼんやりと思っていた。
（そうだよね……お兄さんは、妹のこと、名字でなんて呼ばないもんね……）
（僕は……僕は……やっぱり……）
（でも……）
（それでも……僕は……君が……）

　はっ、と健は我に返った。
　いつのまにか、ベッドに仰向けになって横たわっている。
「あ……」
　脚の間に気配を感じて、健は上体を起こした。
「ふふふっ、お目覚めね」
　まるで獲物を狙うネコのような姿勢で、健の白い脚の間にうずくまった小夜歌が、悪戯っぽい表情で言う。その顔には、先ほどまで健に組み敷かれ、その巨根に蹂躙されていた気配は全く残っていない。
「ココは、とっくに起きてたけど」
　そう言って、小夜歌がその白く優美な指を添えた健のペニスは、すでに力を取り戻していた。
「あの……ゆ、結城、さん……」
　そう言いかける健に、妖しい笑みで答えながら、小夜歌は天を向くペニスに顔を寄せた。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「あッ……」
　亀頭の裏側の敏感な部分に口付けされ、健はぞくりと体を震わせた。
「特別に、ご褒美あげるね……健クン」
　そう言って、小夜歌はぱっくりと健のペニスの亀頭部分を口内に収めた。
「ンあああッ！」
　肘で上体を支えきれなくなって、再び健は仰向けになってしまった。
　生温かく柔らかい感触に包まれた亀頭を、かすかにざらつく舌が舐めまわす。
　さらに、舌先で鈴口をえぐられ、亀頭全体を吸引されて、健は切なげに身をよじった。
「ふふっ……健クンの、おっきくて、全然お口に入りきらないよ」
　そんなことを言いながら、小夜歌は、ペニスの先端を責めるのを中断し、浅ましく静脈を浮かせたシャフトに口付けを繰り返した。
「あううッ！」
　裏筋を舐め上げられ、健は少女のような声を上げてしまう。
「健クン……可愛い♪」
　頬を染めながら喘ぐ健にそういいながら、小夜歌はぬるぬるになった亀頭の表面を右手で撫でさすった。
　そして、少し首をかしげるようにして、竿の部分を横に咥え、ハーモニカでも吹くように舐めまわす。
「あァ……そ、そんなに、されたら……」
　呆気なく主導権を奪われ、健は、両手でシーツを掴みながら、いやいやをするように無意識に首を振ってしまう。
　小夜歌は、健のその部分からちょっと顔を離し、自らの唾液と先走りの汁で濡れたシャフトを、すりすりとやさしくしごき始めた。
「あうううう……ッ」
　もどかしいくらいに繊細な刺激に、健の細い腰がびくびくと動いてしまう。
「すごぉい……健クンの先っぽから、お汁がどんどん出てくるよ」
　自らのはしたない反応をあけすけに指摘され、健は羞恥に顔を耳たぶまで染めた。
　小夜歌は、竿への攻撃を休めることなく、ちろちろと亀頭の先端を舐めしゃぶる。まるで、甘いものの好きな少女がアイスクリームを舐めるような表情だ。
　自分のペニスが小夜歌の可憐な口を汚している、という罪悪感が、そのまま官能の電流となって、健の体を震わせる。
　小夜歌は、健の尿道口に唇を付け、まるで射精をねだるかのようにちゅうちゅうと吸引した。
「ひゃうううッ！」
　絶頂の予感に、健の逞しいペニスがひくひくとしゃくりあげる。
　しかし小夜歌は、右手でシャフトをしごきながら、左手でぎゅっと輸精管を圧迫した。

Zen PDF Driver Trial
www.zen.com.tw

「あアアーッ！」
　射精を強引に中断させられ、健が悲痛な声をあげる。
「ダメよ、健クン……まだまだ楽しませて……」
　きらきらと欲情に目を輝かせながら、小夜歌が言う。
　健は、こみあげる射精感すら一瞬忘れて、その小夜歌の顔に見入ってしまった。
　とても自分と同い年とは思えないような、妖艶な瞳……。
　顔立ちが、年相応のあどけなさを残している分、その切れ長な目が湛えている光は、危険なほどに美しく感じられた。
　そんな健の想いを知ってか知らずか、小夜歌は、健の顔を見つめたまま、淫らな口唇愛撫を本格的に再開させる。
「コレで、小夜歌のこと、犯したんだね……」
　そう言いながら、小夜歌は、亀頭部分を口に咥え、くるくると舌を回して大胆に刺激した。
　そして、左手の親指と人差し指で輪を作って、ペニスの根元を締め付けながら、右手でシャフトをしごきあげる。
　さらには、ペニス全体をじゅぶじゅぶと音を立てながらしゃぶりあげ、右手で陰嚢や内股を撫でさするのだ。
「ああッ！　ゆ、結城さん！　結城さんッ！」
　まるで釣り上げられた魚のように、華奢な体をびくびくと痙攣させ、健は高い声をあげた。
「お願い……許して……イ、イかせてエッ！」
「ダーメ♪」
　健の悲痛な言葉に残酷にそう告げて、小夜歌は、健のペニスにぴったりと頬を寄せた。
「あはっ……おっきくて、熱くって、ぴくんぴくんしてる……」
　小夜歌は、半ば目を閉じ、うっとりとした口調で言った。
「コレ……小夜歌のものだからね……」
　そして、どこか熱に浮かされたような口ぶりで、そんなことを言う。
「ゆ、ゆうきさぁん……く、くるしい……ゆるしてよぉ……」
　健の声は、もはや涙声だ。
　そんな健の情け無い声に、ますます頬を上気させながら、小夜歌は右手でシャフトを握り締め、本格的にしごき始めた。
「あ、ああ、あ、ンあああああアアアーッ！」
　ぴゅるっ、ぴゅるっ、とカウパー氏腺液を漏らしながら、射精を求めて健の体がのたうつ。
　小夜歌は、その汚穢な粘液を舐め取るように、鈴口や雁首を硬く尖らせた舌でえぐった。
「ンッ！　んぎッ！　くッ！　んわアッ！」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

　健は、断続的に短い悲鳴をあげたあと、呼吸困難に陥ったのか、ぱくぱくと口を開閉させた。
　その、少女のような目からは大粒の涙がこぼれ、大きな瞳は焦点を結んでいない。
「君は……もう、あたしのもの……」
　小夜歌の宣言に、健は狂ったように何度も何度も肯いた。
「あたしの好きなときにオモチャになって……あたしの言う通りに、あたしのことを犯すのよ……」
「……は……はい……ッ……！」
　健は、肺の中を空っぽにしながら、どうにかそれだけを言った。
「いいコね……」
　小夜歌は、恍惚とした表情で、健の亀頭を咥え込んだ。
　そして、ようやく左手による戒めを外す。
「……ッ！」
　視界が真っ赤になるような激痛を感じながら、健は凄まじい勢いで射精した。
　激痛は、すぐにその痛みを上回る快感となり、健の視界を純白に染める。
　呆れるほど強烈に喉奥を精液で叩かれながら、小夜歌はうっとりと目を閉じていた。
　そして、口内に溢れる青臭い粘液を美味しそうに飲み干しながら、相手を絶頂に導いたときに訪れる、強烈な官能の波に身を任せる。
　陵辱されたときのそれとはまた別の、征服感に満ちた絶頂を、小夜歌は、感じていた。

　健が再び目を覚ますと、傍らで小夜歌が眠っていた。
　普段の冷たい感じの顔とも、自分を責めるときの妖艶な顔とも、頼りなく挿入をおねだりするときの顔とも違う、安心しきったような寝顔。
　そんな、無垢な表情の小夜歌と、同じシーツにくるまっていることに気付いて、健はちょっと考え込んだ。
（僕じゃない……ってことは、結城さんの方から、潜りこんできたのかな？）
　そう思うと、小夜歌への愛しさに、胸が痛いくらいに切なくなる。
　健は、まるで壊れ物を扱うように、そっと小夜歌の肩を抱き、その顔に唇を寄せた。
　そして、少しためらった後に、ちゅっ、と額にキスをする。
「……えっち」
　そう言われて、顔を真っ赤にして体を離すと、薄目を開けた小夜歌がくすくすと笑っていた。
「ご、ごめん、結城さん……あの……」
　ひどくうろたえながら、健が生真面目に謝る。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「健クンてば……」
　寝言のような口調でそう言った後、小夜歌は、再び瞳を閉じて眠り込んでしまった。
「……」
　健は、何となく毒気を抜かれたような感じで、短く嘆息した後、小夜歌の頭の下に、きちんと枕を入れてやった。少女らしいデザインの、大きなふわふわの枕だ。
　そして、同じ枕に頭を預け、目を閉じる。

　――健は、眠りに落ちる直前に、額に小夜歌の唇を感じたような気がした。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

4

館の応接間で、二人の男が向かい合って座っている。
結城遼と、乾孝晃だ。
やや旧式のエアコンが、人工的な冷気を室内に送り込んでいる。窓の外の夜空では、下弦の月が昇りかけていた。
テーブルの上のコーヒーに、乾は、手を付けようともしない。
「とりあえず、妹を助けてくれた礼は、しなきゃならないな」
そう、口を開いたのは、遼だった。
「気にするな。忘れてくれていいさ」
乾が、薄い唇を皮肉げに歪めながら、答える。
「そういうわけにはいかない」
遼の口元にも、わずかな笑みが浮かんでいた。
「俺は、あんたがしてくれたことを、忘れるつもりはないよ」
「……引っかかる言い方だな」
そう言いながら、乾は脚を組み直した。
「乾さん……あんた、修正前のビデオを、西の連中に横流ししたね」
「……」
遼の言葉に、乾は沈黙で答えた。
前髪に隠れた遼の目と、黒眼鏡の奥の乾の目が、互いに鋭い眼光をぶつけ合う。
「あんたは、例の薬の流通ルートを探るために、素性を隠して、わざとビデオを横流ししした。無論、俺に内緒でね」
「……」
「そして、作戦は基本的に成功した。ビデオの流通ルートを洗うことで、例の薬の流通ルートも浮かび上がり、あんたはそれを一つ一つつぶしていった。ただ、あの橘とかいう教師を通じてのルートについては、円の情報の方が早かったようだがな」
「……それが、どうした？」
開き直ったような乾の台詞に、遼は肩をすくめて見せた。
「どうもしない……と、余裕を見せたいところだったが、そうもいかない。あんたが、俺の顔が出てるビデオを横流ししたせいで、俺は下らん厄介事を抱え込んじまったし……俺という人間の存在に気付いた橘は、妹にまで手を出そうとした」
「その件なら、フォローしといたろ？」
乾が、悪びれもせずに言う。
「それは、順序が逆なんだろう？　乾さん」
遼は、いったん言葉を切り、続けた。

Xeon PDF Driver Trial
www.xeon.com.tw

「あんた、橘の身柄を押さえたから、小夜歌をエサにする必要が無くなっただけなんじゃないか？」
「……」
「そもそも、俺と小夜歌の関係に関する情報を裏で流したのだって、あんたなんだろう？――槙本の身柄を押さえるときに、俺をエサにしたように」
　遼は、前髪に隠れた額の傷に、そっと指先で触れながら、続けた。
「俺が、槙本に襲われたときに受け取りに行ったのは、あんたが用意した車だったし……橘の家にあったビデオの流通の担当は、あんただった。そして、橘の息のかかったガキが小夜歌にちょっかいかけたときに駆けつけたのも、あんただ」
「……」
「乾さん。あんた、ちょっと貧乏性だよ。何もかも自分でやりすぎだ」
　そう言われ、乾は観念したように両手を上げた。
「分かった。認めよう。俺の負けだ」
「……なら、あの誓約書を、返してもらおうか」
「ああ。実は、もう用意しているんだ」
「準備がいいな」
「お前さんに呼びつけられたときから、覚悟はしてたさ」
　そう言いながら、乾はサマージャケットの内懐に手を差し入れた。
「ゆっくりだ」
　油断無く、遼が言う。
「分かってる」
　そう答えながら、懐から出した乾の手にあったのは、拳銃などではなく、白い封筒だった。その中に、遼が組織の専属になることを記した誓約書が入っているはずだ。
　遼が、その封筒に右手を伸ばす。
「！」
　突然、乾が手を引っこめた。
　遼の右手の、人差し指と中指の間に、鋭い針が覗いている。
「な、何をした？」
　そう訊く乾の声は、さすがに硬かった。
「く……薬、か……」
　そう言いながら、針を刺された右手の甲に口を寄せ、血を吸い出そうとするが、その動きはひどくぎこちない。
「安心しろ。命にかかわるようなモノじゃない」
　そう言いながら、遼は、応接セットのテーブルの上に落ちた封筒を拾い上げ、中身を確認した。
「しばらく体が痺れるだけさ」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「ゆ、結城……お前……」
　歯を食いしばる乾の目の前で、封筒を丁寧に引き裂きながら、遼は言った。
「あんたは照れ屋だからな。礼をするのに、逃げられたら立場が無い」
「礼……だと……？」
「言ったろう。妹を助けてくれた礼さ……。千鶴」
　遼の呼びかけに答えるように、応接室の扉が、ゆっくりと開いた。
　そこに、健康的な小麦色の肌の、ショートカットの少女が立っていた。首に、黒い革製の首輪を付けているのを除けば、一糸たりとも、その均整の取れた肢体にはまとっていない。
　さらには、その股間にあったはずの恥毛も、綺麗に剃り落とされてしまっており、薄紅色のスリットがかすかに覗いていた。
「橘の妹だよ。ひょんなことから知り合いになってね」
　にやり、と歪んだ笑みを浮かべながら、遼は少女――千鶴に首を振った。
　千鶴は、はにかむような微笑をその顔に浮かべながら、こっくりと肯いて、乾に近付いていく。
「一通りの躾はしておいた。楽しんでくれ」
　そう言って、遼は、乾の返事を待たずに、応接室から出た。
　ソファーに座ったまま、体を動かすことのできない乾に、ほとんど全裸の千鶴がしなだれかかる。
「乾さま……」
　どこか濡れたような声で、千鶴が言う。
「よ、よせ、お前……」
　そう言いかける乾の唇に、千鶴は唇を重ねた。
　そして、恥じらうような表情を浮かべながらも、舌を別の生き物のように蠢かせ、乾の口内を刺激する。
　ぴちゃぴちゃという、扇情的な湿った音が、応接室に響いた。
「ん、んふ……んむ……くうン……」
　千鶴は、乾の頭を抱えるようにしてディープキスを続けながら、主人に媚びる子犬ような鼻声を漏らす。そして、そのスレンダーな体を、すりすりと乾の服の布地にこすりつけた。
　小ぶりながら形のいい乳房の頂点で、ピンク色の乳首が次第に尖っていく。
　ようやく、千鶴が口を離した。一瞬、二人の唇の間に、唾液の糸が細い下向きのアーチを描く。
「気持ちよかったですか？　千鶴のキス……」
　心持ち首をかしげるようにしながら、悪戯っぽい表情で、千鶴が訊いた。
　そのすらりとした脚は折りたたまれ、ソファーの上で乾の腰をまたいでいる。そして、

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

その小さめのヒップが妖しくうねり、股間で股間を布越しに刺激しているのが分かった。
「やめろ……俺は、お前の兄を……家族を破滅させた、張本人だぞ」
　乾が、やや呂律の怪しい口調で、どうにかそう言ってのける。
「そうですね……だから、あたし、帰る場所ないんですよ……」
　そう言う千鶴の口調は、どこか寂しげだった。
「あたし、もう、誰かにすがって生きていくしかないんです……」
　そんなことを呟きながら、乾のごつごつした胸板に頬を寄せる。
　乾は、非常な苦痛に耐えているかのように、きつく歯を食いしばった。
　千鶴は、少しずつ、体を下にずらしていった。そして、絨毯の敷かれた床に両膝をつき、乾の両脚を開いて、その間に体を置く。
　千鶴の、やや吊り気味の目のすぐ前で、乾の黒いスラックスの股間が膨らんでいた。
「はぁ……っ」
　千鶴は、うっとりと息を吐きながら、その部分の布地に顔を寄せる。
　そして、細い指先でホックを外し、口だけでファスナーを下ろしていった。牡の匂いが、千鶴の鼻孔をくすぐる。
　千鶴は、剛直の形に盛りあがったブリーフから、唇と歯と舌を使って、乾のペニスを外に解放した。
　赤黒く充血したそれは、やや細身ながら鋭く反りかえり、兇暴なまでにエラを張っている。
　千鶴は、瞳をきらきらと輝かせた後、目を閉じてその亀頭部分を頬張った。
「くっ……」
　乾のうめき声に、ぴちゃぴちゃと千鶴が口の中でペニスに舌を絡める音が重なる。
　凛々しい眉を切なげに寄せながら、ボーイッシュな少女が一心に牡器官に奉仕するその姿は、男の嗜虐心を刺激するのに充分だ。
　しかし乾は、苦行に耐える修行者のような表情を、そのごつい顔に浮かべている。
　一通り、ペニスを口内で愛撫した後、千鶴は、ペニスの先端をちゅうっと吸い上げた。そして、亀頭の表面に、ついばむようなキスを繰り返す。
　桜色の可憐な唇と、赤黒く醜悪な男根が、同じ唾液と粘液に濡れていく様は、無残なくらいにエロティックだ。
　さらに千鶴は、懸命に舌を伸ばし、静脈の浮いたシャフトを舐め上げる。
　風俗嬢顔負けのテクニックを用いた少女の口唇愛撫に、乾は、歯を食いしばって耐えた。
　しかし、その鈴口からは、いわゆる我慢汁が呆れるほどに溢れてしまっている。
　千鶴は、まるで童女が好物のキャンディーを舐めるような表情で、ぺろぺろとその汚穢な体液を舐めとった。
「んふ……」
　一転、妖艶な笑みを濡れた唇に浮かべながら、正座の姿勢だった千鶴が膝立ちになる。

Neon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「遼さまが言ってましたよ。……乾さま、女性の経験、無いんじゃないかって」
　乾は、屈辱に、声にならない唸りをあげた。
「ちょうどいいですね……あたしのアソコも、男の人、受け入れたこと無いんです」
　そう言いながら、再び、ソファーに座ったままの乾の腰を膝でまたぐ。
　そして、すでに熱い愛液で潤ってるクレヴァスに、乾のペニスの裏側をぬるぬるとこすりつける。
「あたし、お尻もけっこう自信あるんですけど……やっぱ、最初は前ですよね」
　そんな、あからさまなことを言う千鶴に、乾は屈辱以外の何かを感じているようだった。
　それは、かすかな恐怖であったかもしれないし、甘美な堕落の予感だったかもしれない。
　ふっ、と乾の体の緊張が解けた。
「入れます、ね……」
　丁寧にそう宣言して、千鶴は、ペニスの先端を、熱いぬかるみの中心にあてがった。
　そして、ゆっくりと腰を落としていく。
「ンあ……はァっ……あァン……」
　まるで、挿入の感覚をじっくりと味わおうとするかのように、ディルドーにしか侵入を許したことのない千鶴のそこは、乾のそれをことさらゆっくりと飲み込んでいった。
「ンぁ〜ん……や、やっぱり、男の人のって……ぜんぜん、ちがう……っ」
　乾の逞しい肩を両手でつかみながら、千鶴は弓なりに背を反らした。
　発達した雁首がずりずりと膣壁をこすり上げる感触が、二人の性感を鋭く高めていく。
　ようやく、千鶴は乾のペニスを全て受け入れた。
　とろとろと隙間から溢れる愛液が、乾の衣服を濡らしていく。
「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ……」
　千鶴は、短く喘ぎながら、乾の首に腕を回し、その頬に自らの頬を寄せた。
　瑞々しい弾力のある胸の膨らみが、布越しに乾の胸を圧する。
　エアコンの音をバックに、二人の呼吸音が混じりあった。
「動き、ます……」
　千鶴はそう宣言して、ゆっくりと腰を使い始めた。
　遼に調教されたとは言え、対面座位どころか、膣内に男を迎え入れること自体、初めての経験である。千鶴の動きは、どことなくぎこちない。
　それでも千鶴は、かすかな痛みを伴う快感に溺れそうになりながらも、健気に腰を動かした。
　にちゅっ、にちゅっ、にちゅっ、にちゅっ……という淫猥な音が、かすかに響く。
「あうン……き、きもちいい……」
　千鶴は、その凛々しい顔に、蕩けるような恍惚の表情を浮かべながら、甘たるい声で訴えた。
　熱い吐息が、乾の耳朶をなぶる。そして千鶴も、乾の荒い呼吸を、首筋に感じていた。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

千鶴の動きは、次第にスムーズになっていった。
くいくいと可愛く踊る小ぶりなヒップが、イヤらしくぬらつく乾の肉棒を貪っている。
びくっ、と乾の腕が動いた。どうやら、薬の効果が切れてきたらしい。
「く……」
乾は、小さくうめきながら、まだぶるぶると震えている手で千鶴の肩をつかみ、その体を引き剥がした。
「あうン……」
結果として、乾のペニスによってより深く体内をえぐられ、千鶴が媚声を漏らす。
乾は、その千鶴の細い首を、両手でつかんだ。
ごつい腕が、首輪の上から、しなやかな喉を締め上げる。しかし、その力はまだ弱く、千鶴の呼吸をわずかに阻害するのが精いっぱいだ。
だが、薬の効果が切れれば、千鶴を絞め殺すどころか、首の骨を折ることすら、乾には造作のないことである。
「あぁ……」
首を圧迫されて、意識を朦朧とさせながら、千鶴はうっとりとした喘ぎを漏らした。
「おねがい……もし、ころすなら……イったときに、ころしてください……」
そう、ややかすれた声で訴えながら、千鶴はますます大きく腰をグラインドさせた。
首を締められている千鶴よりも、締めている乾の顔のほうが、苦痛に歪んでいるように見える。
「うぅン……んくッ……ああッ……！　も、もうすぐ、もうすぐイキます……ッ！」
乾の服の布地を小さな拳で握り締めながら、千鶴は切羽詰った声をあげた。
その腰はますます激しく動き、乾のペニスを射精へと追い込んでいく。
「あ……あァ……あはァ……ぁ……！」
絶頂を間近に控え、千鶴は体をのけぞらせて天を仰いだ。
乾の男根をぴっちりと締め付ける柔らかな膣肉が、びくびくと蠕動を始める。
「イク……ち、ちづる、ちづる、イクう……ッ！」
千鶴の高い絶頂の声を聞きながら、乾は、たまらず自分から腰を突き上げていた。
そして、千鶴の体の中へ、大量の精を迸らせる。
その手は、千鶴の肩を、しっかりと抱いていた。
「ああ、あ、あああああああああああああああああああああアアアアアアアアアアアアァーッ！」
膣内深くで熱い精液が何度も弾ける始めての感覚に、千鶴は、自由になった喉で高く叫んでいた。

呆けたような表情で、乾は天井を見つめていた。
その足元で、ひざまづいた千鶴が、乾のペニスに付着した性交の残滓を、かいがいしく舐め取っている。

Yeon PDF Driver Trial
www.yeon.com.tw

と、口内にペニスを収めていた千鶴が、閉じていた吊り気味の目をちょっと見開いた。
そして、目だけで悪戯っぽく微笑みながら、乾の顔を盗み見る。
乾も、顔を下ろし、千鶴の瞳を見つめた。
ゆっくりと唇をスライドさせ、千鶴が乾のシャフトを露わにしていく。千鶴の唾液に濡れたそれは、再び力を取り戻していた。
ちゅぽん、と小さく音をさせて口を離した後、千鶴は、ペニスにそっと指をからませた。熱い鼓動が、手の平に伝わってくる。
「今度は、お口で最後までしましょうか？　それとも……お尻で、してみます？」
頬を赤らめながらも、小悪魔じみた表情で、千鶴が訊く。
その声を聞きながら、乾は、自らが遼の用意した鎖に完全に捕らえられてしまったことを、否応無く思い知らされていた。

「大丈夫でしょうか、千鶴ちゃん……」
同じ頃、膝枕に遼の頭を乗せ、耳掃除をしながら、由奈はぽつりとつぶやいた。
遼の部屋のベッドの上。由奈は髪を解き、奇妙にディフォルメされたパンダの柄のパジャマを着ている。遼は、黒のＴシャツにトランクスだ。
「気になるのか？　あいつのことが」
「えっと、少し……」
耳掃除を終わらせ、耳かきをティッシュでぬぐいながら、由奈が答える。
「……」
遼は、相変わらずの前髪で表情を隠しながら、唐突に体を起こした。
「きゃあン！」
そして、由奈の小さな体を押し倒す。由奈の、ノーブラの豊かな胸が、ぶるんと揺れた。
「情が移ったのか？」
冗談めかした口調で、遼が訊く。
「そ、そんなこと、ないです……」
両手首を上から押さえつけられながら、怯えたような声で、由奈が言う。
遼は、由奈の脚の間に膝を割りこませ、ぐい、と股間を圧迫した。
「あうぅ……」
突然の乱暴な仕打ちに、しかし、由奈のアソコは、熱く反応してしまう。
「由奈は淫乱だからな」
由奈の恥丘をぐりぐりと膝で蹂躙しながら、その可愛らしい耳たぶに口を寄せ、遼は言った。
「ここに突っ込まれるんだったら何だってイイんだろ？」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「そ、そんな……」
　柔らかそうな頬を赤く染めながら、由奈は涙声で抗議する。
　遼は、由奈の細い両手首を左手だけで押さえつけ、右手で乱暴に股間をまさぐった。
「あ、ああッ……」
　由奈が、うろたえたような声をあげる。
「もう、こんなに熱くしてるじゃないか」
　そう言いながら、パジャマのズボンの中に、右手を差し入れる。
　ショーツの中まで潜りこんだ遼の指先を、熱い愛液がぬるりと濡らした。
「洪水だぞ、由奈」
「イ、イヤあぁン」
　羞恥に、由奈が顔を背ける。
「イヤらしい女だな、お前は」
「だ、だってだって、ご主人様がァ……」
　子供のような声でそう言う由奈の秘所を、遼は残酷にえぐった。
「きゃうううううン！」
　びくン、と由奈の小さな体が震える。
　くちゅくちゅと湿った音をたてさせながら、ひとしきりクレヴァスを弄んだ後、遼は由奈のズボンとショーツを一気にずり下ろした。
「あッ……！」
　明るい蛍光灯の光の下に、薄い陰毛をべったりと愛液で張りつけた恥丘を晒されて、由奈はますます顔を赤くする。
「いくつになっても子供みたいなオマ×コだな」
　そう言いながら、遼は、再び由奈のその部分を指で嬲る。遼の言葉通り、来年は成人式を迎える女性のものとは到底思えない、見ている方が恥ずかしくなるような幼いスリットだ。
　遼は、その幼い外見とは裏腹に、大量の牝のシロップを分泌している由奈のそこに、右手の指を游ばせた。
「あ、あッ、あン、あうッ、あ〜ン」
　由奈の感じる場所を知り尽くしている遼の指が、あっという間に由奈の性感を高めていく。
「そのくせ、佐久間や千鶴のを咥えこみやがって……」
　いきなり、遼は、由奈の最も敏感な肉の芽に爪を立て、容赦無く捻りあげた。
「きゃアアアアアアアアアアーッ！」
　凄まじい激痛に、由奈は、まるで電気ショックにあったかのように、体を弓なりに反らせる。
「ア、ア、アァ、ア……」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

ぱくぱくとその小さな口を開閉しながら、見開いた大きな目から涙をこぼす。
そして、かくん、と由奈の全身から力が抜けた。痛みのあまり、失神してしまったらしい。
ちょろちょろちょろ……と音を立てながら漏れ出る小水が、遼の右手を濡らした。
「んぶっ？」
遼は、由奈の可憐な口に、右手の指をねじ込んだ。
「ん、ん、んん、んんん〜ッ」
由奈は、訳もわからず涙をこぼすばかりだ。
「お前が汚したんだ。綺麗にしろ」
「んぷ……ふ、ふぁい……」
くぐもった声でそう返事をして、由奈は健気に舌を使い始める。
自分の愛液と尿で濡れた遼の指は、恥辱と被虐の味がした。
遼が、由奈の両手を解放する。すると由奈は、両手で遼の右手を捧げ持つようにして、一心にその指を舐めしゃぶり、指の間に舌を這わせた。
まるで、犯した罪を懸命に償おうとしているような、いたいけな表情である。
遼は、前髪で隠れた両目を獣欲にぎらつかせながら、左手でトランクスを脱ぎ捨てた。そして、右手の指で由奈の口内を弄びながら、熱く濡れてめくれあがったスリットに、いきり立つ亀頭をあてがう。
そして遼は、何の前触れも無く、一気に由奈を貫いた。
「ンあッ！」
たまらず、由奈は遼の指を口から離してしまう。
遼は、ペニスを熱い膣内に深々と挿入したまま、両手で由奈のパジャマのボタンをむしりとるように外していった。
その、中学生のような容姿にはアンバランスなほどの巨乳が、目の前に現れる。
遼は、その白い双乳に指を喰いこませ、柔らかな感触を存分に味わった。
そして、由奈の内部を逞しいペニスで突き上げるようにしながら、乱暴に腰を使い始める。
「あッ！　あうッ！　はッ！　きゃううッ！」
その抽送に合わせて、悲鳴のような高い声を由奈があげる。
「由奈……由奈……っ！」
遼は、由奈の名を呼びながら、両手の親指と人差し指で、くりくりと乳首を転がした。
そして、みるみる尖ってくるその部分を、しごくようにして刺激する。
「あいッ！　す、すごい……それ……すごいですぅ……！」
ぴりぴりと痺れるような快感を、由奈は高い声で訴えた。
「感じるか？　由奈……」
「か、かんじます……おっぱいと、オ、オマ×コが……ア……あうぅ……ッ！」

Neon PDF Driver Trial
www.xeon.com.tw

乳首を摘まれ、そのまま大きすぎる胸の膨らみを摘み上げられるようにされて、由奈はふるふるとかぶりを振った。
「いた……い、いたい、です……ッ」
「痛いのがいいんだろう？　由奈は、変態のマゾ娘だからな」
「あうン……そ、そう、ですゥ……ゆうなは……へ、ヘンタイですう……」
由奈は、苦痛と屈辱に涙をこぼし続けながらも、媚びるような甘い声でそう答えた。
その由奈の言葉を証明するかのように、遼が乳首を捻りあげるたびに、由奈の靡肉はきゅんきゅんと収縮し、たまらないほどに遼のペニスを締め付ける。
「く……うっ……！」
遼は、不覚にも声を漏らしながら、下腹部に力を込め、最初の射精感をどうにかやりすごした。
そして、由奈に覆い被さり、その柔らかな体を、しっかりと抱き締める。
「ああ……ン」
由奈は、幸せそうな声をあげて、遼の体を抱き返した。
遼は、非常な努力を持って動きそうになる腰を制止し、呼吸を整える。
そして、どうにか落ち着いたところで、唇を重ねた。
「あむ……ン……んふン……んんーン……」
由奈は、媚びるような鼻声を上げながら、遼のキスを受け入れた。
そして、んく、んく、んく、んく……と可愛く喉を鳴らしながら、口内に注ぎ込まれる遼の唾液を、美味しそうに飲み込んでいく。
さらに、ぴちゃぴちゃと舌を絡め合い、たっぷりと互いの舌を吸い合った後に、ようやく二人は顔を離した。
「はあァ……」
ぽわーん、とした顔で、由奈は遼を見つめた。
「きもちいい……てんごくに、いるみたい……」
舌足らずな声でそんなことを言いながら、由奈は、うっとりと目を閉じて、遼の胸に下からキスを繰り返した。
「やっぱり、ごしゅじんさまのセックスが、いちばんきもちいい、ですゥ……」
はにかむようにそう言いながら、ちゅっ、ちゅっ、と口付けする。
「由奈……」
遼は、照れたような、そして自嘲するような、そんな複雑な笑みを浮かべた後、抽送を再開させた。
ゆっくりと、しかし力強く、腰を動かす。
「あ、ああア、はわア……ッ。す、すごいィ……」
弱すぎも強すぎもしない、体内を優しくえぐるような遼の動きに、由奈は声を震わせた。
圧倒的な官能の波が、ぐんぐんと由奈を高みへと押し上げていく。

Neon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

　それとともに、遼の腰の動きも、少しずつ激しくなっていった。
「き、きもちイイ……ごしゅじんさまのオチンチン、きもちイイ……ッ！」
　由奈は、怯える子供のように遼の体にしがみつきながら、そう訴えた。
　ますます、遼の腰の動きが速まっていく。
「あ、あッ！　あ！　イ、イクッ！」
　最初の絶頂が、由奈の小さな体を痙攣させた。
　しかし、遼の動きは止まらない。
「あうッ！　はッ！　ンあッ！　あうううッ！」
　立て続けに絶頂に追い込まれ、由奈は遼の腕の中でぴくぴくと体を震わせた。
「ダ、ダメえ！　ダメですぅ！　ゆうな、またイっちゃう……ッ！」
　ずっ、ずっ、ずっ、ずっ……とペニスが膣肉を容赦なくえぐる度に、由奈は髪を振り乱して絶頂を訴える。
「あいっ！　ひいいッ！　だ、めえ……ッ！　ああーッ！　こ、こんな……こんなの……！　ゆ、ゆうな、ゆうな、おかしくなるううウーッ！」
　そんな由奈の悲鳴を聞きながら、遼は夢中になって腰を動かした。
「ああアーッ！」
　ぴゅうっ、と生温かな体液が、二人の下腹部を濡らした。つながったまま、由奈が潮を吹いたのだ。
「ダメぇ……ほんとに、ダメえぇ……！　あひイッ！　し、しんじゃう！　しんじゃうよおッ！」
　半ば本気で、由奈はそう叫んだ。
「ああア！　あッ！　んぎッ！　いッ！　あいいいいいいいいいッ！」
　ぴゅううっ、ぴゅううううっ、と透明な潮を吹き続けながら、由奈は、遼の背中に思いきり爪を立てた。
「く……ッ！」
　その痛みを引金にしたかのように、遼は、溜まりに溜まった欲望をとうとう解放した。
「あああああああああああああああああああああああああああああああああああああああアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」
　大量の熱い精液が体内にびゅるびゅると注ぎ込まれ、どくどくと膣口とペニスの隙間から溢れていく感触を、由奈は、凄まじい絶頂の中で確かに感じていた。
　しかし、すぐに頭の中が真っ白になって、何も分からなくなる。
　そして、やがて光は闇に転じ、優しく由奈の意識を包みこんだ。
　ただ、遼の心臓の鼓動だけが、かすかに聞こえてくるように感じられる。
（ごしゅじん、さま……）
　完全に意識を失ってしまう直前に、由奈はかすかに思った。
（うれしい……ごしゅじんさまに、やきもち、やかれちゃった……）

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

　そして、そんなことを考えている自分にちょっと呆れながらも、由奈は、幸せな眠りの中に沈んでいくのだった。

終

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw